
LaLa7 ～ 深淵の帝國と硝子の世界～

皐月二八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LaLa7〜深淵の帝國と硝子の世界〜

【Nコード】

N4522Q

【作者名】

皐月二八

【あらすじ】

西暦1958年。史実と違う歴史を辿り、大国となった日本帝國。そんな中、新米海軍少尉藍原は、一人の少女と出会う。そしてそれをきっかけに、日本帝國を始めとする『世界』の『現実』は、奇妙に、しかし確実に『何か』が変わっていく……。注）作中に登場する兵器はほとんどがオリジナルで、作者の妄想の産物です。注）5/9、タイトル変更しました。

第1章あらすじ：日本帝國は中華大陸に火種を残しつつも、仮初の平和の中にいた。しかし、それはあっけなく――何の引き金もなく、

崩れていった。

プロローグ 女傑と海神（前書き）

今回はプロローグです。

基本的に、作中に登場する兵器のデータは書かず、少し描写するに止めるつもりです。

また、今作の日本帝国の技術力は史実よりも発展しております。

プロローグ 女傑と海神

「シスター・サラ」という愛称で親しまれているそのフネは、正式名を『サラトガ』といった。

巡洋戦艦を改装した、現代型空母と呼ぶには旧式すぎる巨大な船体は、古臭いとも表現できる。

が、彼女を見つめる無数の瞳は、そんな思いなど全く抱いていなかった。

それは当然だろう。彼女を、旧式空母と馬鹿にする者など一人もない。

彼女は、太平洋戦争後、米合衆国海軍に残された、唯一の「戦前に就役した空母」なのだから。

姉妹艦は全て沈み、先輩達や後輩達も多くが沈んだ。数々の海戦を、傷つきながらも生き残った艦。

嘗ての敵である帝國国防海軍将兵ですら、尊敬して止まなかった浮かぶ城。

それが、「シスター・サラ」だった。

一九四五年から約四年間に渡って行われた太平洋戦争は、日米両国にとって決して忘れられない戦争となるだろう。史上最悪の悲劇として、だ。

しかしその後、ソヴィエドという共通の敵を見付けることで、日米関係はかつてないほどの蜜月時代を迎えていた。帝國と合衆国という二つの軍事大国は、世界を赤色に染め上げる悪魔と戦う義務を負わされたのだ。

合衆国相手に勝利、というよりは有利な講和までこぎ着けた日本帝國は、今や自然に「強国」の一つにカウントされるようになってい

った。

しかしそれは、アジアとオセアニアの防衛と共産主義の撲滅^{赤色}を任されるという代償を強いられる、塩辛い称号だった。

もつとも、すでにソヴィエドが連合国軍との戦争で崩壊、ロシア共和国となつてからは、帝國は強大な軍事力を保持しながらも、一応は平和を享受していたのだが。

そんな「シスター・サラ」は、現在日本有数の軍港である、佐世保^{させぼ}に錨を下していた。

付近には、星条旗を掲げた大型巡洋艦「サモア」が停泊し、その周囲は旭日旗を掲げた帝國国防海軍艦艇に囲まれていた。

戦前や戦時中では、決して見られなかった光景であるが、今ではイチイチ騒ぎ立てる者もない。

旭日旗を掲げる軍艦の中には、改大鳳^{かいたいほう}型航空母艦や神威^{かむい}型防空巡洋艦などの歴戦の艦もいれば、新鋭の雷鶴^{ニコーフェイスろいかく}型航空母艦や^{なぎかげ}風型駆逐艦も停泊していた。

その中で、一際目立つ大型艦が、ゆっくりと出師^{すいし}のために動いていた。それは決して張子の虎ではなく、獲物の喉笛を引き千切る、獰猛な豹だった。

スマートな艦影^{シルエット}に、一目見ただけで、啞然とさせる程の高角砲や対空機銃。そして何より、優美さと醜惡さを兼ね揃えた巨大な砲塔が

三基。

戦艦『駿河』^{するが}が、^{UNA O}アジアオセアニア連合艦隊の一員として、出撃しようとしていた。

西暦1958年、5月8日の出来事だった。

？ 鳴り響く海嘯

駿河型戦艦は、旧帝國海軍の大轉換の象徴ともいえた。^{するが}

つまり、“航空主兵論”への轉換と、所謂“防空屋”の誕生だった。

日本海海戦で辛勝し、戦艦の攻撃力に疑問を抱いていた旧帝國海軍は、新兵器として航空機と潜水艦に目を付けた。

戦艦の砲撃力は確かに有効だ。が、相手も戦艦だった場合、猛烈な撃ち合いになれば双方ともに被害が出る。しかし、生産力に自信が持てない日本にとって、戦艦一隻の沈没・大破でも、無視できる損害ではなかった。

おまけに戦艦の主砲の命中率は、地理（単純な意味だけではなく両軍艦隊の陣形や、敵艦隊との相對距離など）や天候によって大きく左右される。そして見かけが派手な割には、それほど威力は高くない。というより、敵戦艦に有効打を与えるには、鬼のように撃ちまくる必要がある（と、当時は考えられた）。

そのため日本、というより旧帝國海軍は、戦艦の主砲に代わる新兵器を模索し始めた。

まず、注目されたのが、日本海海戦でも追撃戦にて戦果をあげた潜水艦（及び魚雷）。そして、WW？（第一次世界大戦）で頭角を現し始めた航空機であった。

日本全体が航空主兵論に傾くまでには、それほど時間はかからなかった。特に、帝國が米合衆国を仮想敵国と定めてからは、航空機のミソである、長大な太平洋を飛びまわれる機動性と、迅速な展開性が注目され始めた。

日露戦争の戦訓により、国力の増強と人命尊重論を掲げ始めた日本帝國は、航空機と潜水艦の整備にしのぎを削るようになる。

しかし、戦艦が完全に無用となることはなかった。強力な砲台のプラットフォームとしての役割や、何より強靱な防御力を駆使した“楯”としての役割と、乗務員に“安心感”を与える役割は捨てがたかった。

しかし、“航空屋”の催促（空母の大量建造と、空母艦隊及び航空団の編成・基地航空軍の戦力化）は日に日に高まり、潜水艦の整備もなくてはならない。

そして当然、護衛艦艇や水雷戦隊、補給艦隊、修理艦・工作艦の整備も同時並行で行わなければならなかった。

ところが戦艦は、建造するのに時間がかかるうえに資金も資材も大量に必要だ。船渠を長期間にわたり占拠するので、言い方は悪いが、邪魔ともいえた。

さらに戦争に備えた旧式戦艦の改装案（航空戦艦や高速戦艦、果ては空母への改装案まであった）は、

「そんな資材と金があるんだつたら、旧式戦艦の改装に使うよりも、一隻でも多くの空母や防空艦・潜水艦を建造すべし」

という正論に、次々と叩きつぶされた。

しかし、戦艦も防空艦として役に立つし、艦隊決戦が起こらないと
も限らない。

旧式戦艦（伊勢型・扶桑型）がロートル化を理由に次々と除籍される中（金剛型は大改装され延命した）、日本帝國海軍は、米艦隊相手に挑める超大型戦艦『大和』（残る姉妹艦二隻は空母に設計変更された）の建艦と同時に、空母護衛用の巡洋戦艦の建造に着手した。

それが、駿河型戦艦『駿河』・『三河』の二隻である。

基準排水量34,000トンのスマートな船体に、最高33ノットの健脚。そし40センチ50口径連装砲を三基備えた強力艦で、砲力は長門型に勝るとも劣らない。当然、合衆国海軍の新鋭戦艦にも引けを取らない。

1958年現在では、長門型・金剛型が戦没したため、帝國に残された戦艦は三隻だけだ。そして帝國は、次世代戦艦の建造には未だに着手していない。誘導弾が登場し、戦艦の価値の低下に拍車がかかったためである。

帝國海軍が、帝國国防海軍に再編された今でも、歴戦の戦艦として、世界中から愛された戦艦だった。

『駿河』・『三河』から成る第二遊撃戦隊を中心に、様々な戦隊が徐々に集合していった。やがてそれは、総勢20隻以上の艦隊を成していく。

戦艦だけでなく、空母まで加えた強力な水上艦隊は、ゆっくりと目的地まで向かって進んでいった。

それより遙か先に、一足早く目的地まで到着している艦隊は、彼らを待ち望んでいた。その度合いは人それぞれだったが――。

台湾民主連邦。

戦後、日本帝國から独立した新興国の港で、一人の青年が懷中時計を見つめていた。

上空を、特異な形をした双発航空機が飛び交っている中、青年――
あいはらすいいち藍原慧一は懷中時計から目を離し、目の前に広がる海に目を向けた。

多数のフネ、それも旭日旗を掲げた軍艦が、静かに停泊している。
が、いずれも小型艦艇で、排水量が1,000トンにも満たないフネも、少なからず見受けられた。

ちなみに、日本帝國艦艇からは、すでに“菊の御紋”は消えていた。人命尊重を重視する帝國国防海軍は、沈没時における艦乗務員（クルー特に艦長職や指揮官）の退艦拒否を、菊の御紋が原因だと考えたからだ。

「消耗品の兵器に、菊の御紋などもつたいない」

という合理的な意見が、多勢を占める様になったというところも大きかった。

「……そろそろかな」

藍原は小さく呟きながら、再び蒼穹を見つめた。

相変わらず、日の丸を煌かせた戦闘機が、模擬空戦に明け暮れていた。

？ 鳴り響く海嘯（後書き）

・駿河型巡洋戦艦『駿河』^{するが}・『三河』^{みかわ}

基準排水量34,000トンの巡洋戦艦。『金剛』型戦艦の代替艦として建造された。大和型と同じく、空母の護衛を最優先で考えているため、最大33ノットという健脚。40センチ50口径連装砲を三基備えている。

なお、『大和』・『駿河』・『三河』の就役に伴い、伊勢型・扶桑型戦艦は除籍・解体され、長門型・金剛型戦艦は戦没した。よって現在、帝國国防海軍が保有する戦艦は、『大和』・『駿河』・『三河』の三隻のみである。

* 駿河型巡洋戦艦に国名が付けられているのは、大和型の二番艦・三番艦と誤認させるため。というより、駿河型は大和型を設計変更した巡洋戦艦だから。

？
蒼穹を駆ける恋人（前書き）

今作における細かい設定は、少しずつ表記していくつもりです。

？ 蒼穹を駆ける恋人

「スイ君」

名前を呼ばれ、藍原が振り向くと、銀色の帝國国防空軍将校服を着込んだ少女が立っていた。少尉の肩章をつけている。

「あれ、今飛んでるのは君じゃなかったか」

「違うよ……私は今日は非番」

雪丘奏深は、笑顔で首を振った。それほど長くない、艶やかな黒髪が揺れる。

名家の令嬢なだけはある、その立ち振る舞いは清楚で、様になっていた。

「どうだい、台湾の空は」

「悪くはないかな。本土から飛ばされたのは気に喰わないけど、御蔭でイイ整備員を引っこ抜けたよ。内地むちうと比べて、この航空基地は本格的と言い難いから」

雪丘は後方——基地方面——を指差しながら、藍原に近付いて手を取った。

「それに、スイ君も来てくれたからね」

恋人と離れるのは大変だし、と雪丘は呟いて、藍原を見つめる。
元華族の家を飛び出し、中国で紅軍（旧共産党軍・現中華人民共和
国）機を叩き落していた少女は、藍原をひたすら見つめていた。

いつものことなので、藍原は気にせずに言葉を紡ぐ。

「君はまだいいさ。僕なんて、アレだぜ？」

藍原はそう言って、停泊船のうちの一隻を見つめた。

帝國国防海軍色に塗装された小型艦が、静かに錨を下している。

「ああ、あれが手紙に書いてた……え〜と、『K12号』だっけ？」

旧帝國海軍には、“海上護衛総隊”という、海上航路防衛専門の部
隊が存在していた。

それは、戦後は帝國国防海軍の設立と同時に海軍組織から外され、
“海上治安維持機構”通称「SPO」に再編された。

合衆国の沿岸警備艦隊と同じようなもので、警備任務に漁業管理・海難事故防止・救助、密漁・不法入国取り締まりなどが加わった組織である。

あくまでも准軍組織であり、統合国軍省ではなく、運輸省の管轄下にある。

しかし、国防海軍に警備任務の部隊が無いわけではなく、対潜哨戒が主任務の警備戦隊群が数十個単位で編制・運用されている。

『K12号』を含む鵠く型海防艦は、そんな警備戦隊群、そしてSP O向けに量産されている海防艦だった。

基準排水量920トン。対潜兵装こそ充実しているが、主砲を除く対艦・対地兵装は一切搭載されていない。装備は爆雷投射機や対潜短魚雷発射管、対空・対不審船両用の機銃と、対空誘導弾発射管が一基。あとは、高角砲も兼ねる88ミリ砲が一基のみ。

レーダーやソナーは一応完備されているが、コストダウンのため、駆逐艦に搭載されている新型ではない。

数だけ多く、200隻近くが就役している。

ちなみに鵠型海防艦は、SPOではおおなみ型巡視船と呼ばれている。

そんな、国防艦隊の巡洋艦や駆逐艦と比べれば、どうしても格落ちするフネを、雪丘は興味深げに見つめていた。

「海上交通路確保は皇国の骨子さ。途絶えれば帝國は滅ぶ。だから

といって哨戒任務では、大型空母や巡洋艦なんて邪魔になるだけさ。
松型^{まつ}や改松型^{かいまつ}駆逐艦がベスト。それはわかってるんだけど、やっぱりなあ……せめて旧式の陽炎型^{かげろう}でもいいから、警備戦隊群^{ウチ}に回してくれないかなあ……改装すれば、結構使える対潜艦になると思っただけどなあ。

君の迅雷はどうだい？」

「いいマシンだよ。まあ、機動性にちょっと不満が残るけどね……」

軽くため息をつき、雪丘は、上空を乱舞している航空機を見上げた。

四九式戦闘攻撃機“迅雷^{じしとんらい}”
推進式六翅プロペラ^{ブッシヤ}に垂直尾翼。前進翼が特徴の、双胴式双発戦闘攻撃機である。

現在、先進国の航空機はジェット化が進んでいるが、ジェット・エンジン^{エンジン}は航続距離が短くなり、整備も難しくなる。まだまだ欠点も多かった。

そのためプロペラ機、特にターボ・プロップ機は、未だに先進国から消えていない。

この迅雷は、その長大な航続距離と充実した防弾設備・軽爆並みの爆弾搭載量が武器である。対空誘導弾や対艦（対地）誘導弾も搭載できるので、使い勝手の良い機体なのだ。

哨戒任務や偵察任務にも投入され、長距離護衛にも駆り出されることが多い。

国防空軍には、“火龍”^{かりゆう}や、最新鋭の“震穹”^{しんきゆう}などのジェット戦闘機、果てには“斑鳩”^{いはかるが}戦略爆撃機などのジェット爆撃機も配備されているが、プロペラ機が消えたわけではないのだ。
一式戦闘機“隼”^{はやぶさ}？や四式戦闘機“疾風”^{はやて}シリーズは、練習機として未だ現役であるし、他国に輸出され、生産され続けている。

そして今でも、帝国の荒鷲として活躍していた。

？ 蒼穹を駆ける恋人（後書き）

・ 鵠^く型^{けい}海防艦

基準排水量920トンの量産型海防艦（沿岸警備艦）。海上治安維持機構（SPO）の主力巡視船にもなっている。強力な対潜兵装を保有している。また、SPOの所属艦はおおなみ型と呼ばれる。

・ 四九式戦闘攻撃機“ 迅雷^{じんらい} ”

プツシャ式六翅プロペラ搭載の双胴型双発戦闘攻撃機。ターボ・プロップ機である。長大な航続距離を生かし、爆撃機や輸送機の護衛任務などをこなす他、軽爆や哨戒機としての任務もこなせる万能機。前進翼で、垂直尾翼を採用している。

* 映画『スカイ・クロラ』の染赤^{ソメアカ}のような機体です。

？ 海鳴は五線譜の先に

日本帝國国防空軍が誕生してからは、国防海軍航空隊は、主に二つに分けられることとなった。

一つは、空母に搭載・運用されるための“空母航空団”。本拠地は陸上にあり、あくまで空母に展開されるという形を取っている。

正式には“空地分離”というのだが、おかげで、必要に応じて様々な空母に、様々な航空隊を配属できるようになった。つまり、「この空母にはこの航空隊」という風に決められていない。

そのため太平洋戦争では、航空機の不足（『大鳳』^{たいほう}や改大鳳型^{かいたいほう}・武蔵^{むさし}型航空母艦は大型艦だが、装甲空母のため、船体の割には搭載機が少ない）を補うため、航空隊が発艦するそばから新たな航空隊が着艦するという方式を取り、大部隊を一点集中運用できた。

この空母航空団は、当たり前だが艦載機を中心に構成されている。

二つ目は、“哨戒航空団”。対潜哨戒などが配属されており、文字通り哨戒を行う。水上機の代わりとなった回転翼機や飛行艇、そして陸上哨戒機を中心に構成されている。

厳密に言えば、これらに錬成航空隊などが加わるのだが、そこらへんの話はひとまず置く。

問題は、この哨戒航空団だった。

対潜哨戒任務において、航空機とは、非常に便利な武器である。しかし、国防海軍にも、いや、旧帝國海軍にも悩みがあった。それは、対潜哨戒機の不足だった。

海軍では、航空機は艦載機や陸攻（陸上攻撃機）の開発・生産が優先され、対潜哨戒機の生産は遅れに遅れた。

もともと、それは決して、旧帝國海軍が、対潜哨戒機を軽視していたわけではない。航空機搭載用の磁探（磁気探知機）などの開発に梃子摺り、思うようにコストダウンも図れず、量産も軌道に乗らなかった。

つまり、「無い袖は振れぬ」状態だった。

それでも太平洋戦争が始まると、米潜水艦の対策として開発が進んでいった。

対潜哨戒機“東海”^{とつかい}や、二式大艇（二式大型飛行艇）などがそれである。しかし、東海にしろ、二式大艇にしろ、コストが高く、量産性も低い機体で、とても供給が間に合わなかった。

特に東海は、優秀といえば優秀だが、鈍足で被弾にも弱く、火力も心許ない。

要は、敵機に発見されればお終いの機体だった。だからといって、四発機である二式大艇は偵察・哨戒・輸送・救助任務に引っ張りだこで、いつまでたっても望む分だけ揃わないのが実情だった。

ところがそんな中、旧陸軍航空隊と旧海軍航空隊を合同統括する“統合航空参謀本部”（現“国防空軍幕僚本部”）が名案を打ち出した。

それが、四式重爆撃機（現四四式中爆撃機）“飛龍”^{ひゅうりゅう}の機体を流用した、対潜哨戒機の開発だった。

海軍では“靖国”^{やすくに}という名で呼ばれていたこの双発爆撃機は、日本が世界に誇れる傑作機であった。爆撃も雷撃も可能で、太平洋戦争でも戦果をあげている。しかし、四発重爆や六発戦略爆撃機の開発により、重爆から中爆に格下げになった。が、1958年現在でも少数ながら改良型が運用されている。

ところが旧陸軍航空隊は、この飛龍よりも、海軍側が開発した連山（四五式長距離陸上攻撃機“連山”で、現在は国防空軍所属）に目を向け、さらにジェット機の開発にも熱心だった。ターボ・プロップ機なども同時並行で研究しており、飛龍はそれほど量産されなかった。むしろ、海軍向けの靖国の方が配備数は多かった。

そこで、陸軍側の飛龍を、対潜哨戒機に改造できないか、という意見が海軍に伝わり、海軍はそれに飛びついた。

なにせ飛龍は、爆弾搭載量は不満が残るものの、3,800キロと航続距離は十分で、急降下すら行えるほど運動性が良い。それに防弾性能も優秀で、敵機と遭遇しても生き残れる可能性は高く——少なくとも、東海よりはマシだと判断された——武装も侮れない。無論、改装すれば性能は変わるだろうが、基本性能は変わらないだろう。

こうして生まれたのが、六式対潜哨戒機“蒼洋”^{そうよう}である。そしてこの機は、未だに国防海軍航空隊で現役だった。

その日も、一機の蒼洋が、台湾民主連邦の帝國海軍航空基地から離陸していた。

現在では、単発機を含む航空機には自動操縦装置が大抵搭載されている。哨戒機の場合、長時間出撃が普通なので、なおさらだった。

その蒼洋、コールサイン「海猫101」の機長は、飛び立って数分と経たないうちに、小声で愚痴をこぼしていた。

「ああ、そろそろ新型が欲しいなあ。こいつは少々古いマシンだし、飛行艇なんて、九式大艇“碧洋”^{へきよう}が配備されているじゃあないか。陸上哨戒機も、そろそろいいのができないかなあ」

機長を拝命したばかりの若い青年の態度に、他の搭乗員^{クルー}は苦笑するだけだった。彼が愚痴を零すのは、日常茶飯事だったからだ。もともと、誰も文句は言わない。

彼が愚痴を言っているのは、クルーの気持ちを代弁し、“不満のはけ口”に自ら徹しているからだ、全員が理解していたからである。機長を含め部下を率いる者は、冷静で厳格であることが求められるが、それは求められるというだけで、それが正解ではない。部下の^{マイナス}負の感情を消すために、自ら道化の皮を被ることも、指揮官の仕事である。

年功序列が撤廃され、若い指揮官が増え、女性軍人も増えた現在では、厳格さよりも柔軟さの方が、部下からは求められた。そして、

部下や現場の気持ちも知らずに、精神論をぶちまけるだけの指揮官は、とつくの昔に自然淘汰されている。

そして、彼が言っている内容は事実だった。新型飛行艇九式大艇は、コストを抑えるために三発のターボ・プロップ機であるが、二式大艇よりずっと高性能である。

しかし、蒼洋に代わるべき次世代陸上哨戒機は、台湾はもちろん本国にも配備されていない。

もっとも、帝國のおさがりである天山改装てんざんの対潜哨戒機、天山改てんざんかいを運用している台湾民主連邦海軍よりはマシだろうが。

取り敢えずは、いつも通りのコースを飛行していた「海猫101」は、いつも通り「異常ナシ」と報告する予定だった。

が、それは叶わなかった。

「機長、あれを……人じゃあないですか？」

「人？こんな海の真ん中に？漂流者か……おい、最近、海難事故があつたという話を聞いているか？」

「さあ、聞いておりませんが」

「生きているか？」

「おそらく……あ、ボートに乗っていますが、倒れています。女の子です」

機長は舌を打った。

助けようにも、あくまで陸上哨戒機の蒼洋は着水できない。いや、できるが、それは愛機の放棄に等しい。当然、助けるどころか、漂流者の仲間入りである。

「まったく……おい、艦隊、漁船、潜水艦、飛行艇、何でもいい……問い合わせろ、大至急だ。近くに何かいるだろ。ああ、台湾サンにもだぞ」

機長は大急ぎで、通信士に怒鳴った。

？ 海鳴は五線譜の先に（後書き）

・六式対潜哨戒機“蒼洋”^{そうよう}
帝國国防空軍の中爆撃機飛龍^{ひりゅう}の機体を流用した対潜哨戒機。強力なレーダーも搭載しているため、早期警戒機としても運用できる。

・九式大型飛行艇（九式大艇）“碧洋”^{へきよう}
二式大艇のコストの高さと、量産性の低さが問題視され、コストダウンと量産性を考慮した結果、ターボ・プロップエンジン三基を配置するという、変わったシルエットとなった飛行艇。主に哨戒・早期警戒任務に投入される。

？ 青になりかけの信号機

水平線の彼方から、一隻、また一隻と黒いシルエットが見えてくる。

あいはらすいいち
藍原誓一は、同僚達とともに、帝國国防海軍士官服を着込み、その様子を見守っていた。

「一体どうして、こんな時期に艦隊が台湾に派遣されるんだ？しかも噂によると、一防艦（第一防衛艦隊）と二防艦（第二防衛艦隊）から、抽出された戦力だそうじゃあないか」

潜水艦隊を除く、戦闘部隊のほぼ全てが集まり、編成されたのが第一・第二防衛艦隊である。

第一防衛艦隊は、就役したばかりの核動力航空母艦『聖鳳』せいほうを含む航空戦隊群を中心に編成されている。配属されている空母は、航空戦・対地支援用の大型空母だけで一二隻。エスコート護衛や支援艦艇も充実しており、今や帝國国防海軍の代名詞となりつつあった。

一方で、第二防衛艦隊は、対潜哨戒任務の中型・小型空母と戦艦部隊・水雷戦隊群を中心に編成されている。主役の顔は一防艦に譲っているが、それでも強力な艦隊だった。

もつとも、戦艦や水雷戦隊の価値が低下——というより変化した現在では、二防艦は、そう遠くない将来、巡洋艦を主体とした高速遊撃艦隊に再編成されるのではないかという噂が、士官・下士官。兵問わず囁かれていた。

一防艦にしる二防艦にしる、潜水艦隊に並ぶ帝國国防海軍の花形であり、つまりはそれだけ装備や人材も優れている。

もつとも、藍原達“対潜屋”が劣っているわけではなく、寧ろ日本帝國の地理と方針（島国で海洋貿易大国）から考えると、警備戦隊群こそ皇国の楯と公言して憚らない者もいる。

何にしる、太平洋戦争が終結し、対ソ戦も終結した今、日本帝國の大艦隊が、矛先を向けるべき相手は存在していない。

しかし、中華大陸の動乱や、赤色共産主義革命が世界を覆っている今、日本帝國は、アジア・オセアニアの平和を護ることを強要させられた。

だからこそ、帝國は未だに大戦力を保有しているのだ。

しかし、そんな戦力を台湾に送ることに、せみはやしつぐき蝉林津具樹は疑問を持っているようだった。

が、そんな彼の横で藍原は、興味なさげに鼻を鳴らした。

「知るかい。大方、シンガポールで赤色運動でも起こったんじゃないか？」

「いつつもそうだな、お前は。戦争になれば、死ぬのは俺たちなの……お前は興味が無さ過ぎる。いや、それとも俺がおかしいのか？」

いつも通りの問答に、藍原は心中でため息をついた。

蝉林津具樹は自信が無い。

彼は全く自信を持たない。

常に、自分が間違っていること、自身が異常であることを疑っている。

その癖、オドオドしたり、流されやすい、ということはない。

蝉林津具樹は、藍原慧一・雪丘奏深と同じように変人だった。
ゆきおかかなみ

「勘繰ったところで仕方が無いだろう？一介の少尉に何をしろというんだ？しかも、第二国防高校海軍部を出たばかりの新人に」
ニコウカイ

「一応は実戦経験者だろうが」

「実戦？ゲリラのボートに、機銃撃ちこんだアレか？」

「いや、ソ連の潜水艦を沈めた奴」

「馬鹿言うなよ」

藍原は小さく吹き出した。

「沈めたのは砲雷科（一分隊）の連中だろう？僕たちじゃあない」

「いいじゃないか、引き金^{トリガ}を引いたか引かないかは些事さ。大切な

のは、その“空気”を吸ったかどうかだ。その瞬間の“空気”に触れることだ。

いや、違うのか？やっぱり違うのか、俺がおかしいのか？」

「さあ」

「おい、来たぞ」

藍原と蟬林の間に、もう一人が割り込んできた。

つられて二人を見ると、シルエットがくつきり見える程近付いた軍艦を視認できた。

「四水戦（第四水雷戦隊）か……ということは、あれは『酒匂』^{さかわ}だな」

四水戦。帝國国防海軍に四個しかない、水雷戦隊の一つ。阿賀野型^{あかの}巡洋艦『酒匂』を旗艦とする、駆逐艦六隻を率いる戦隊である。

水雷戦隊は、元は魚雷戦による敵部隊殲滅が主任務だが、現在は、対艦誘導弾と誘導魚雷を駆使したコンパクトな高速機動戦闘が主任務となっていた。

レーダーの発達で、魚雷の射程内まで敵に（気付かれず）接近することが不可能となり、「敵と差し違えようととも大物を屠る」指針を、“人命軽視”として変換してからは、帝國水雷戦隊は大きく形を変えた。

駆逐艦の主力が、魚雷兵装よりも防空・対潜哨戒に重視した設計になっていくことが、それに拍車をかけた。要するに、対水上艦艇用

の魚雷を、潜水艦以外のフネが乗せることが疑問視されるようになったのだ。

重雷装艦である島風型しまかぜ駆逐艦は、量産性が低いこと、そして何より秋月型・弓月あきつき ゆみつき（改秋月かいあきつき）型防空駆逐艦などの量産が優先されるようになり、僅か六隻で建造が終了した。

そのため四水戦に配備されている駆逐艦は、改装されたとはいえ、少々旧式化が進んでいる陽炎型駆逐艦である。もっとも、四水戦の陽炎型は改装を受け、対艦誘導弾を含む新兵装を装備しているはずだから、その戦闘力は無視できない。腐っても、陽炎型は日本が誇る名艦だった。

しかし、藍原達からしてみれば、陽炎型駆逐艦ですら、基準排水量2,000トン近い。乗艦と比較すれば十分大型艦である。

もっとも、藍原達が四水戦を——四水戦だけを注目しているのは、『酒匂』や陽炎型駆逐艦が理由ではない。
戦隊指揮官だった。

「さて、どうするのかねえ、あの“鯨姫”シヤチヒメ様は」

先程、藍原と蟬林の間に割り込んだ少尉が、ニヤリと笑いながら呟いた。

“鯨姫”^{ほたるもりみなづき}こと蛭森水無月は、四水戦指揮官であるが、彼女は帝國国防海軍では有名だった。

国防海軍に女性軍人は珍しくないが、大抵、彼女達は（なぜか）空母航空団搭乗員^{パイロット}か潜水艦勤務を志望する。

そんな中、蛭森提督は、女性の人気が壊滅的でない“水雷屋”を志し、しかも、現場肌の人間として地位を築いていった。駆逐艦、それも水雷戦隊配属のフネに乗り込む女性は本当に少ない、というよいらないのである。

結果、彼女は水雷戦隊唯一の女性提督となり、ついた渾名が“鯨姫”。その指揮ぶりは、最先任の一水戦（第一水雷戦隊）を任されても良いとすら言われている。

しかし、帝國国防海軍一の“変人”という噂もあり、四水戦指揮官に甘んじている。

「……ん？」

「どうした？」

「……いや」

そんな提督が乗り込んでいる（はずの）『酒匂』を見つめていた藍原慧一は、小さく首を捻った。

『酒匂』以下、戦隊構成艦艇は、後ろに控えているであろう航空戦

隊に追い立てられるかのように、湾口内にその身を滑らせていく。そして、もはや細部まで詳しく確認出来る程近付いてきた『酒匂』に、藍原は違和感を覚えた。

一瞬、小さな少女が見えた気がしたが、藍原はすぐに首を振った。

——いるわけない、褐色肌の女の子なんて。

藍原は再び、『酒匂』の巨大な船体に目を向けた。

？ 青になりかけの信号機（後書き）

・阿賀野型巡洋艦『阿賀野』^{あかの}・『能代』^{のしろ}・『矢矧』^{やはぎ}・『酒匂』^{さかわ}
基準排水量6,700トンの巡洋艦。水雷戦隊旗艦用として建艦
された巡洋艦だが、防空艦としての機能も持ち、通信設備も充実し
ている。また、対艦誘導弾も搭載している。が、帝國国防海軍は水
雷戦隊自体を縮小しているため、四隻の建艦にとどまっている。

データ?1 日本帝國国防海軍艦隊編制表（前書き）

新部隊が登場次第、更新いたします。

*尚、紹介されているのはあくまで作中で登場した艦隊のみで、帝國国防海軍の全容ではありません。

データ? 1 日本帝國国防海軍艦隊編制表

防衛艦隊（常設基本艦隊編制）

- ・国防艦隊總司令艦隊（地上司令部：横須賀）
司令部戦隊『大淀』おおよと（旗艦）なぎかせ 凪風型駆逐艦六隻
警戒戦隊『龍鳳』りゅうほう 改夕雲型駆逐艦六隻

・第一防衛艦隊（地上司令部：横須賀）

A 第一航空戦隊群

- 第一航空戦隊『聖鳳』せいほう ・『鳳翔』ほうしょう
- 第二航空戦隊『武蔵』むさし ・『信濃』しなの（旗艦）
- 第六航空戦隊『洋鳳』ようほう ・『天鳳』てんほう ・『大鳳』たいほう
- 第一護衛戦隊『神威』かむい 改秋月型駆逐艦六隻
- 第四護衛戦隊『羊蹄』ようてい 同上
- 第七護衛戦隊『乗鞍』のりくら 凪風型駆逐艦六隻
- 第三一護衛戦隊『天塩』てしお 改松型駆逐艦六隻
- 第三四護衛戦隊『高雄』たかお 同上
- 第一補給隊 補給艦八隻

B 第二航空戦隊群

- 第三航空戦隊『雷鶴』らいかく ・『雨鶴』うかく
- 第四航空戦隊『麗鶴』れいかく ・『旭鶴』きょかく
- 第五航空戦隊『白鳳』はくほう ・『蒼鳳』そうほう
- 第一一航空戦隊『阿蘇』あそ ・『飛騨』ひだ（旗艦）
- 第二護衛戦隊『鞍馬』くらま 改秋月型駆逐艦六隻
- 第五護衛戦隊『大雪』だいせつ 同上
- 第八護衛戦隊『生駒』いこま 同上

第三二護衛戦隊『石狩』 凧風型駆逐艦六隻
第三五護衛戦隊『鳥海』 同上
第二補給隊 補給艦八隻

・第二防衛艦隊（地上司令部：呉）

A 第三航空戦隊群

第七航空戦隊『煌鳳』 （旗艦）
第三護衛戦隊『新高』 改秋月型駆逐艦四隻
第六護衛戦隊『剣』 凧風型駆逐艦六隻
第九護衛戦隊『筑波』 同上
第三三護衛戦隊『妙高』 改松型駆逐艦六隻
第三六護衛戦隊『愛宕』 同上
第三補給隊 補給艦八隻

B 第一遊撃戦隊群

第一遊撃戦隊『大和』 （旗艦）
第二遊撃戦隊『駿河』 ・『三河』
第三遊撃戦隊『天城』 ・『葛城』
第一〇護衛戦隊『十勝』 改秋月型駆逐艦六隻
第一一護衛戦隊『燕』 改夕雲型駆逐艦六隻
第一二護衛戦隊『羅臼』 同上
第三四護衛戦隊『北上』 改松型駆逐艦六隻
第三七護衛戦隊『大井』 同上
第四補給隊 補給艦八隻

C 第一水雷戦隊群

第一水雷戦隊『阿賀野』 （旗艦） 島風型駆逐艦六隻
第二水雷戦隊『能代』 陽炎型駆逐艦六隻
第三水雷戦隊『矢矧』 同上
第四水雷戦隊『酒匂』 同上

第五補給隊 補給艦八隻

警備戦隊群

・第二一警備戦隊群（地上司令部：高雄）

第一〇九警備戦隊『竜胆』（旗艦）・『山茶花』・『向日葵』・『白百合』

第二〇五警備戦隊『K12号』（戦没）・『K18号』（戦没）

・『K44号』・『K05号』（戦没）・『永祚』

独立第六八戦隊『美浜』・『桂浜』

第三一航空戦隊『瑞穂』

・第一高速警備戦隊（地上司令部：呉）

高速海防艦部隊『永祚』（旗艦）・『野分』・『疾風』・『旋風』

第一三補給隊『淀橋』・『歌舞伎』

教育総隊（地上司令部：佐世保）

A 第一〇一教育隊

第一練習戦隊『香取』・『鹿島』・『香椎』

第一〇一練習戦隊『瑞鶴』 訓練艦艇六隻・救難艦艇六隻・救難母艦『那覇』

第一〇二練習戦隊『川内』 訓練艦艇六隻・救難艦艇六隻・救難母艦『盛岡』

第一〇三練習戦隊『夕張』 訓練艦艇六隻・救難艦艇六隻・救難母艦『甲府』

B 第〇二教育隊

第二〇一練習戰隊『伊四〇一』 訓練潜水艦艇六隻・潜水救難艦艇
六隻・潜水救難母艦『高崎』
第二〇二練習戰隊『伊四〇六』 訓練潜水艦艇六隻・潜水救難艦艇
六隻・潜水救難母艦『劍崎』

方面艦隊（臨時編成）

・台灣民主連邦派遣艦隊（第一一艦隊）（地上司令部：高雄）

第二遊擊戰隊『駿河』・『三河』（旗艦）

第三四護衛戰隊『北上』改松型驅逐艦六隻

第四水雷戰隊『酒匂』陽炎型驅逐艦六隻

第六航空戰隊『洋鳳』・『天鳳』・『大鳳』

第四護衛戰隊『羊蹄』改秋月型驅逐艦六隻

・台灣民主連邦派遣潜水任務部隊「桶狹間隊」おけはざま（地上司令部：高雄）

第一群『仁淀』によど 潜水艦九隻

第二群『中淀』なかよど 潜水艦九隻

支援群『深鯨』しんけい・『千歳』ちとせ

・沖繩方面艦隊（第八艦隊）（地上司令部：中城）なかぐすく

第三遊擊戰隊『天城』・『葛城』（旗艦）（戰没）

第三一護衛戦隊『天塩』改松型駆逐艦六隻（内三隻戦没）

・独立第八六戦隊（遠洋訓練中混成臨時部隊）（地上司令部：佐世保^{させ}）（正確には佐世保の国防海軍教育総隊）

巡洋艦部隊『那智^{なち}』

駆逐艦部隊『雁風^{かりかぜ}』・『芦風^{あしかぜ}』・『宵風^{よいかぜ}』・『滝風^{たきかぜ}』

補給艦部隊『赤羽^{あかばね}』

・第三五航空戦隊（作戦補佐臨時航空部隊）（地上司令部：横須賀）

回転翼機母艦部隊『伊吹^{いぶき}』

駆逐艦部隊『蓮華^{れんげ}』・『撫子^{なでしこ}』

・インド洋方面艦隊（第二艦隊）（地上司令部：セイロン島コロンボ）

第四航空戦隊『麗鶴』・『旭鶴』（旗艦）

第五護衛戦隊『大雪^{おほゆき}』改秋月型駆逐艦『白月^{はくつき}』・『魅月^{みつき}』・『藤^{とう}月^{つき}』・『奏月^{かなつき}』・『藍月^{あいつき}』・『柳月^{りゅうつき}』

第一水雷戦隊『阿賀野^{あがの}』島風型駆逐艦『島風^{しまかぜ}』・『磯風^{いそかぜ}』・『峯^{みね}風^{かぜ}』・『潮風^{しおかぜ}』・『波風^{なみかぜ}』・『海風^{うみかぜ}』

第二七補給隊補給艦四隻

揚陸艦隊

- ・第二揚陸艦隊（地上司令部：大湊）
 - 第二揚陸隊『知床』
 - 第七揚陸隊『大隅』
 - 第一五揚陸隊『舞鶴』・『佐世保』・『鶴見』・『吉祥寺』
 - 第三九護衛戦隊『摩耶』改松型駆逐艦六隻
- 第七補給隊 補給艦四隻

データ? 1 日本帝國国防海軍艦隊編制表（後書き）

・神威型防空巡洋艦『神威』・『鞍馬』・『羊蹄』・『大雪』・『
 乗鞍』・『生駒』・『新高』・『剣』・『筑波』・『十勝』・『燕』
 ・『羅臼』・『蔵王』

基準排水量14,000トンの防空巡洋艦。空母を護る楯として期待されている。高角砲や機銃だけではなく、集束型対空誘導弾やロケット砲などを搭載している。第一防衛艦隊・第二防衛艦隊に集中配備されている。また、防空駆逐艦の統率・指揮も可能。なお、帝國国防海軍となつてからは甲巡と乙巡・丙巡の区別が無くなつた。元は改鈴谷型巡洋艦として起工したが、大幅に変更されて防空巡洋艦となつた。対潜兵装も搭載している。

・改大鳳型航空母艦（白鳳型航空母艦）『白鳳』・『蒼鳳』・『洋鳳』・『天鳳』

基準排水量46,000トンの大型空母。搭載機は八〇機であり、戦争を生き残つた帝國国防海軍の代表的な空母。強力な装甲板を備えており、防御力は高く、魚雷防御も極めて強固。さらにアングルド・デッキも備え、カタパルトも装備されている。

・大鳳型航空母艦『大鳳』

基準排水量38,000トンの大型空母。搭載機は六〇機。改大鳳型空母の建造に移行したため、『大鳳』のみの建造にとどまつたが、その性能は高い。アングルド・デッキ及びカタパルトを装備している。一回り小型であることを除けば、改大鳳型空母と大差ない。

・雷鶴型航空母艦『雷鶴』^{らいかく}・『雨鶴』^{うかく}・『麗鶴』^{れいかく}・『旭鶴』^{きょかく}
基準排水量76,500トンの超大型空母。終戦後に計画・建艦された。搭載機一〇機。核動力艦ではなく、通常動力艦である。アングルド・デッキ及びカタパルトを装備している。防御力は改大鳳型に勝り、最新の電探^{レーダー}や戦闘指揮所なども搭載されており、その性能は極めて高い。

・改大和型航空母艦（武蔵型航空母艦）『武蔵』^{むさし}・『信濃』^{しなの}
基準排水量62,000トンの大型空母で、戦時中は世界最大の空母だった。搭載機は一〇〇機。大和型戦艦を大幅に設計変更し、多数の航空機を運用できるだけの格納庫と速力を確保している他、アングルド・デッキ及びカタパルトを装備しており、帝国国防海軍の象徴として君臨している。元は戦艦だけに、サバイバリティは高い。

・那覇型救難母艦『那覇』^{なは}・『盛岡』^{もりおか}・『甲府』^{こうふ}
基準排水量5,200トンの救難母艦。傘下の救難艦艇を統率し、救難艇を搭載している。商船構造で、非武装。

・高崎型潜水救難母艦『高崎』^{たかざき}・『剣崎』^{けんざき}
基準排水量5,200トンの潜水救難母艦。那覇型の準同型艦で、

此方は事故を起こした潜水艦や乗務員を救助できる設備や、救助用小型潜水艦を搭載している。

データ？2 用語集・世界観（前書き）

こちらでも逐次追加予定です。

データ？2 用語集・世界観

・帝國国防軍

大日本帝國軍が戦後、改変された新設軍。統帥権を放棄し、統合国軍省の元に内閣総理大臣を最高司令官とする（シビリアン・コントロールを従事している）。陸・海・空の三軍及び国防海軍陸戦師団から編制されている。現在、世界でも極めて優秀かつ大規模な軍隊として名をはせている。なお、現在帝國では二年の兵役の義務がある。

・国防海軍陸戦師団

国防海軍傘下の軍。米合衆国海兵隊をモデルとした常設軍で、師団単位で運用される。戦車などの戦闘車両も保有。主任務は、占領された帝國領土（特に島嶼）の奪還のための敵前上陸。

・海上治安維持機構

通称「SPO」。旧帝國海軍海上護衛総隊を改変した組織。准軍組織であり、軍隊ではない。当然、機構隊員（機構員）も軍人ではないが、階級は存在する（なお、SPOの階級制度は史実の海上自衛隊と同じである）。日本領海の警備やシーレーンの警備を行う。運輸省の管轄下にあるが、戦時は国防海軍の傘下となる。装備は、主に国防海軍からの旧式巡洋艦や駆逐艦・潜水艦を払下げて得ているが、SPO専用の造船所も横須賀に存在し、そこで巡視船や消防船・救助船などが建造されている。なお、SPOの部隊は哨戒地方隊と哨戒航空団に大別される。

・近衛隊

旧近衛師団を改編した准軍組織で、宮内省に属する。そのため正規の軍隊ではなく、准軍組織と警察組織の中間の様な組織である。主任務は皇居や皇室の警護で、総人数も一〇〇〇人程度と縮小されている。

・連合艦隊

有事に組織される非常設艦隊。帝國国防海軍の代名詞となっており、天皇の命令のみで設立される。なお、平時でも大規模演習で設立されることがあり、その場合は首相の命令でも設立可能。通称「GF」。

・幕僚

指揮官に直属し、参謀事務に従事する者のこと。旧軍では“参謀”と呼んでいた。参謀長、首席（先任）幕僚の他、砲術、水雷、通信、戦闘、航海、気象などの様々な職があり、司令部によって配置職も人員も異なる。また、航空幕僚も「航空甲幕僚」と「航空乙幕僚」と二人いることもある。また略称は旧軍のままで、例えば通信幕僚は「ツサ」と略称される。

・防衛艦隊司令部

三個常設防衛艦隊を纏める組織で横須賀に居を構え、海上司令部は巡洋艦『大淀』^{おおよど}に置いている。大抵の場合は単に「防衛艦隊」或いは「DF」と呼ばれる。統合国軍相直属の組織で、防衛艦隊司令長官は海軍実戦部隊の実質的トップである。

・統合国軍省

通称「国軍省」。陸軍省と海軍省が合併して新設された省庁。読んで字の如く、日本帝國の国軍を管轄し、防衛を担当する。陸軍部・海軍部・空軍部に分かれており、情報局などの外局も存在する。トップは統合国軍相である。

・幕僚本部

統合国軍相直属の最高幕僚機関で、統合・陸軍・海軍・空軍の四つの幕僚本部が存在する。各幕僚本部のトップは幕僚長で、作戦立案や教育訓練・装備・人事などを管理する計画の立案を行う。

・統合国軍省情報局

通称「統情」。或いは単に「情報局」とも言う。米合衆国でいうCIAとFBIを統合したような組織で、国防に関わる情報を一元管理・統括する。諜報組織でもあり、優秀なエージェントが数多く所属している。が、気象情報や地理情報、科学情報なども担当しており、職員も全員軍関係者と言うわけではない。三軍や内務省・外務省などの各諜報機関のトップでもあり、それらの情報は全てこの局に集積され、評価分析される。

・海洋観測部

統情の部の一つで、その名の通り、海洋関係の情報を統合する部。専用の観測艦や潜水艇を保有している。制服はブルーのラインが入った、白を基調としたシャツと帽子、スラックス。全部で五つの課があり、一課は海象・海流観測、二課は海底観測、三課は海洋情報研究、四課は海洋技術開発、そして戦闘部隊である五課がある。が、五課の存在は一般には知られていない。

・海洋観測部第五課

通称「海洋五課」。統情の特殊部隊の一つで、海賊狩りを専門とする治安維持戦闘部隊。隊員は軍人ではないが、元陸戦隊員などのエリートが多く所属している。また、表向きは海洋一課から四課の職員の皮を被っており、実際そう言った知識や設備を保有している。配属されている人数は、支援要員を含めても100人以下。

・鎮守府

帝国防海軍の陸上司令部のこと。それぞれ特定の海域（海軍区）の防衛や警備を担当し、所属戦隊や艦隊の監督などが任される。各鎮守府施設にはCICや地下第二司令部があり、さらに移動時に備えての洋上司令部（統合指揮艦）などが配属されている。現在は、大湊（北鎮）・横須賀（横鎮）・呉（呉鎮）・佐世保（佐世鎮）・舞鶴（舞鎮）の五つの鎮守府が設置されている。

・アジアオセアニア連合

通称「UNAO」。戦後に創設された国家連合体。経済・技術協力と相互防衛を基本理念としている。加盟国は物語開始時点で日本帝國・大韓共和国・中華民国（北中国）・中華連邦（東中国）・台湾民主連邦・タイ王国・フィリピン共和国・インドネシア共和国・ビルマ・マレー・独立シンガポール共和国・インド・オーストラリア・ニュージーランド。なお、日本帝國が永世常任理事国となっているが、言い換えれば唯の“司会役”であり、それほど権限は持たない。本部はシンガポール。有事の際は、各国が一定の戦力を出し合い、“UNAO軍”を設立する。なお、UNAO軍は、平時にも小規模ながら存在し、軍総司令部はインドネシアのジャカルタに置かれている。

・国際連合

通称「UN」。戦後に創設された国家連合体。UNAOと違い、その範囲は全世界にまで広がっている。常任理事国はアメリカ合衆国・英連合王国・フランス・中華人民共和国・大日本帝國。準常任理事国がドイツ民主共和連邦・ロシア共和国。本部はハワイにある。しかし、中華大陸での冷戦のおかげもあってか、現在はほとんど機能していない。

・警備戦隊群

第一防衛艦隊・第二防衛艦隊のいずれにも当てはまらない艦隊で、沿岸警備・護衛・対潜掃討などが主任務の艦隊。計二三個の警備戦隊群が存在し、横須賀の警備HQが統率する。防衛艦隊とは命令系

統が異なり、大抵の場合、配属先の司令部——台湾なら台湾派遣軍HQ——に指揮権がある。其々の警備戦隊群は二個警備戦隊から成り、一個警備戦隊は駆逐艦四隻か海防艦四隻、時にはこれに小型空母や回転翼機母艦（ヘリ空母）などが加わり編制される。通称「警戦群」。

・第一防衛艦隊

国防海軍の常設艦隊の一つ。大型空母を中心とした航空戦隊群で編制されている。現在、世界最強の艦隊という呼び名が高い。なお、聯合艦隊は有事の際、一防艦を中心に編成される手筈となっている。その戦力は圧倒的で、帝國の代名詞にまでなっている。通称「一防艦」。

・第二防衛艦隊

国防海軍の常設艦隊の一つ。中型・小型空母から成る航空戦隊群・戦艦部隊・水雷戦隊群で編制されている。第一防衛艦隊の補助戦力としての役割が強い。なお、二防艦の中型・小型空母は順次除籍されつつあり、現在は徐々に最新鋭中型空母・高速戦艦・巡洋艦主体の高速機動部隊への再編成が進められている。通称「二防艦」。

・第三防衛艦隊（潜水防衛艦隊）

国防海軍の常設艦隊の一つ。潜水艦・潜水母艦・旗艦巡洋艦・潜水救難艦などで編制される艦隊。潜水戦隊群で編制されている。日本帝國国防海軍の“陰の主力”であり、その名は一防艦並に有名。通称「三防艦」。

・独立戦術大隊

表向きは高度な展開性とマルチな任務をこなせる多用途性の両立を目指した部隊編制だが、実態は次世代陸軍戦術や新兵器を運用・研究するための実験部隊。帝國国防陸軍では六個設立されている。優秀な装備と人材が集められるエリート部隊。

・国防大学校（国防大学）

戦後に設立されたばかりの新教育機関。陸・海・空の三軍の高等教育機関が合併した形となっている。合併しているのは、三軍の仲違いを防ぐためと、三軍に精通した普遍的な知識を持たせるため。神奈川の第一国防大学、神戸の第二国防大学がある。ちなみに共学。ここを卒業すると、無条件で少佐待遇が得られる程の難関教育機関で、将官に出世することを目指す者には登竜門である（ただし、国防大学出身しか将官になれないわけではない）。

・国防高等学校（国防高校）

国防大学のワンランク下に位置する教育機関。所謂“将校・士官”を育成するための学校で、国防大学と同様、陸・海・空の三軍が合併している。ここを卒業すると、少尉に任官される。第一国防高校は木更津（千葉）、第二国防高校は江田島（広島）にある。

・国防将兵学校

通称「兵校」。三軍の志願者・徴兵者が集い、教育を受ける機関。陸・海・空の三軍が合併している。釧路（北海道）・土浦（茨城）浜松（静岡）・能登（石川）・サイパン（南洋諸島）・平戸島（長崎）の六校があり、其々第一～第六国防将兵学校となっている。

・中華民国（北中国）

中華三国の一つ。首都は北京で、史実でいう満州から山東・河南方面までを領土とする国。最西端は陝西^{せんせい}。U N A Oに加盟しており、日本帝國とは同盟関係にある。国民党による独裁政治が行われているが、現在は善政を敷いている。

・中華連邦（東中国）

中華三国の一つ。首都は南京で、最南端は浙江^{せうしゅう}、最西端は重慶、最北端は江蘇までを領土とする国。U N A Oに加盟しており、日本帝國とは同盟関係にある。元は、日本の支援で中立派が建国した国であるが、中華民国との関係は良好。三国の中でもっとも親日国で、日本の支援により国力も最も高い。連邦制を採用している。

・中華人民共和国（南中国）

中華三国の一つ。首都は成都で、二国中国以外の領土を持つ。三国の中でもっとも国土が広いが、近代化には遅れている。U N A Oを“悪の枢軸”とし、残る中国二国とは対立関係にある。中国共産党による独裁政治が行われている。

・大韓共和国（韓国）

史実と違い、独立を保っていた（正確には一時期日本帝國が占領）大韓帝國が、国号を改変して成立した国家。U N A O に加盟しているものの、国内に多数の反日勢力を抱えている。そのため、帝國やU N A O 諸国との関係は悪化し続けている。そのため、孤立主義に走りつつある。国軍は共和国警備軍で、日本帝國を見習う形で民主化がすすめられているが、未だに終身大統領制の独裁国家の色が強く、王政復古派勢力も根強い。首都ソウル。帝國からは、皮肉をこめて「閉じた国」とも呼ばれている。

・大韓共和国警備軍

大韓共和国の常設軍。警備軍と呼ばれているが、実態は国軍である。陸上・航空・水上の各軍から編制される。装備は日本帝國製が大部分を占めており、帝國の軍事顧問団も数多く派遣されたが、共和国内での反日運動の激化に伴い、帝國からの兵器供給はストップし、軍事顧問団も軒並み帰国している。そのため現在はロシア共和国に接近しているが、日露関係上、芳しい成果は得られていない。

・台湾民主連邦

帝國領台湾が、戦後に独立して建国された国。U N A O に加盟している。民族ごとに居住区域を設定した連邦制を採用している。首都は台北。国防の大半を帝國に委ねているが、陸・海・空の三軍の整備に積極的取り組み、小型空母を始めとする艦隊や航空団を保有している。中華人民共和国とは非常に険悪な関係にある。

本作における日本帝國領土

カムチャツカ半島及び周辺地域・樺太・千島列島・沖縄を含む日本列島・マールシャルを含む南洋諸島・セイロン島（インドより租借中・現スリランカ）

日本帝國の歴史

日露戦争の辛勝以降、大陸進出を諦め、内需増強に専念。海洋貿易国家として成り立つ。

第一次大戦は連合軍に参加し、南洋諸島を獲得。また、ロシア赤色革命ではシベリア出兵をせず、国力増強と近代化に務める。

第二次大戦は史実通りに始まるも、ソ連と共に中立を貫き（大陸進出はしていないため、日中戦争も起こっていない）、戦争によって特需をあげ、高度成長を成し遂げるも、その方針に他先進国が反発。一方、ソ連の中立のため、欧州大戦は長期戦となる。

日本の“一人勝ち”（急成長）に警戒した米合衆国では、貿易摩擦もあってか反日感情が高まり、ウォーレス大統領は偽装工作により、日本の輸送船攻撃をでっち上げて宣戦布告する（1945年4月10日）。

その後、日本の徹底した守勢と兵站線叩き、空母航空団と基地航空軍の連携により、合衆国は西太平洋の制海権を喪失。後に英連合王国が合衆国側に立つて参戦するも、艦隊は壊滅し、セイロン島や東南亜細亜の植民地を失う。

そして、1947年7月9日に枢軸国が降伏。しかし、スターリン率いるソ連は、漁夫の利を得るために英国・仏国などに宣戦布告。欧州侵略を開始する。慌てた英国は対日戦争を早々に切り上げ、イ

ンドやビルマ・オーストラリアなどが英連邦より離脱した。

一方、太平洋ではハワイが陥落し、合衆国内でも「ソ連討つべし」の聲が高まる。

そして1948年3月7日、太平洋戦争は終結する。

その後、日本帝國は連合国軍に参加。新生ドイツ民主共和国などもこれに加わり、対ソ戦が幕を開ける。

そして1953年12月17日、スターリン死亡によりソ連が解体。

データ？2 用語集・世界観（後書き）

・四式中爆撃機“飛龍”
ひゅうりゅう

双発の中型爆撃機。元は重爆に分類されていたが、帝國国防空軍設立（そして富嶽の配備開始）と同時に、中爆に変更された。海軍仕様機は“靖国”
やすくに
と呼称される。

・四式戦闘機“疾風”
はやて
（高等練習機“疾風”
はやて
）？

高性能な戦闘機だったが陳腐化が進み、現在では高等練習機として活躍している。が、他国にも輸出されており、そちらでは第一線で働いている。なお、？型は国防海軍のターボ・プロップ戦闘機“陣風”に倣い、二重反転プロペラを採用している。

？ 霧笛の音は風の色

第四水雷戦隊旗艦『酒匂』^{さかわ}の戦隊司令室に、一人の女性が座りこんでいた。それも、デスクに足を投げ出し、長い脚を組んでいる。どう見ても女性、それも少将の肩章を付け、純白の国防海軍士官服に身を包んだ麗人の行為ではない。が、なぜかそれが異様に様になっ

ていた。
四水戦（第四水雷戦隊）戦隊司令^{ほたるもりみなづき}蛸森水無月提督は、余裕綽々——ふてぶてしいと言えなくもない——とした雰囲気、目の前にいる青年と、少女を見つめていた。

一方、呼び出された青年、^{あいはのやこころ}藍原慧一は、軍帽を脇に挟んだ姿勢で立っていた。
その表情は、浮かぶ疑問を隠そうともししていない。

藍原の所属は、第二一警備戦隊群・第二〇五警備戦隊『K12号』である。

警備戦隊群は、原則的には派遣（展開）または配備先の司令部^{司令部直轄}となる。駆逐艦だろうが海防艦だろうが、回転翼機母艦だろうがそこは変わらない。理由は単純で、防衛艦隊と警備戦隊群はその任務が全く異なる。

いざとなれば、地球の裏側まで出征できる防衛艦隊と異なり、警備戦隊群は、沿岸警備が主任務である。シーレーンの警備や船団護衛も、各部隊により管轄海域が事細かく決められているため、一つの部隊が何日も大航海するわけではない。つまり、交代交代で警備するのだ。

駆逐艦も海防艦も、御世辞にも“足が長い”とは言えない艦種であ

り、特に警備戦隊群所属の艦は、航続距離など度外視した設計をして低コスト化と量産性の確保を図っている。その代わり、対潜兵装は強力なのだが。

藍原の乗艦である『K12号』も、新型の対潜兵装を搭載している。潜水艦から悪鬼の如く忌み嫌われるのは必至である。

もつとも海防艦の中には、“浮かぶ砲台”という意味で、船体に見合^{スケール}わぬ規模の巨砲を乗せている“風変わり”な艦もあるのだが。

言ってみれば、“母港”からさほど離れないのが警備戦隊群の艦艇だ。だからこそ、指揮は地元に一任される形となっている。

要するに、藍原が蚩森に呼び出されることは普通あり得ない。指揮系統が異なるからである。いくら将官とはいえ、自分の指揮下に無い者を、それも“己^{きかん}の城”の司令室に呼び出すことはしない。というより、そんなことをするモノ好きはそうそういない。

ましてや藍原は一介の少尉に過ぎない。少将と少尉が^{サン}一対一で向かい合っていることも、ある意味普通の光景ではない。

ちなみに、藍原と蚩森は初対面——少なくとも藍原からすれば——である。

さらに、ヤクザの若頭のような姿勢をとっている蚩森の横にいる少女が、藍原をさらに混乱させていた。

其れは、少女だった。黒い長髪に、褐色肌の少女で、どう見ても日本人ではない。

彼女は、どう見ても着慣れていない帝國国防海軍将兵服乙（女性用）を着込んでいた。

帝國国防軍の軍服は、帝國軍とは大きく違っており、今風にいえば

実用的かつスタイリッシュなものとなっている。それは国防海軍も例外ではない。具体的に言うと、色は上下ともにライトブルー。上から鉄帽ヘルメットを被れるよう、キャップ仕様の帽子には、二匹で対を成すイルカが刺繍されており、胸には錨マーク、そして配属艦名と艦種番号が刺繍されていた。

ちなみに国防海軍は米海軍などに倣い、艦番号はアルファベットと数字を組み合わせている。

少女が着込んでいる其れには、“BC-304 SAKAWA”と刺繍されていた。

なお、“BC”は日本独自の艦種記号で、“巡洋艦”を意味している。

このようなシステムが導入されたのも、日米が相互協力しながら平和維持に努めるためだ。

つまり、少女は『酒匂』の将兵服を着込んでいた。

が、雰囲気から察するに、ここの乗員ではないだろう。何というか――潮気が無い。

暫くして藍原は、少女が、先日『K12号』の甲板で、『酒匂』を眺めた時に認めた少女であることに気付いた。

「……………」

「あ、うん」

藍原が言うと、蛭森が軍帽をはずしながら藍原を見つめた。

「来てもらって悪いね、藍原くん。まあ、巡洋艦見学が出来たってことでチャラにしよう」と

感謝の欠片も、労わる気もゼロな言い回しだったが、藍原は全く気にした様子もなく、頷いただけだった。

「ちと古いし小さいが、まあ……悪くないでしょ」

確かにこの時期、水雷戦隊旗艦に拘った阿賀野型あかのは古いかもしれないが、一応戦闘中枢cicなども搭載した新世代艦である。まあ、太平洋戦争開戦（1945年）前に就役しているから、古いといえば古い

が。
サイズも古い言い方なら“軽巡洋艦”であり、大淀型おおよどや天塩型てしおなど比べると一回り小さい。当然、航空巡洋艦や大型巡洋艦にも劣る。

「で、用件だけどさ……このコ、預かってくれない？」

「……はあっ？」

藍原は大口を開け、提督を見つめた。

「いやね、このコ、記憶が無いのよ……先日、“蒼洋”からの報告を聞いてこのコ釣ったんだけどさ……国籍も住所もまったく不明。漂流してた理由も不明。えーと、まあ、あれだ……“アンノウン”ってえヤツ」

ペーパーをつまみ、其れを見ながら、やる気のない声で蛭森は淡々と言う。

「だからといって、保護施設にブチ込む気にもなれないし……『酒匂』にも置いとけない。此処だけの話、ウチらがやってきた理由^{ワケ}で、“海賊狩り”なのよ」

其れを聞いて、藍原は内心ギョツとした。

任務の内容ではなく、“其れを藍原に話した”という事実だ。

“海賊狩り”が何を指すかは知らないが、そこらの盗人相手ではないだろう。大体、水雷戦隊と航空戦隊、さらに戦艦部隊（遊撃戦隊）を引き纏れて、唯の海賊狩りなわけがない。

それ以前に、本当の海賊狩りなら、それこそ警備戦隊群やSPOの管轄である。

以前、ボートに乗ったゲリラを掃討した時にも『K12号』に乗り込んでいた（というより、機銃掃射に加わっていた）藍原には、その程度の知識はある。

どう聞いても“軍機（軍事機密）”の類である。

「いいのですか？自分に話して」

「良いわけ無いでしょ。ハイ、黙っててやつから引き受けなさい」

あっさりと言われ、藍原は肩をすくめた。

「でも、なぜ自分なんです？」

「君、“変人”でしょ？浜ちゃん……浜北クンから聞いたよ」

乗艦の艦長の名を出され、藍原は盛大にため息をついた。

「自分は普通ですよ」

「普通の少尉は、少将相手に肩をすくめたり、ため息ついたりしないしょ」

正論を言われ、藍原は再び黙りこむ。

「“アンノウン”の相手にや“変人”が似合うわー」

「そうですか」

突然、少女が藍原の目の前までやってきた。

「サリア。サリアって名乗ってます。宜しく」

「ン、藍原慧一。甚だ不服だけど、何とかなるさ」

挨拶を交わし、二人は握手をした。

余談だが、同時刻、『酒匂』のCICでは、電話機を取り上げた四水戦先任幕僚（先任参謀のこと）の中佐が、はまきた たけし浜北岳志『K12号』艦長に電話越しに平謝りしていた。それを『酒匂』副長や幕僚が、何とも気の毒そうに眺めていた。

「まったくあのヒトは……管轄が違う部隊から、わざわざ短艇ランボまで寄越して人を呼ぶだなんて……何考えてるんだ……」

受話器を置きながら、先任幕僚霧水華中佐は頭を抱えていた。むすいはな

？ 霧笛の音は風の色（後書き）

・なみかぜ 凧風型駆逐艦

基準排水量 4,300トンの大型汎用駆逐艦。多数の誘導弾を搭載しており、対潜兵装・防空システムも充実している最新鋭の駆逐艦。現在量産中で、最終的には三六隻が就役する予定。

・しまかぜ 島風型駆逐艦 『しまかぜ 島風』 ・ 『いそかぜ 磯風』 ・ 『みねかぜ 峯風』 ・ 『しおかぜ 潮風』 ・ 『なみかぜ 波風』 ・ 『うみかぜ 海風』

基準排水量 2,800トンの駆逐艦。最高速力四〇ノットの超高速駆逐艦だが、量産性に難があり、六隻の建造で打ち切られている。帝國国防海軍最後の重雷装艦でもある。

？ 堕ちる雲

海防艦に副長はいない。駆逐艦・潜水艦も同様である。戦闘時には、先任の航海長か水雷長（砲術長）、或いは船務長が代行する。

大量生産の“粗悪品”と思われがちな鵠くぐい型海防艦だが、船体はともかく、レーダーやソナーは（量産品とはいえ）一通り揃っており、窮屈ながらも電子機器を完備している。

ところで、藍原あいはら慧一は、船務科・船務士に任じられている。

“船務科”は情報・電測・通信から、船体消磁・航空管制・電子機器整備まで幅広く行う科である。

そして“船務士”は、船務長の下に就き、情報・電測・船体消磁を担当する。激務であり、小型艦とはいえ楽な仕事ではない。しかし、国防大学に進まなかったのが不思議なほどの好成績を叩き出した藍原が任じられるには、妥当な役だと言えた。

『K12号』の乗務員は少ない。だからこそ、一人一人の士官の任務もそれなりに多い。まあ、精々沿岸警備にしか出撃しないため、楽といえば楽なのだが。しかも、海防艦の主兵装メインウェポンたる爆雷や対潜魚雷、それにソナーは砲雷科の担当である。

それと比べれば、艦が沈没すれば真っ先に黄泉行きの機関科などと比べてもマシだろう。

しかし、台湾派遣艦隊（第一艦隊）が来航してからは、特に出撃もなく、第二警備戦隊群は暇であった。補給科の連中が騒ぎ出していないところから見ると、出撃命令もまだなのだろう。

第二一警備戦隊群と第一一艦隊は、共に高雄港^{たかお}を母港としていた。大部分が、台湾のコンテナ港となっていたが、一部が日本帝國に引き渡されていた。

そして、“高雄警備司令部”と命名され、嘗ては“警備府”と呼ばれていたこの地は大きく変わっていた。

台湾民主連邦は、日本を含む^{U N A O}アジアオセアニア連合諸国との貿易に熱心だった。日本を見習い、海洋貿易国家となる算段だろう。

警備HQの敷地内には、様々な建物が乱立していた。いかにも高級な建物もあれば、武骨な建物もある。

ここ高雄には、警備HQのすぐ横に大規模な航空基地——高雄航空基地が存在する。

フィリピン攻略戦で大いに活躍した基地である。四発の爆撃機も楽々運用できる規模で、“X”の字の形をした滑走路もある。

要するに、それなりの規模を誇る基地であり、フィリピン攻略時にも、ここ高雄港に大輸送船団が集結していた。それをエスコートする艦艇の中には、今は亡き戦艦『長門』^{ながと}と『陸奥』^{むつ}の姿もあった。

そんな日本帝國にとっては思い出深い施設だが、そう遠くない未来、台湾に返還されるだろう。

それはともかく、兵舎の一室で、藍原慧一は目を見開いていた。

船務長から口頭で伝えられた情報は、彼の横で座り込んでいる雪丘^{ゆきお}奏深^{かなみ}とサリアの首を捻らすには、十分な内容だった。もともとサリアの方は、全く理解できなかったからの“首を捻った”なのだが。

「『瑞穂^{みすほ}』が第二^{ウチ}一警備戦隊群に配属されるらしい」

「『瑞穂』？……ああ、あの水上機母艦の？」

「ああ……少し違うが」

『瑞穂』は基準排水量11,000トンの水上機母艦で、1939年に就役した旧式艦だった。本来なら、戦争の終結とともに除籍されるなりする予定だったのだが、予定が大きく変わった。^{ヘリコプタ}回転翼機の登場である。

国防海軍は、ヘリを水上機に代わる“航空戦力”として期待していた。特に、対潜哨戒機としての期待が大きかった。その場にホヴァリングで留まれ、滞空が可能なヘリコプタは、優秀な対潜システムの一部となり得る。

しかし、ヘリはまだまだ発展途上の兵器であり、操縦も難しい。ましてや、航行中の軍艦の甲板で離着陸するのは困難を極めた。かといって、停船しては潜水艦の的になるだけである。

そこで、国防海軍が目をつけたのが、空母である。広大な飛行甲板を持つ空母からの離陸（発艦）なら、それほど難しくはない。しかも大型空母なら、最低でも基準排水量30,000トンを超える巨艦である。揺れも少ない。

しかし、問題もあつた。回転翼機と艦載機（固定翼機）の同時運用は、整備士にとっては苛酷である。

さらに艦載機の噴式化により、整備はさらに難しくなっている。

ならばいつそ、ヘリ運用専用艦を造れば良いのではないかという意見が出たが、予算の収得が難しい。単一目的のために軍艦を新造するのは、コスト・パフォーマンスが悪すぎる。

が、人間、追い込まれると妙案を思い付くものである。

ちょうどこの頃、国防海軍は、中型空母の揚陸艦への改装を進めていた。

この中型空母は、ジェット機を運用するにはサイズの不都合で、扱いどころが難しかったのだ。

そこからヒントを経て、“無用の長物”となりかけていた水上機母艦に、白羽の矢が立ったのだった。

戦時中に『千歳』を始めとした水上機母艦は、多くが軽空母に改装されたが、中にはそうならなかったフネもいる。

『瑞穂』はその代表だった。彼女は海上護衛総隊に配備され、対潜掃討や水上機輸送に従事していた。

フロートを着着している水上機は、普通の航空機からすれば“格下”と見られがちだが、日本帝国には“晴嵐”や“藍嵐”（三式戦闘機“飛燕”の水上機ヴァージョン）などの戦闘爆撃機を始めとする、優秀な水上機が数多く存在していた。

需要は十分あったのである。

現に『瑞穂』は、水上戦闘機（水戦）“強風”を搭載し、防空任務

までこなしていた。

が、流石に1950年代に入ると、水上機の価値は減少していった。そこで、『瑞穂』は回転翼機母艦、つまり“ヘリ空母”に改装されたのである。

「すごいねえ……いいじゃん」

口笛を吹き、雪丘奏深は手を叩いた。

彼女は空軍のパイロットだったが、実家のコネをフル活用して、半ば強引に海軍兵舎に乗り込んでいた。

「良くないさ」

藍原慧一は否定した。

「僕は、コイツが必要な戦場トコに行かされるのかもしれないし」

「大丈夫だよ」

雪丘奏深は否定した。

「絶対にならない。必ず、絶対にそうはならないから」

ゆきおかかなみ
雪丘奏深。

彼女は元犯罪者。

罪状——“拉致監禁”。

藍原慧一を想うあまり、凶行に走った少女である。

もともと本人曰く拉致監禁など序の口だそうだが。

雪丘奏深は“狂人”だった。

自称“変人”の“狂人”だった。

そう周囲に思い込ませている“狂人”だった。

？ 堕ちる雲（後書き）

・瑞穂型回転翼機母艦『瑞穂』みずほ

基準排水量11,000トンの水上機母艦だったが、回転翼機母艦に改装されている。千歳型の準同型艦。千歳型と違って空母に改装されなかったが、近代化改装により、速力が上昇している他、旗艦機能を備えている。搭載機一八機。

* 史実では、太平洋戦争初の戦没“軍艦”となりましたが、今作では沈んでおりません。

？ 不穩は意図せずやってくる

澎湖諸島は、台湾の西に位置する群島である。

その付近を、旭日旗を掲げた艦艇が航行していた。

その内の一隻、ネイヴィ・ブルーに塗装された軍艦の艦橋で、一人の男が立っていた。

第四水雷戦隊駆逐艦『水風』は、陽炎型駆逐艦二三番艦として起工・就役した艦である。

陽炎型は基準排水量2,000トン、最高速力35ノット（後改装で37ノット）の快速駆逐艦である。嘗ては水雷戦隊の花形として、ロングラン“酸素魚雷”を武器に大暴れし、英国戦艦『ウォースバイト』を葬るなどの戦果をあげているが、現在は魚雷発射管を全廃。代わりに誘導弾と魚雷を両方発射可能な多目的発射筒を六基備えている。他にも国産八式爆雷投射機“漁火”などを搭載し、対潜戦闘力も確保している。当然、ソナーもある。

主砲は、対空両用砲である四年式八八ミリ両用砲三基に換装されている。

ちなみに四水戦（第四水雷戦隊）には、『水風』始め『早波』・『雪風』・『萩風』・『綾風』・『虚風』の計六隻が配属されている。

『水風』は、戦隊の最右翼を航行していた。

艦橋から、名も無き澎湖諸島のとある無人島を眺めていた艦長れいみき霊幹洞吾は、“車引き”（駆逐艦乗り）の艦長特有の潮気を纏っていた。

「船務長、電探レーダーに異常はないか？」

「皆無ですな」

マイクをとった靈幹は、戦闘CIC中枢を陣取っているはずの船務長へと声をかけた。その声は、些か緊張感が込められ過ぎているようにも見えたが、それでも靈幹はまだ平常心を保っているつもりだった。

靈幹洞吾は駆逐艦艦長にしては珍しく、生真面目一頭な性格だった。駆逐艦のトップには、大抵豪放磊落じうほうらいらくか沈毅雄武ちんきゆうぶ、或いは剛毅木訥こうきぼくどつのタイプが多いのだが、靈幹中佐の性格を表すなら、“慎重居士しんちゆうこじ”か、“用心堅固ようじんけんこ”となるだろうか。華族の末裔かと思うほどの品性な雰囲気ふんきを身に纏い、何事にも慎重だった。

こういった人種は、本来なら副長に向いているだろう。実際、巡洋艦が戦艦の副長の方が、彼には向いているのかもしれない。

一方船務長は、どこか余裕の感じられる声色だった。

駆逐艦は被弾に弱い。

魚雷でも誘導弾でも、一発貰えばアウトである。だからか、駆逐艦の艦長に臆病者は決してならない。出世街道エリートコースから外れるという意味もあるが。

要するに、純粹な“現場派”でなければ務まらないのが、駆逐艦艦長なのだ。

『水風』を含む四水戦の任務は、澎湖諸島の偵察だった。

最近、ここで海賊が出没しているという噂が入り、しかも彼らが、中華人民共和国（南中国）の手の者という未確認情報があった。

いざという時のために、四水戦の背後には二遊戦（第二遊撃戦隊）が控えている。ちなみに六航戦（第六航空戦隊）『洋鳳』・『天鳳』
・『大鳳』^{たいほう}は、台湾沖で航空団の受け入れの真っ最中だった。いざとなれば、航空支援が期待できる。

現在、中華大陸は三つの国家に割れていた。

中華民国（北中国）・中華連邦（東中国）・中華人民共和国（南中国）である。

そして日本帝國は、中華人民共和国と“冷戦”態勢にあった。

^{赤色}共産国家の南中国は、北部と東部を失い、南西に逃れているが、台湾の独立や残りの二つの中国の存在を認めておらず、日本及びUNAOを“悪の枢軸”と呼んでいた。ちなみに北中国と東中国は、UNAOに加盟している。

そして澎湖諸島は、当然中華人民共和国からすれば“自国領”であった。

そのためか、現在澎湖諸島は、一種の“空白地帯”となっている。双方ともに軍は進駐させていない。そんなことをすれば、火に油を注ぐ結果になることは誰でもわかるからだ。

そして亜細亞情勢はキナ臭くなる一方であり、剣呑な雰囲気だった。

「第三次世界大戦は、中華大陸から始まる」

世界各国の知識人は、そう言って憚らなかった。

もし、噂が本当なら、それは南中国の侵攻準備に他ならなかった。ならば、そんな考えは根底から叩きつぶさなくてはならない。

厄介なことに、南中国にはソヴィエドの技術者が亡命しているという噂もある。

有力な水上艦隊があるという情報は無いが、ミサイルを積んだボートでも脅威にはなる。

霊幹とて、かの四水戦が“海賊狩り”をするという現実に不満が無いわけではないのだが、任務は任務だ。軍人の本分は、任務の完遂である。^{パーフェクト}完全達成以外の結果は求められていない。

相手がボートや魚雷艇くらいなら、八八ミリ砲で粉碎できる。駆逐艦・巡洋艦が出てきても、誘導弾の飽和攻撃で最低でも戦闘不能に追い込める。誘導魚雷の斉射という奥の手もある（もっとも誘導魚雷は一艦につき一発しか配備されていないが）。

また、戦艦の援護も見込める。要塞砲とも渡り合える40センチ砲は戦力として十分である。

さらに、空母の艦載機もある。

「さて、どうなるか……」

「戦隊司令、『水風』より通信です……」「風波共二穩ヤカナリ」以上です」

「ふむん、成程」

旗艦『酒匂』^{さかわ}のCICで腕を組んでいた蛸森水無月提督は、したり顔で、しかし面倒臭そうな表情で頷いた。

「どう思つよ、霧水ちゃん」

指を指され、見るからに胃の弱そうな細身の女性——霧水華^{むすいはな}先任幕僚が顎を撫でつつ返答した。

「連中がどの程度の規模かは知りませんが、これだけの兵力を前にして正面からの決戦はしないでしょ。まずは身を隠し、獲物を待つか……最後まで隠れているか、撤退か」

「最後の二つは却下ね。面白くない」

あっさりと言われ、霧水中佐は頭を抱えた。顔が無駄に青褪めており、初対面の者がいれば船酔いを疑うこと確実である。

「警戒は万全？対潜警戒は？」

「我々は18ノットで航行中です。高速を出し過ぎると、ソナーは使い物にならなくなります」

「確か帝國国防海軍の潜水艦は、水中速力29ノットを記録したそうじゃん？」

「ええ。米国サンの潜水艦も同じくらいだとか」

「そんなのが出てきたらマズいねー」

「御言葉ですが、我が戦隊は警戦群（警備戦隊群）程ではないにしろ、対潜兵装を搭載しております。訓練も怠っておりません」

戦務幕僚がやや厳しい口調で言葉を返す。

一方霧水は、そんな血の気の多い青年を羨ましげに一瞥した後、拳手をして発言を求めた。

「後方に控えます六航戦より、“彩雲改”さいうんかいを飛ばすことを提案いたします」

『酒匂』は艦載機を搭載していない。新型対潜ヘリの配備が遅れているため、後部のヘリ甲板は空っぽである。陽炎型駆逐艦には、元々艦載機は搭載していないし、するスペースも無い。

「少なくとも我が国の認識では、澎湖及び本海域は台湾領です。偵察機を飛ばしたところで、問題ありません。そもそも偵察機を飛ばした程度では開戦たる理由になりませんし」

どうやら霧水中佐は、見かけと違ってしっかり意見できる人間らしい。まあ、司令に上申するのも幕僚の務めだ。

「ん、諒解」

蛭森はあっさりとその進言を受け入れた。

「嵯峨川クン、六航戦の安芸司令に連絡して。「ワレ目標海域ヲ偵察スルモサシタル情報得ラレズ。偵察機ノ発進ヲ望ム」以上」

？ 不穩は意図せずやってくる（後書き）

・陽炎型駆逐艦^{かげろふ}

基準排水量2,000トンの駆逐艦。旧式化が進んでいるが、兵装を換装して戦闘力を維持し続けている。ただし、魚雷発射管をはずし、代わりに誘導弾も発射可能な多目的発射筒を六基搭載している他、主砲を八八ミリ両用砲に換装している。

* 史実では一九隻が就役していますが、今作では二四隻が就役済み。内六隻が、戦争にて戦没しています。

？ 上から降る雷

ゆきおかかなみ
雪丘奏深は、内心怒り狂っていた。

最愛の恋人との時間を邪魔され、しかも、下された命令が国防海軍の支援だ。

本来なら、緊急時に備えて緊急離陸態勢で、ホット・アラート高^{たか}雄航空基地に戦闘機の二機や三機は待機しているはずだ。

それを飛ばせば良いと思うが、この日待機していたのは、“震電^{しんでん}改^{かい}”？だった。この機は邀撃機としては優秀だが、航続距離は長くない。元々渡洋出撃など度外視しているから当然なのだが。

そのため、“迅雷^{じんらい}”を装備している雪丘達第三九八航空団第五六七戦闘飛行隊に白羽の矢が立った。

御蔭でこの様だ。

六航戦（第六航空戦隊）の艦載機はどうしたと文句を言った雪丘だつたが、作戦会議^{フリーファイニング}に来ていた飛行長に、^{エアボス}ジェット機があまりに速すぎるため、海軍の彩雲改^{さいうんかい}を護衛できないという理由でにべもなく追い返された。

雪丘奏深は、一度キレると彼女の恋人——藍原^{あいはら}慧^{すい}一^{いち}が慰めるしか、機嫌が直らない。

それは、五六七隊の搭乗員^{パイロット}から整備員^{エンジニア}まで、誰もが知っていた。

そして、キレている雪丘奏深が、とてつもなく恐ろしいということも。

普段は、御淑やかな名家の令嬢という皮を被っている雪丘だが、彼女の本性は酷かった。
それはそれは酷かった。

彼女は、自身を藍原慧一のための“道具”と割り切っていた。

自分も、富も、名誉も、家柄も、金も、何もかも。

「各機各機、こちら「長篠01」。ながしのそろそろ澎湖ほうこが見えてくるはずだ……海軍サンの偵察機カメラ野郎が覗き見している時に、しっかり護衛しろよ」

通信機から飛行隊長の声を聞き、雪丘は顰め面をさらに歪めた。

機体を純白に塗り、尾翼に赤い矢が描かれた六機の四八式戦闘攻撃機“迅雷”は、綺麗な陣形を維持しつつ飛んでいる。

推進式六翅プロペラが、独特の音を鳴らす、それはエンジンが快調である証である。

双胴式双発戦闘機である迅雷のコックピットで、雪丘は、知らず知らずのうちに機銃引き金トリガの安全カバーを指で押し上げていた。

——ああ、殺したい。

雪丘奏深は殺戮者だ。

彼女は藍原のための道具となり、無機質な戦闘マシンとなることに快感を覚えていた。

そんな自分自身が、大嫌いだった。

自分も、親も、家も、祖国も、世界も、何もかも嫌いだった。

唯一好きなのは、彼だけだった。

ボーツとそんな事を考えていた雪丘は、ふと下を見ると、彩雲改が飛んでいるのが見えた。

彩雲改は、ターボ・プロップの高速偵察機だ。

流石にジェット機となると厳しいが、レシプロ機なら振りきれられる。

偵察機は“生きて情報を持ちかえること”が至上命令である。護衛があつて困ることはない。

「「長篠05」……「小雨^{しづく}」につけ」

「諒解」

雪丘は返答して、機体を彩雲改付近までもっていく。その後ろを、僚機の「長篠06」がくつついてくる。

二機に挟まれた形となった彩雲改——コールサイン「小雨」——は、低空飛行しつつ、無人の島、というより岩礁を偵察している。

澎湖諸島の中でも、大きな島は住民がいる。が、そのほとんどは、今は一時的に避難している。

一種の疎開であり、台湾が、澎湖諸島を戦場にする気満々であることが窺える。

が、もちろん元から無人で、人間を養えない島も無数に存在する。

元々戦略的には重要だが、資源的には、それ程価値の無い島である。獲れるものは魚くらいだろうが、島国の台湾は、元々水産資源が豊富だ。

戦争という危険を犯してまで、手に入れたい宝箱でもない。^{リスク}

何より台湾は、対ソ戦後に独立したばかりの新興国だ。国軍も整備されていないし、兵器は日本帝國のお下がりである。戦争などできる状態ではない。

さらに、国内統治も順風満帆とはいかなかった。

だからここで、中華人民共和国（南中国）が触手を伸ばしてくるのは非常に困る。

彩雲改は、大きく翼を振ると、雪丘機の真横についた。通信が入る。

「こちら「小雨」……どうも様子が……変だ……人工物が多数……確認……」

雪丘は眉を顰めた。

同じことを飛行隊長も考えたらしい。

「カク、カク、全員戦闘準備……空気が悪いな、くるかもしれん」

柏城蒼樹^{かしむらぎ}飛行隊長は熟練搭乗員だ。……そういう勘は大抵当たる。

雪丘は無意識に、目の前に映し出される標準^{レクティル}を確認。レーダーと連動しているかをチェックする。

そして機銃の安全カバーを完全に押し上げ、周囲を警戒した。

レーダースコープを見ても、異常は見受けられない。敵味方識別装^F置も異常なし。

「あっ……こちら「長篠04」、海面に航跡を確認しました。位置は——」

その中心が終わる前に、隊長機——「長篠01」が動いた。

海面へと急降下し、波を舐めるような低空飛行で直進する。僚機の

「長篠02」も、さも問題無いと言わんばかりにそれに続く。

双発機で無茶をやるものだと言雪丘が感心していると——もつとも迅雷は、それが可能な設計となっているのだが——柏城大尉から続報が入った。

「確認した、小型艇だ……砲……サイズはわからんが、多分戦車砲クラスだ……発射筒が見えるッ」

「あ、死んだかな」

雪丘はボソリと呟いた。

死ねばよい。その分だけ、自分が嫌いな人間が一人減る。

——一人でも多く、死ね。

雪丘は口元を歪め、純白の肌に皺を刻んだ。

白線が天へと昇っていく。誘導弾——いや、無誘導の噴進弾^{ロケット}が発射された証だろう。

空へ咲くはずの花は咲かない。

隊長機は避けたらしい。

いや、“向こう”が外したのか。

——役立たずが。

雪丘は、機体を急降下させた。

「——ちよつ、雪丘さんッ!？」

僚機の声を見殺し、雪丘奏深は、視界に小型艇を捉える。

小さい。漁船に毛が生えたような船だ。

確かに砲と発射筒らしきものが見える。旗は掲げていない。

機銃の引き金を引く。

機首の四門の30ミリ機関砲が火を噴いた。閃光を曳いた火線が、標準の中心に吸い込まれていく。

命中。

激しい金属音が響く。
発射筒が吹き飛んだ。アンテナも倒壊する。

「どうゆうことだ」「長篠05」

「邪魔でしたので」

雪丘は涼しい声で、そう答えた。

？ 上から降る雷（後書き）

・四五式局地戦闘機“震電改”しんでんかい？
震電に三〇〇〇馬力のジェットエンジンを搭載した改良型。その中でも？型は、エンジンをさらにチューニング・アップさせ、空対空誘導弾の搭載も可能であり、帝國国防空軍が世界に誇る強力機である。邀撃機として運用される。

・彩雲改さいうんかい

彩雲の発動機をターボ・プロップエンジンに換装した艦上偵察機。

？ 罌に飛び込む憐れな蛙

不審武装船と交戦の報に、四水戦（第四水雷戦隊）に緊張が走っていた頃、澎湖諸島に向け航行中だった六航戦（第六航空戦隊）四護戦（第四護衛戦隊）から成る空母部隊が、攻撃隊発進を急がせていた。

小型艦艇は機動性が良く、高速だが、航空機による空からの攻撃には弱い。小型爆弾でも致命傷を喰らう。

しかし、援軍を待つまでも無く、四水戦司令ほたるもりみなつき蛸森水無月は戦闘命令を下していた。

当然、これは越権行為でも何でも無い。自衛のための戦闘発令は、現場指揮官なら誰もが与えられている。

攻略戦ならともかく、防衛戦や突発的な遭遇戦では、事前に指揮官にある程度の権限が用意される。今回の場合も、敵と遭遇する確率は高かったから、蛸森は少将として、戦隊を生き残らせるために当然、独断での戦闘開始が認められていた。

そのため彼女は、ダルそうにしながらも、矢継ぎ早で命令を下していた。

「総員戦闘態勢、国籍不明の不審武装船を発見すればとりあえず沈めて。問答無用……いきなり噴進弾ロケットを撃つ阿呆にやいらないわ。まあ、少しは生き残りが出るかもしれないから、漂流者は救助して……情報をたっぷり搾り取らせてもらいましょ」

「戦闘態勢、とは？」

確認の意味も込めて、霧水華^{むすいはな}先任幕僚が聞く。
すると、蛭森は不要だ、と言わんばかりに軍帽を深くかぶり、腕を組んだ。

「無論、砲戦よ。今の陣形を維持して……よってたかってこられると面倒だし。でも、接近されたら各艦長の判断に任せるわー」

高速で動きまわる小型艇相手では、流石の誘導魚雷も分が悪いし、そもそももったいない。
誘導弾も大量生産が可能になり、コストは大幅に下がっているが、それでも高い精密兵器である点には変わらないのである。

現在、『酒匂^{さかわ}』は戦隊の中央についていた。それを、六隻の駆逐艦が囲むように配置されている。
そして、澎湖諸島方面には、『水風^{みずかぜ}』・『萩風^{はぎかぜ}』・『雪風^{ゆきかぜ}』が配置されていた。

「『水風^{れいみき}』の靈幹^{れいみき}クンと『萩風^{おのだ}』の斧田^{おのだ}クン、そして『雪風^{ゆきかぜ}』の霜^{しも}柳^{やなぎ}チャンは優秀だからどうにでもなるでしょ」

「諒解しました、至急、その旨を伝えます」

艦隊幕僚が嵯峨川通信幕僚を一瞥すると、彼は無言で頷いて通信員オペレータに指示を飛ばした。

「やはりか」

「そのようで」

駆逐艦『水風』の艦橋で、艦長わいみきやう霊幹洞吾が顔を歪めた。それを見護るように、先任（副長代行）であり航海長でもある青年が微笑みながら見つめていた。

「砲戦、用意」

戦闘喇叭ラッパが鳴り、艦内に緊張が走る。

「岩礁に注意しろ、どこに潜んでいるか知れたものじゃない」

「レーダー管制システム、正常に作動しています」

「電波妨害も警戒しておけ」

「対潜警戒を怠るな」

「主砲発射、いつでもいけます」

連絡が次々と飛び交う中、急にサイレンが鳴り響いた。

霊幹と航海長の顔色が変わった。

“魚雷接近”を知らせる警報^{サイレン}だった。

「右舷より魚雷接近」

水測室^{ソナー}からの通信に、霊幹は回避を命じる。

最高37ノットを叩き出す、『水風』の機関は今日も万全だった。

「回避成功」

「敵船は？」

「発見できておりません」

「潜水艦か？」

「おそらくは」

「艦長、『萩風』が回避運動を始めました」

「何だと」

靈幹は双眼鏡を後方へと向ける。
後続している駆逐艦『萩風』と『雪風』のうち、『萩風』は大きく
回頭しはじめた。

敵船は未だに発見できず、影も形もない。となれば、潜水艦の可能性が高い。

「水雷長、爆雷投下を用意しておけ」

「諒解です」

「艦長、『雪風』艦長から通信です」

「あ？何のつもりだ？」

訝しげな表情を隠そうともせず、靈幹は受話器を取った。

「どうも……ぜ」艦長霜柳少佐であります……」

雑音混じりに、高いソプラノヴォイスが響いた。

『雪風』艦長霜柳海晴しもやなぎみはるの声は、適度な緊張を含んでおり、それが逆に靈幹を落ち着かせた。

「本艦の右方より……若干な……ら推進音ノイズを……捉えました。国籍

までは……何とも言えませんが……潜水艦です」

「攻撃は可能か？」

「命中は期待できませんが、損傷くらいは可能でしょう……こちらが送った海域に、“漁火”（八式爆雷投射機）……を撃ちこんで……下さい。斧田中佐にはこちらから連絡します」

「諒解した」

『酒匂』からも許可を得た霜柳は、律儀にも自らマイクを握ったらしい。

霜柳海晴は、四水戦で一番新任の艦長で、蚩森と同じく数少ない女性“水雷屋”だった。

「テッ」

水雷長の命令で、“漁火”より一六発の小型爆雷が扇状に発射された。それぞれ磁気探知機能を備えており、潜水艦に近付くと自動で爆発する仕組みとなっている。

また、特定深度になっても勝手に爆発する。

無数の水柱が上がり、一際大きな水柱が上がった。

「あ、大きな水柱！あ、あ、油が浮いて来ました、波紋状に広がっていきます。撃沈か、損傷を与えました」

その報告に、霊幹は小さく頷いた。

同じ頃、雪丘^{ゆきおか}奏深を含む五六七隊の迅雷六機もまた、不審船に攻撃を繰り返していた。対地兵装は搭載していなかったが、まとまって機銃掃射するだけでも、漁船程度なら打撃となる。乗務員を殺傷すれば、唯の“浮き船”となるからだ。

紅い飛沫があがるのを見つめ、雪丘は満足げに頷いていた。が、突然、対空砲火が上がった。

「どこだ」

柏城^{かしわぎ}隊長の不快そうな声が響く。もつとも、雪丘は彼の機嫌が良い声を聞いたことが無かったが。

岩礁の、洞窟の中からだった。岩が天然の塹壕^{トレンチ}を築いている。

それほど大口径でも、長射程でもなさそうだ。“対空砲”ですら無いのかもしれない。

「潮時か」

彩雲改「小雨」はすでに帰還していた。
海軍の援軍もそろそろ来るだろう。

「引き上げるぞ」

「諒解」

雪丘は小声で返すと、興味が失せた目で、鮮血と弾痕で彩られた武装船を一瞥した。

甲板では、東洋系の男が片腕を失い、呻いていた。

？ 罌に飛び込む憐れな蛙（後書き）

・松^{まつ}型駆逐艦

基準排水量1,500トンの量産型対空・対潜駆逐艦。徹底した低コスト化や、工期の短縮によって二〇〇隻以上が大量就役している。船団護衛や対潜掃討などに活躍しているが、速力に難があるため、空母艦隊随伴は不可能。アジ^{UNAO}アセアニア^{UNAO}連合加盟国にも給与されている。

？ しんしんと積もる不信

「第一艦隊、台湾領澎湖諸島ニテ国籍不明潜水艦ニ襲撃サル」

電文を握りしめ、一人の男が頭を抱えていた。

帝國国防海軍士官服を着込み、大佐の肩章を付けた男は、一声唸ると、後ろで控える砲術長を見つめた。

「国防艦隊司令部は戦争をする気か？」

「いささか判断がつきかねますな。相手は“海賊”ですし」

「海賊だと？ 一体どこの世界に、魚雷を装備した潜水艦に海賊旗ドクロを掲げる冒険野郎がいるんだ？」

男——無東銅鐸むとうどうたくは、今にも貧血で倒れそうな表情を皮肉気に歪めた。そして大声で詰め寄った。

「どう考えても、これは南中国（中華人民共和国）……若しくはそれに見せかけようとする第三勢力の仕業じゃないか！
ボーダーライン
国境線があやふやで冷戦体制になっている島に、“海賊”らしき武装船と潜水艦が現れ、台湾の同胞たる帝國籍の軍艦を攻撃してきた。これが偶然で片付けられるかッ！」

まくし立てられ、年季が入った風体の砲術長は、困ったように眉を下げた。

無東の意見はほぼ正しい。だからこそ反論できないし、否定もできない。

「本国はこんな時に何を考えているんだ？ “海賊狩り” を名目に、堂々と澎湖諸島に軍を派遣する気か？」

それこそまさかである。戦争になっても文句は言えない。澎湖諸島は、南中国福建省の眼と鼻の先だ。戦略爆撃機どころか、双発中爆撃機でも悠々と往復が可能である。

もし、澎湖に帝國の航空基地でも造られれば、南中国は喉元にナイフを突きつけられたような状態となる。

ましてや福建省は、東中国（中華連邦）と国境を接している“最前線”だ。同時に攻撃されれば、目も当てられない。

「そんなことになれば、我々は真っ先に戦場送りではないか……」

無東はそう言って、頭を抱えた。

無東銅鐸が艦長を務める大型多目的巡洋艦『天城』^{あまぎ}は、沖縄の中城^{なかぐすく}湾に停泊していた。

所属は第二防衛艦隊第三遊撃戦隊だったが、『天城』そして姉妹艦『葛城』^{かつらぎ}と、なぜか第一防衛艦隊所属の第三護衛戦隊と共に沖縄に派遣され、第八艦隊を編制していた。

大型巡洋艦二、巡洋艦一、駆逐艦六というちぐはぐな編制であり、対外的にも彼ら自身にも、沖縄警備のための部隊だと説明されていたが、いざ中華大陸で戦火が上がった場合に備えての高速機動部隊であることは、誰でも想像がついた。

天城型大型多目的巡洋艦は、元は大量除籍した戦艦の穴埋めのために建艦された艦である。しかし、運用試験を行っていくうちに、戦艦との殴り合いは不可能という結論に至った上、防御力の不足が指摘された。旧式戦艦相手ならまだ戦えるが、米国のサウスダコタ級やアイオワ級と殴り合うには装甲が薄すぎる。

もともとサウスダコタ級やアイオワ級・モンタナ級は、『大和』^{やまと}や駿河型と死闘を演じることとなったのだが、それでも“第二次珊瑚海海戦”で『サウスダコタ』により『陸奥』^{むつ}が撃沈され、“第二次マリアナ沖海戦”で『モンタナ』により『長門』^{ながと}が失われている。その『サウスダコタ』と『モンタナ』も『大和』により引導を渡されたのだが、『長門』や『陸奥』が沈められた以上、天城型もその場にいれば沈められただろうから、帝国の判断は正しかった。高速性を重視し過ぎた結果、防御力は低く、特に魚雷防御は致命的だと判断されたのである。

しかも、工期も思ったほど短縮されず、戦艦とさして変わらなかった

た。

結果、本来なら、駿河型巡洋戦艦や金剛型戦艦と共に、敵戦艦との遭遇戦や防空艦として活躍する艦として大量建造される予定だった天城型は、僅か二隻で建艦終了となった。

その代わりとして、阿蘇型航空巡洋艦にも装備されたV字飛行甲板が設置され、航空機の運用も可能となった。

主砲も戦艦との砲撃戦が出来ない以上は不要である。三六センチ六〇口径連装砲三基の予定だったが二基に減らされた。

が、空母護衛の任は変わらず——そもそもそのために高速性を確保したのだが——防空艦としての機能は予定通りに備えられた。

結果、巡洋艦との殴り合い・空母護衛・航空機運用が可能と幅広くマルチな機能を備えた艦となり、“大型多目的巡洋艦”——通称「大巡」に分類された。

そんな天城型は、コンパクトな高速展開部隊を率いるには最適である。神出鬼没に南中国沿岸に現れては、艦砲射撃や航空攻撃を行える。

さらに天城型は改装により、様々な誘導弾・噴進弾を搭載しているから、攻撃手段も無数にある。

が、艦長の無東としてはたまったものではなかった。

敵は躍起になり、第八艦隊を仕留めようとするに違いない。獲物を狩る猟師の如く、付け狙われるのは目に見えている。

天城型が防御力に難があるのは周知の事実だ。

“第二次マリアナ沖海戦”で、合衆国最強のモンタナ型戦艦『メイ
ン』が戦略爆撃機“富嶽”部隊の爆撃で煉獄に沈んだ事からも分か
るとおり、戦艦でも空からの攻撃には敵わない。

ましてや、巡洋艦に過ぎない天城型はもっと敵わない。
航空支援は必須であるが、第八艦隊に空母はない。

「せめて、中型空母が二隻あれば……」

天城型の搭載機は、『天城』と『葛城』を足しても二〇機。小型空
母一隻程度である。戦闘を数回行えば、たちまちすり潰してしまう。
いや、一回の攻撃で壊滅する可能性も十分ある。

雷鶴型が欲しいなどと贅沢は言わないが、せめて海隼型が欲しいと
ころである。

そんな弱気な無東を見ながら、砲術長は呆れていた。

——これが帝國国防海軍大佐、それも大巡艦長の姿か。

無東の懸念はもつともであるし、艦長は乗務員の命を預かっている。
帝國の“人命尊重主義”は末端まで行き届いている（はず）だから、

無東が特殊というわけでもない。

が、せめて部下の前くらいは虚勢でも良いからしゃんとしてほしい、と林垣巡少佐は複雑な表情で艦長を見つめていた。

？ しんしんと積もる不信（後書き）

・天城型大型多目的巡洋艦「天城」・「葛城」

基準排水量28,000トンの大型巡洋艦。減少した戦艦の代替艦として建造されたが、防御力が低く（特に魚雷防御が致命的だと判断された）、艦隊決戦は困難であり、コストはともかく建造期間には戦艦と大差ないこともあって、二隻で建造終了している。三六センチ六〇口径連装砲二基を備えている他、後部にV字型飛行甲板を有しており、一〇機の航空機を搭載できる。防空艦としての機能も持つ。通称「大巡」。

・改松型駆逐艦（橘型駆逐艦）

基準排水量2,200トンの護衛駆逐艦（丁型駆逐艦）。松型駆逐艦の改良型・拡大型であり、速力などが上昇しているが、その分工期やコストは高くなり、松型が二〇〇隻以上就役しているのに対し、こちらは八〇隻程と数は少ない。高速のため、空母部隊や巡洋戦隊に随伴できる。

？ 果てぬ淀

日本帝國の海軍戦力は、大きく分けて三つの“柱”がある。

“航空戦力”・“護衛戦力”・“潜水艦戦力”である。

日露戦争により、兵站線がいかに重要か、そしてそれを叩く事がいかに効率的かを学んだ日本帝國は、“通商破壊戦”つまり輸送船・補給船叩きにも注目していた。

そこで、帝國は航空戦力を駆使した、通商破壊戦を研究した。

航空戦力は、本来なら敵——合衆国艦隊の戦艦や空母への攻撃及び防御に使うべきであり、事実、米艦隊を尽く鬼籍に送り込んだのだが、それはあくまで“主力”部隊の話である。

視点を変えれば、航空機は輸送船叩きに向いている。

広範囲を哨戒し、発見すれば直ちに攻撃できる。輸送船の速力で航空機から逃げられるわけもないし、戦闘機が搭載できる小型爆弾でも十分効果がある。

しかし、大型空母を中心とした兵力を通商破壊戦に投入するのは流石に過剰兵力である。そこで帝國は、『伊吹』や『利根』・『筑摩』（『利根』と『筑摩』は元は巡洋艦だったが、空母に改装された）を始めとした軽空母で通商破壊チームを結成して、米軍を混乱させた。

しかし、やはり“兵站線叩き”の専門は潜水艦である。

帝國は、高速水上艦隊を補足できるような高速潜水艦の整備も進めていたが、同時に大量生産が可能な中型潜水艦も一〇〇隻単位で運用し、米英輸送船団と熾烈な攻防を演じた。

そんな帝國潜水艦隊は、戦後に大きく再編された。

まず、大型・中型潜水艦は、潜水母艦や支援艦艇と共に第三防衛艦隊に再編された。これを、呉鎮守府の司令部^{HQ}が統率する。

さらに、南洋諸島などの各地にもHQが設立され、戦隊単位の戦力はここで統率される。

同時に、偵察・沿岸警備用の小型潜水艦は、警備戦隊群に配属変えとなった。

さて、戦後の帝國国防海軍は、新型潜水艦の整備に動いていた。

水中速力29ノットを可能とし、誘導弾の搭載も可能な新世代潜水艦伊五〇〇（へきしお）型の整備に入るが、戦時中の様に一〇〇隻も二〇〇隻も整備せず、現在は三五隻の就役に留まっている。

同時に核動力潜水艦の開発にも力を入れ、伊一〇〇〇型核動力潜水艦『山城』^{やましろ}がすでに就役している。姉妹艦の『扶桑』^{ふそう}・『高千穂』^{たかちほ}も、そろそろ就役する予定である。

他にも、戦時中に活躍した潜水戦艦（砲潜水艦）や潜水空母（航空潜水艦）も改装されたり、代替艦が就役していた。

同時に、戦時中に量産された大量生産潜水艦は、大部分が除籍された。つまり現在、三防艦（第三防衛艦隊）に所属する潜水艦は、大部分が戦後に就役した新型艦か、改装された艦である。

もっとも、それは帝國国防海軍全体に言えることなのだが。

台湾に派遣されている潜水任務部隊、通称「桶狭間隊」^{おけはざま}も、その最新鋭の伊五〇〇型潜水艦を中心に編成されていた。

桶狭間隊の派遣目的は、南シナ海の治安維持だと発表されていたが、傍から見れば中華人民共和国（南中国）への牽制と恫喝に他ならなかった。

南中国は帝國やアジアオセアニア連合各国とは国交断絶状態にあるが、中東諸国や欧州の一部との貿易は行っている。
シーレーン
海上交通路が途絶えれば唯では済まない。

伊五一八『ごうしお』も、そうならば通商破壊戦に奔走することになるだろう。

伊五〇〇型潜水艦は、ティアドロップ涙滴型である。潜水航行に最適な船体だった。さらに急速潜航に役立つ水中翼も備えている。緊急潜航時には、この水中翼のフラップ操作によって水中運動を敏速化するのである。加えて新機軸として、自動操舵システムも備えている。ソナーと連動して、潜水艦を自動操作するシステムで、航海長や航海士の負担は大きく減った。信頼性も高く、故障も減多にないのも技術陣の成果であろう。

『ごうしお』はいつも通り、訓練と哨戒・海洋調査を兼ねた航海の真っ最中だった。

台湾海軍は、日本帝國から呂三三型潜水艦を給与るされていた。小型潜だが航続距離は長く、静寂性も悪くない。が、潜水艦の操縦は簡単にはいかない。訓練も不十分だった。

だから、桶狭間隊が台湾周辺で唯一の潜水艦戦力といっても過言ではなかった。

そんな大役が任されている桶狭間隊の『ごうしお』だったが、当の艦長は、艦長室で海図を見ながらコーヒを啜チャートっていた。

隠岐光尚^{おきみつ なお}少佐は、国防海軍でも有名な“洋風かぶれ”で、常に略装の首から十字架を下げ、聖書を艦内に持ち込んでいた。これだけ聞くと唯の変人だが、彼は“nobles^{ノブレス} oblige^{オブリージ}”（「自分には義務が伴う」）を信条とする高潔派であり、数々の武勲をあげながら、戦場に出て一人も部下を失っていないという誇るべき戦訓を持っている。

と、同時に大のコーヒー好きで、武骨な支給品のステンレス製コップで高級コーヒー^{ブルー・マウンテン}を飲む姿が、艦内で確認されている。

英連合王国^{ローヤル・ネイヴィ}立海軍、そして旧帝國海軍から血を受け継ぐ帝國国防海軍でも、相も変わらず知英米派はいた。

本来なら、とつくに中佐が大佐に昇進して潜水戦隊司令か核動力潜水艦艦長になっておかしくない人間なのだが、なぜか今でも少佐であり、部下からは“潜水艦隊七不思議”の一つとして語り継がれているらしい。

当然、そんな隠岐光が『ごうしお』艦長に就任したことに、乗務員は大いに沸いた。彼の名を知らぬ潜水艦^{サブマリナー}乗りはおらず、彼の乗艦に乗れば、絶対に生き残れると信じていたからである。

『ごうしお』航海長志摩本冬樹^{しまもと ふゆき}もその内の一人だった。

志摩本は、“何事も上官に学ぶ”を信条としている人間で、上司の良いところを徹底的に盗み、自分を育てるタイプだった。つまり、上司に嫉妬したり、寝首を掻こうとするタイプではない。

軍人、それも潜水艦勤務の様な苛酷な職場は、上官に下剋上を果たす気概が無ければやっていけないから、そういうタイプは珍しくないのだが、志摩本は違うらしい。

潜水艦勤務は苛酷である。今でこそ、居住空間が改善され、空気浄化装置や空調装置が導入され、さらに潜水母艦の支援も充実して大分マシになったのだが、相も変わらず碌にお天道様も拝めないし（寧ろ潜航時間は長くなっているのによけい拝めなくなっている）滅多に風呂に入れない。食事も新鮮食材はあつという間に尽きる。

アメリカでは“豚の舟”^{ヒッグ・ボート}とすら言われ、帝国のサブマリナーから“牢獄の囚人の方がマシ”とまで言わせた潜水艦勤務の苛酷さ（と居住環境の劣悪さ）は、悪い意味で健在だった。

さらに、攻撃を喰らえばたちまち潜水艦は、“鋼鉄の棺桶”^{スチール・コフィン}と成り果てる。潜航中の潜水艦が撃沈され、乗務員が生存できる可能性はごく僅かだ。大抵の場合、水圧と衝撃波により肢体は引き裂かれて魚の餌となる。

が、帝国では潜水艦の地位が高かったうえに、人命尊重論が台頭していた。乗務員の居住環境改善は潜水艦隊司令部、艦政本部、旧軍令部（現海軍幕僚本部）のいずれの組織からしてみても至上課題であつた。

さらに潜水艦隊は水上艦隊と比較しても選抜部隊である。給料も高かつた。

が、それ以上に誇りを持っているサブマリナーも多かったことも事実だった。

「艦長、不審なノイズをキャッチしました」

チャートを見ていた隠岐光は、志摩本の声に顔をあげた。

「ノイズ？潜水艦か？」

「おそらくは。国籍も特定できません」

「『仁淀^{にみ}』に連絡は？問い合わせる。友軍かもしれんぞ」

「通信しますか？悟られますよ。通信可能深度まで浮上する必要があるあります」

伊五〇〇型は新型耐圧鋼を採用しているため、200メートルまで潜れる。いや、試験では250まで行けたらしいのだが、今はそのような綱渡りをすべき時ではない。

「しかも、本群は広範囲に広がっております。友軍潜水艦が、付近にやってくるでしょうか？」

潜水艦隊の基本理念は通称破壊戦である。

相手が船団を組んでいる場合、一隻で襲うのはいかにも効率が悪く、危険だった。

そのためSFにとって、陸上司令部や旗艦、或いは電子戦機を通し

た長距離無電システム、そして任務群^{チーム}同士の相互通信連携^{コミュニケーション}（水中電話）を確保するのは至上命題であった。
集団戦術——ドイツで言う“狼群戦術”^{ウルフ・パック}——をしようにも、目標船団の位置と僚艦の位置が不明ではやりようがない。

そのため、帝國はこれらの開発・装備・実用化を急いだ。だから、いつの間にか僚艦が近くにいたという間抜けな事態も起こり得ない。

「航海長の疑念はもつともだが、彼奴が同盟国・友好国の潜水艦ならば、帝國の外交政策に支障をきたすぞ」

首から下げた十字架を握りしめながら、隠岐光は軍人としては異様に長い髪を掻いた。

「しかし、同盟国や友好国、或いは中立国の潜水艦なら、事前に通告して来ないはずがありませんし、そもそもここは公海とはいえ台湾付近です。潜航すること自体が問題です」

当たり前だが、帝國は台湾連邦政府に事前許可をとって訓練・航行している。仮に、他国の潜水艦の航路^{ルート}と接触する場合、事前に説明があるか訓練中に通信が入るかあってもおかしくはない。

それに潜航中の潜水艦が無断で領海に入るか接近する行為は、撃沈されても文句は言えない行為である。

「とにかく、『仁淀』に確認を取れ。一応戦闘態勢だ」

「諒解です」

志摩本は小さく頷き、通信長に伝えた。

？ 果てぬ淀（後書き）

・伊五〇〇型（へきしお型）潜水艦

基準排水量2,000トンの新型潜水艦。新型シユノーケルやソナーを搭載し、機関のパワーアップしているため、水中速力29ノットが可能。静寂性にも優れている。また、対地・対艦誘導弾搭載用の発射筒も装備。同型艦は三五隻で、現在も量産中。

？ 水色に消えて縹色

「何だつて？もう一度言ってくれないか」

『K12号』の戦闘中枢で、^{CIC}受話器を取りながら藍原^{あいはら}慧一^{すいいち}は聞き返した。

「だから、空母だそうだ。中華人民共和国赤色海軍の空母が台湾に向かっているらしい」

嘗ては、ソヴィエト海軍を指していた“^{レッド・ネイヴィ}赤色海軍”は、今は中華人民共和国海軍を指す言葉として定着していた。

藍原は小首を傾げ、『K12号』通信士^{せみはら}蝉林^{せむぎ}津具樹^{つぐき}に聞き返した。

「連中に空母があつたのか？」

「空母といっても、輸送船の上部構造を全部取っ払って飛行甲板をとっ付けたような代物だ。カタパルトがあればレシプロ機なら運用できる。複葉機ならさらに容易だ」

蝉林の返答を聞き、藍原は諒解を返すと受話器を置いた。通信士は船務科の役職だが、航行中は艦橋にて艦長の補佐を行う。そのため、蝉林は船務科の根城たるCICにはいない。

もつとも、海防艦のＣＩＣなど窮屈の一言に尽きるため、入るうにも入れないだろうが。便宜上は“ＣＩＣ”などたいそうな名で呼ばれているが、実際は通信機とレーダースコープが置かれているだけである。

あとは透明なボードがあちこちにあり、マジックを持った船務科将兵が情報を書き込んでいくくらいだ。

藍原は見た事が無かったが、日本帝國には輸送船の設計図を流用した「商船型空母」というものが存在した。主に船団護衛に投入されたが、確かにレシプロ機なら運用可能だろう。今は、全隻が除籍されたはずだが。

厄介なことに、嘗ての南中国（というより中国共産党）は米合衆国より支援を受けていた。航空機も大量に輸出されたはずだ。パイロットさえ確保できれば、容易に運用できるかもしれない。

「船務長、高雄警備ＨＱから情報です。赤色海軍の空母が台湾に向かっています」

「うん、レシプロ機でもやっかいだね」

眠そうな目をこすりながら、船務長はため息をついた。

警備戦隊群は潜水艦狩りが主任務で、防空戦闘はそれなりのものではない。

松型駆逐艦はともかく、鵠型海防艦に防空能力はない。いや、あるのだが、八八ミリ高角砲一基と誘導弾発射管一基、そして機銃ではいかにも心細い。

「『竜胆^{りんとく}』は何か言ってきたる？」

「何も」

第二一警備戦隊群の指揮を執るのは、最先任の『竜胆』艦長である。現在、『竜胆』が先陣を切り、その後ろに『山茶花^{さぎんか}』・『K12号』・『K18号』・『K45号』・『K05号』が続ぎ、最後尾に回転翼機母艦（ヘリ空母）の『瑞穂^{みずほ}』。それを『向日葵^{ひまわり}』と『白百合^{しじゆじ}』が護衛^{エスコート}している。

「浜北^{はまきた}の親爺なら、空母に特攻とか平気でやりそうだなあ……」

船務長の呟きに、藍原を含めた船務科員は顔を引き攣らせた。

浜北^{はまきた}岳志^{たけし}『K12号』艦長は、先任の水雷長曰く“お伽噺で奇計を弄する奴をそのまま煮た様な人”だった。つまりあくどいことを考えては、嬉々として実行するタイプの男である。

あの人なら、対空誘導弾を空母の艦橋にブチ込むくらいやりそうである。

しかも『竜胆』艦長も、それを咎めるどころか乗っかるのだから始末に負えない。

古参の機関長曰く、浜北少佐と『竜胆』艦長は同期で、しょっちゅうつるんでは碌でもないことをしでかしていたらしい。

特に『竜胆』艦長利井火鮫は、上司を酒の席でぶん殴って警備戦隊群に左遷されたという噂すらあった。しかも藍原達からしてみれば、その噂もあながち嘘とも思えなかった。要は、そういう風に見られてもおかしくない人間なのだ。

まあそれと比べれば、大胆不敵で茶目つきがありすぎる浜北少佐の方がまだマトモかもしれない。同情すべきは『竜胆』前任と乗務員である。

「五弓中尉殿」

航海管制員が船務長の方を向いた。天井から吊るされ、固定されたボードには近辺の海図チャートが描かれ、部隊の航路が逐一描き込まれている。

航海管制員は、そんなボードに指を当てながら言った。

「現在我が部隊は、澎湖諸島沖を航行しつつ対潜警戒を行っておりますが……」

そして彼は、指を北東に向けてなぞらせた。

「この付近より、先程『仁淀』アンノウンからの通信にあった地点ポイントです。正確には、『ごうしお』が謎の推進音を捉えた場所です」

「その通り」

五弓弓^{ごゆみゆみひろ}尋船務長は小さく頷いた。欠伸を噛み殺しているのか、目に涙が溜まっている。

「だからこそ、我々は澎湖諸島^{いく}沖にいるわけだ」

「——しかし」

口を挟んだのは、実習で『K12号』に乗り込んでいる士官候補生だった。

いや、航海管制員の態度からして、恐らく事前に口裏を合わせていたのだろう。

「未だに、本艦及び本部隊は、件の“敵潜”を捉えておりません」

候補生はわざと“敵潜”の部分を強調した。

世間では冷戦だの何だの騒がれているが、彼ら軍人からしてみれば、すでに中華人民共和国との戦争は始まっている。そこは、国民と“最前線”にいる軍人の差だった。

「滅多な事を言っではいけないよ、候補生殿」

五弓中尉が微笑し、首を振る。

「帝國国防軍は“文民統制”^{シビリアン・コントロール}の元にある。我々軍人は、拳銃に装填された弾丸にすぎないんだよ。拳銃の引き金^{トリガ}を引くか、どんな弾を装填するか、そもそも拳銃を懷に忍ばせるかどうかも国民が決めることだ。

外務省はまだ希望を捨てていない。戦争での決着は最終手段だ」

「外務省？大使館どころか公使館も置かれていない国相手に、どう交渉するのでしょうか！資本主義と共産主義は水と油です。彼の地で赤旗が翻っている限り、亜細亜に平和はありません！」

藍原は顔を顰めた。

上官に口答えること自体が問題だし、話している内容も問題である。軍人に、国家の外交方針に口出しする権利はないし、出したところで意味はない。そもそも防衛力と国家は切り離されるべきである。そうしないと、何事においても武力を持ちだす“ならず者国家”になってしまう。

軍人の本分とは戦争をすることではない。戦争を防ぐことだ。巨大な“抑止力”となることで、軍隊は祖国に奉公する。祖国に血に塗れた勝利を献上するのは最後の——本当に最後の手段なのだ。

が、この候補生の言っていることも間違いではない。

中華大陸は今や、“暗黒時代”を迎えている。

それに南中国との外交も、一向に進展しないのが実情だった。

夢思想家ではない現実主義者^{リアリスト}は、戦争でどちらかが滅びでもない限り進展はないことに気付いていた。

そして軍人は、その現実主義者の最たる例である。一回でも実戦を経験すれば、嫌でも現実主義者になるものだ。誇りや正義を述べているだけでは生き残れない事に、誰でも気付くからである。

「何より、陛下が賛成されていない」

日本帝國は、明治憲法（大日本帝國憲法）を大幅に改正していた。後に、“昭和憲法”とも呼ばれる新大日本帝國憲法である。

明治憲法との最大の違いは、天皇の統帥権の放棄と、天皇が“現人神”ではなく、帝國の“象徴”となったことだ。日本軍は、天皇の軍である“皇軍”ではなくなつた（ついでに近衛軍も予算の無駄という結論で廃止され、近衛隊（非軍事組織）が設立された）。天皇は国家元首となりつつもその権力は大幅に狭められ、内閣総理大臣が天皇に権限を委譲される形で政治を行う。

しかし、国家の基本理念や戦争に関わる大事になる場合、他にも他国と同盟を組む場合などは首相は天皇に謁見、許可を取らねばならない。

当然開戦する場合は、天皇の了承が必要となる。そのため最終的には、天皇の意思＝帝國の意思となる。これだけ聞くと、君主制が強められたようにもみえるが、実際に天皇が首相（というより政府）の指針や政策に反対する事はほとんどなく、あまりにいきすぎた場合に限られる。つまり首相が行うべき御前会談は、ほとんど形だけのものではあった。

皮肉なことに、これ程の改革が行われた原因が対ソ戦だった。ソヴィエトの工作員の侵入を防ぐため、手っ取り早い方法が“民主

化”であり、帝國では男女ともに参政権・選挙権が与えられ、男女格差もなるべく是正された（真つ先に軍が女性を採用したため、たいた混乱もなく是正は行われた。国民の大部分が、軍こそ最大の“男組織”と考えていたからである）。

つまり民主化さえすれば、わざわざ祖国を裏切ってソヴィエドにつく者も出ないわけだ。

ちなみに大韓共和国も帝國に倣い、民主化を進めていた。

無論、先制攻撃を受ければその限りではなく、現地指揮官の権限で反撃も許される。領空・領海侵犯においても同じである。実際、対馬や九州には中華人民共和国の偵察機が毎日のように侵入していた。日本帝國は特に非難をしていない。

なぜなら帝國も、全く同じ事をやりかえしていたからだ。

陛下を出されては、候補生も黙るしかない。

帝國で“不敬罪”はすでに廃止されているが、未だに禁忌^{タブー}扱いされていた。罪にはならないものの、周囲から白い目どころか殺意の目で見られること確実である。

「話を戻しますが――」

航海管制員は、強引に話題を本線に戻した。

中尉と候補生の白熱議論に平然と割り込む兵に呆れつつも（人の事は言えないが）藍原は彼の言葉に耳を傾ける。^{つわもの}

「件の潜水艦が、帝國や合衆国の最新鋭の潜水艦と同性能だと仮定したとしても……これほどの警備を完璧に潜りぬけられるとは思えません」

対潜機器は日進月歩で進化しているが、同様に潜水艦の性能も進化している。しかし、いくら艦の性能が高くとも、碌な海軍を持つていない南中国のサブマリナーが、それを扱えるとは思えない。当然、南中国が高性能の潜水艦を保有していること自体考えにくいのだが、そこは航海管制官の考える領分ではない。

「つまり、そのアンノウンは別ルートを通ったと？」

「それも考えにくいのですが——判断するのは戦隊群司令部や中尉殿です」

もつともな意見だったので、五弓は寝ボケ眼まなこ（のような瞳）で航海管制官を一瞥しただけだった。

「ですが——」

落ち着いたらしい士官候補生が言葉を引き継ぐ。

「考えにくい……とは思います。なぜなら、この航路ではないとなれば――」

ペンを取り出し、ボードに赤線を入れる。

「台湾からさらに北上するか、大周りで南シナ海にでるしか。いずれにしる帝國若しくはU N A O 諸国の領海に侵入することになります」

「なるほど」

五弓船務長が全然嬉しそうではない表情で膝を打った。

「ですが、有り得ません」

候補生の言葉に、藍原は頷いた。南シナ海は、U N A O 加盟国がひしめきあっている上に、しょっちゅう合同訓練（というなの対中華人民共和国訓練）を行っている。

フィリピン共和国海軍にいたっては、日本帝國から軽巡洋艦『五十鈴^{すず}』と夕雲型駆逐艦^{ゆぐも}を購入しており、立派な水雷戦隊を保有していた。なかなかの戦力である。

「しかし、ここで空母が出て来ました」

候補生はニヤリと笑った。

「確か我が軍の水上機母艦や特設巡洋艦（仮装巡洋艦）は、潜水艦への補給任務も帯びていたはずです」

それを聞いて、五弓は大げさに驚いた顔を見せた。

「ほおーッ成程ねえ……確かに件の空母は、元は輸送船だ。補給機能を持たせることは難しくない……でも、だからといってどうするんだい？」

「ああ。まさか、その空母を攻撃しようだなんて言わないよな？」

いい加減に心配になった藍原は、そう言って士官候補生を見た。が、彼は首を振った。勿論横にである。

「まさか。件の空母は赤色海軍旗を掲げているのでしょうか？海賊は兎も角、これを攻撃すれば――」

「外交問題じゃあ済まないな」

藍原はそう言って頷く。

「船務長」

通信員が船務長に電文を渡した。

「んあ？……ふむ……」

五弓は独りでに頷くと、通信機をとった。艦橋へと繋げる。

「通信士。『竜胆』宛てに「独眼竜」より連絡がきた。ようやく来たよ……件の空母が引き返したそうだ。空母は目算で基準排水量8000トン前後だそうだ。甲板に艦載機は出ていなかった」

「諒解」

蝉林が淡々とした口調で返す。

「『鳳翔』^{フウシャウ}クラスですね」

藍原が言った。

日本初と同時に世界初の空母（設計段階から空母だったという意味で、巡洋艦改装の空母は既に存在していた）である『鳳翔』は練習空母として運用されていたが、流石に旧式化が著しく、すでに除籍・

解体されている。

なお、『鳳翔』の名は聖鳳せいほう型核動力推進空母二番艦の名前に引き継がれるという噂もある。

ちなみに、『鳳翔』は基準排水量7,470トン、満載排水量10,500トンである。

一方、台湾西の海上を、一機の大型機が航行していた。

四発のエンジンに、円型レドーム（レーダー・ドーム）を搭載し、機体を純白に塗装している。

五六式航空管制機“出雲”いずも。

富嶽ふがくの配備により、余剰となった連山れんざんの機体を流用した航空管制機——空飛ぶ司令部である。

「機長、『竜胆』に送信しました」

ヘッドマイクを装備した通信員オペレータ凜鳴りんめい雫しずくが言うと、航空管制官から返信が来た。

「よくやった少尉。これより我ら「独眼竜」は「日の出」の報告を順次送信する……」

しかし、現在出雲の任務は“空中通信中継所”のようなものになっている。本来は、空中・地上・海上の友軍を統合的に管制し、情報を一元化させるための最新鋭機なのだが、そのような大会戦など早々起こるものではない。

そのため運用試験も兼ねて、中華大陸やカムチャツカ、セイロンなどの各地に送られ、データを採っていた。もつとも出雲は高価な機体のため、まだ六機しか完成していない。

なお「独眼竜」は出雲三番機、「日の出」は南中国空母を監視している偵察機“景雲改”^{けいうんかい}のコールサインである。

単調な任務になりそうだと凜鳴は誰にも悟られないようにため息をついた。

？ 水色に消えて縹色（後書き）

・五六式航空管制機“出雲”

連山の機体を流用した航空管制機。大量の通信機器と広範囲を探知する大型レドームを搭載し、空中で航空隊の指揮を行う機。しかし、最新装備を詰め込んだ結果、戦略爆撃機並みに高価な機体となってしまった。

?? 黎明には不幸のみ（前書き）

* 史実に登場する性能が全く同じ兵器類については紹介しません。

?? 黎明には不幸のみ

台湾に配備された航空管制機出雲コールサイン「独眼竜」が偵察結果を各基地に送信していた頃、中華連邦（東中国）に派遣されている出雲もまた多忙な任務に就いていた。

「こちら「豪雪11」……国籍不明機を視認……“黄色い星”を視認、南中国（中華人民共和国）天軍（空軍）だと思われる……機種はカーチスP-40“ウォーホーク”だ、おそらくE型だと思われる……一二機ッ」

「こちら航空管制機「厳島」^{いづくしま}。諒解、直ちにホット・アラートにて待機中の機を向かわせる」

東中国浙江省^{せいしゅうせい}の在中帝國空・海軍合同航空基地は、南中国福建省との国境線よりわずか北に寄ったところにある。さらに、帝國国防陸軍駐屯地とも接している（帝國国防陸軍は“基地”を“駐屯地”と称している）。

つまり、最前線基地である。

そのためか、そこから連日発進している早期警戒機や哨戒機より通報を受ければ、即座に邀撃隊が出撃できる体制が整っている。

そのため、近隣の基地との連携を密にするために出雲二番機「厳島」が派遣されていた。

これらの基地は本格的な大規模基地ではなく、寧ろ中規模の急造基地（野戦基地）の趣が強い。

それは敵が進行してきた場合、まず護りきれないのと、大型爆撃機（戦略爆撃機）や新鋭噴式機ジェットを配備する必要が無いからだ。

何も最前線に爆撃機用大型滑走路を整備する必要などない。後方から悠々と出撃できる。

それに、南中国天軍の航空機は数が多いが旧式機が多勢を占めていた。

米軍の給与機か、ソヴィエドの亡霊が精々である。そして米軍も、わざわざ中華大陸に新鋭機を輸出するわけが無く、戦闘機はP-40 “ウォーホーク”、爆撃機はB-26 “マローダー”かB-25 “ミッチェル”が精々である。そしてソヴィエドもジェット機など碌に開発できていない。

このような航空機が相手では、寧ろジェット機は扱いづらい。速力差がありすぎるのだ。

そのため、ここ第三野戦航空基地に展開中の第一八八航空団第一九七戦闘飛行隊と第一五一戦闘飛行隊に配備されている機体は四八式戦闘攻撃機“迅雷”じんらいか、四式戦闘機“疾風”はやて？型で、後は夜間戦闘機“黒燕”こくえん（P-61 “ブラックウィード”をフルコピーした機）が数機配備されているだけだった。

ただし、南中国は南部に大規模な工業施設を立ち上げており、これら航空機群の増産体制を確立していた。そして南中国は人口も多い。

つまり、数だけはやたらと多い。

南中国赤色天軍の機体は、“掠奪者”マローダーを除けば堅実な機体で信頼性も高い。おまけに操縦性も良く、素人でも操縦は容易い。

それにしても、南中国の狼藉には目に余る、と「厳島」統制官はため息をつきたい気分になった。

敵対しているとはいえ、他国の国境線付近に一二機もの戦闘機を繰り出してくるとは常識の範疇を越えていた。

最近は大砲による砲撃まで行われるし、帝國軍や中華連合軍（北中国・東中国合同軍）の我慢もそろそろ限界だった。^{ストレス}

しかも、連中は決まって夜間に行動を起こす。

つまり、兵や将校達は睡眠中に叩き起こされることも珍しくはなかった。軍人に碌な睡眠時間が与えられないのは激戦区ならそれほど珍しい事態ではないが、平時の国境線でこれは行き過ぎている。

無論、大抵の軍人は挑発に乗るほど精神がヤワではないが、流石に堪える。

なんとかしてくれと、鬼頭崎^{きとうさき}統制官は心中で頭を抱えたのだった。

「敵武装船、こちらに接近してきます……米国の哨戒魚雷艇^{PT}だと思われます」

電測員の報告を聞き、藍原^{あいはらすいいち}慧一は小さく頷いた。

第二一警備戦隊群に向かっていたいきたのは六隻のPTボートだった。

PTは合衆国製の魚雷艇で、基準排水量50トン、魚雷発射管を四基備え、最大速力41ノット的高速艇だった。

戦闘^{C I C}中枢では五弓^{しゆみ}船務長がレーダースコープを睨みつけ、敵を示す赤色の光点を睨みつけている。いつもは眠そうな船務長の目にも、強い眼光が宿っていた。

「ボ式（ボフォース製）40ミリ機銃射ち方用意」

「高角砲、射ち方始めッ」

「僚艦『K18号』攻撃開始しましたー」

「水柱ッ小さい！魚雷を発射した模様——」

ガクン、と艦が揺れた。回避運動を始めたのだ。

「くそっ、連中、四水戦には手を出さなかったくせに、こっちには出して来たのか」

藍原は舌打ちしてスコープを睨む。
嘗められている証拠である。いや、海防艦の武装が高が知れている事を知っていたのか。

——いや、見ればわかるか。

P Tと比べればまだ巨体だが、元々海防艦の速力は速いとは言えないし、外洋航行能力も低い。そのため澎湖諸島周辺への出撃も、それほど長居が出来るわけではない。補給隊が控えていれば話は別だが。

「『K 1 8号』、被雷ッ」

「何だと」

その報告に、藍原は思わず顔を顰めた。が、すぐに持ち直した。

「『K 1 8号』より電文ッ「敵魚雷不発、ワレ損害ナシ」」

「いい感じだ、敵の整備能力の低さが救ったな」

魚雷とは精密兵器であり、数日でも放置すれば即座に使い物にならなくなる。常にジャイロを調整するなり、信管をチェックするなり

しなくてはならない。人間に入浴が不可欠なのと同じように、魚雷には調整や整備が必須だった。しかし、常に魚雷を最良の状態を保つためには、熟練の専門技師が必要だ。

敵“海賊”が澎湖諸島の島のいずれかから出撃したとしても、そこに本格的な魚雷蔽があるとは考え難い。

中華人民共和国赤色海軍が全面協力していたとしても、赤色海軍の魚雷配備態勢は御世辞にも整っているとは言えないし、そもそも赤色海軍は沿岸・川河を航行する砲艦が主力である。数少ない外洋航行艦艇も、米国がタダ同然で給与したオマハ級軽巡洋艦かクレムソン級駆逐艦が精々で、艦自体が旧式化が著しい上に兵装も確保されていない。もつというところ、補給分がほとんどない。

しかし、無傷とはいかなかった。

「『K05号』が被雷しましたッ」

「被害は？」

「光点が点滅を繰り返しています、危険かと」

「艦橋にいる蟬林通信士せみりんに連絡せよ、黒煙は見えるか？」

「わかりました」

藍原はそう言って、通信機を取り上げた。

「艦橋」

「船務士だ。『K05号』の被害を視認できるか？」

「……確認した、黒煙が出来る、位置もジャストだ」

「諒解した」

「流石に二発目は不発とはいかなかったか」

五弓船務長が軽く肩を落とす。

「藍原船務士、『K05号』僚艦『K45号』より電文です。「右舷浸水甚ダシ、復旧ノ見込ミナシ。退艦命令ヲ発ス」以上です」

「やられたか。すぐにでも救助に向かうべきだが……敵は——」

「火柱ッ！命中しました、PT艇が沈みますッ」

「敵PT艇、接近します——」

「ボ式40ミリ機銃、射ち方始め——」

「敵、発砲ッ」

カンカンカン、と金属が叩くような音がする。
PT艇も機銃を装備しているようだ。

「機銃員が負傷しました、交代要員を——」
ガンナー

海防艦搭載のボ式40ミリ機銃はシールドも搭載されているはずだが、完全に護りきることは難しい。

「高角砲、目標四番艦に命中——」

「第五目標に切り替えます」

レーダー管制の高角砲の命中率は凄まじい。何しろ元々は、対空兵器なのが高角砲である。重爆も撃墜できる射程と命中精度・破壊力を併せ持つ。

流石に駆逐艦二隻と海防艦四隻——へり空母と護衛は後方に退避していた——と魚雷艇六隻の勝負は見えていた。
が、あつという間に敵は数を減らしたものの、『K05号』が沈没寸前となっている。

「敵撃破完了……増援、ありません」

「戦闘終了」

艦長による戦闘終了命令が艦内に放送アナウンスされるまで、さほど時間はかからなかった。

?? 黎明には不幸のみ（後書き）

・大淀型巡洋艦『大淀』・『仁淀』・『中淀』・『高瀬』・『吉野』
・『神戸』・『淀川』・『隅田』・『養老』・『龍田』・『天龍』
『那珂』

基準排水量8,200トンの巡洋艦。潜水戦隊旗艦として運用されることを前提としている。しかし、いざとなれば防空指揮も可能なように設計されている。なお、『大淀』は通信設備をさらに充実させており、国防艦隊旗艦となっている。

?? 闇夜の灯籠

高雄警備司令部^{HQ}の談話室に設置されているラジオから、雑音混じりに低音が響き渡った。

「小澤国軍相^{おさわ}（統合国軍大臣）……」？

何度か聞き覚えのある声に、藍原^{あいはら}慧^{すい}一^{いち}とサリアを始めとする士官・下士官兵達は耳を傾ける。

小澤治三郎^{おさわ ちざろう}国軍相の声に違いなかった。

『この度の、台湾民主連邦沖、澎湖諸島での海賊との遭遇戦は――』

「ねえ、慧一」

未だに『酒匂^{さか}』の帝國国防海軍将兵服を着ているサリアが、藍原^{あいはら}慧^{すい}一の袖^いを引^ひつ張^はった。

「この声の人は？」

「小澤国軍相。帝國軍事のナンバー2さ。“旧世代”の重鎮でもある」

「“旧世代”？」

「戦前——つまり国防軍設立以前から、旧帝國軍にいた軍人の事。ちなみにあの人は海軍出身。前の戦争では、提督クラスもけっこう戦死したし、残った人も引退した人が大半だから、あまりいないんだけどなあ」

「戦死……」

サリアが複雑そうに顔を歪める。

例の交戦の後、藍原達は喪失戦力の補充も兼ねて高雄に帰還していた。

国防海軍艦艇が海賊と交戦し、喪失艦、死者が出たのは話題性十分なニュースである。

すでに帝國中のメディアは、台湾民主連邦が非常事態宣言を発令。自軍の水雷戦隊を出撃させたことを明らかにしていた。

また、表敬訪問も兼ねて来日していた米合衆国艦隊と英王立艦隊も、出撃準備を整えているとの話もあった。

「藍原」

「ああ」

蝉林津具樹が藍原の肩を叩き、一枚のペーパーを見せた。

「これは？」

「第二〇五警備戦隊に新しく配属される艦のデータだ。それと、フイリピンの方に行った独立第六八戦隊が合流してくる」

「何だ、もう来るのか」

「そうらしい。随分と手回しが良いな。いや、俺がおかしいのか？」

「……で、一体どこのどいつが仲間になるんだ？」

「ああ——」

小首を傾げていた蝉林は、ペーパーを藍原に見せつけてため息をついた。

「特型戦闘艦『永祚』^{えいそ}。竣工したての、超高速海防艦だよ」

深夜。

澎湖諸島のとある島付近の海を、数隻の軍艦が航行していた。

よく見ると、それは帝國国防海軍の象徴たる旭日旗をあげている。

よく見ると、それは改松型^{かいまつがた}駆逐艦だった。四隻が、中央に浮かぶ平べったいシルエットの軍艦を護るように進んでいる。

灯火管制が敷かれた薄暗い艦橋では、数人の軍人たちが話し合ったり、混沌とした闇に目を向けたりしている。

艦橋の男達が見守る中、平べったい軍艦から何かが下された。

大型のボートだった。見る者が見れば、それは帝國国防軍自慢の大発（大発動艇）だとわかるだろう。

艦首が前扉となっており、当時としては非常に画期的な揚陸艇だった。

これは通称“大発？D型”と呼ばれる四式超大発動艇D型で、新鋭の七式中戦車（37トン）は勿論、56トンの二式重戦車をも運べるように設計されている。

そして、中央を陣取る艦は『知床^{しねたい}』。嘗ては『蒼龍^{そうりゅう}』と呼ばれていた、航空母艦改装の揚陸母艦であった――。

基準排水量15,900トンの中型空母『蒼龍』は、空母黎明期に建艦された、ある意味では完成途中の軍艦だった。しかし、この艦の設計で日本空母のモデルが完成したといっても過言ではなく、世界で初めて（実験的な意味で）アングルド・デッキ（斜め飛行甲板）を設置したフネでもあった。

しかし、戦争で姉妹艦『飛龍^{ひりゅう}』を失い、しかも中型空母である故に、

主力の顔を大鳳型以降の大型空母に譲った。もつともそれが、『蒼龍』が生き残った理由といっても過言ではない。戦争末期の『蒼龍』は、もっぱら航空機輸送や対潜警戒に従事していた。

戦後、この『蒼龍』は次世代艦建造に向けてのテストベットに選ばれた。そして、国防海軍が目を付けたのが“揚陸母艦”という新しい艦であった。具体的に言うと、戦後誕生した“陸戦師団”の母艦となることが決定したのである。

空母の積載能力は素晴らしい。何しろ多数の航空機とそれらの兵装・交換部品だけではなく、空母自体の兵装や燃料なども搭載している。並の輸送艦を凌ぐ積載能力である。

実は戦時中、日本帝國軍はガダルカナル攻略時に、輸送船舶不足を理由に空母『赤城』^{あかぎ}を輸送任務に駆り出した事がある。実はこれが案外と図に当たった。もつとも『赤城』は図体ばかりがでかく、スピードも出ない旧式艦だったので輸送任務に投入されたのだが。

現在、国防海軍配属の陸戦師団は北海道・東北・関東・中部・関西・中国四国・九州の七つの地方毎に一個師団^{しご}ずつ編制・配備されている。

そして陸戦師団の主任務は、敵に占領された帝國領奪還のための敵前上陸である。つまり島嶼上陸も主任務であり、島嶼上陸のためには当然母艦が必要となる。

それは唯の輸送船では務まらず、積載能力を誇りながらも、通信設備が充実しており、司令部移動のためにも回転翼機や小型機が運用できなければならない。

つまるところ、空母状の艦艇が最も好ましい。

無論、専用の揚陸艦の建造も行われているが、さすがに最低でも1

0,000トン以上の母艦の建造には、コストも時間もかかる。ならば、使い所が難しくなった中型空母を改装するのがもっとも手取り早い。

それが、国防海軍が揚陸師団司令部との協議の末に、下した結論だった。

改装され、新たに『知床』と命名されたこのフネは、輸送用回転翼機や小型連絡機、そして戦闘爆撃機を数機搭載した多目的艦として生まれ変わった。勿論、空母としての対潜哨戒や航空支援なども可能となっている。

そしてこの『知床』は、東北の第二陸戦師団配属となり、第二揚陸艦隊旗艦にもなった。

また、第二揚陸艦隊は『知床』と揚陸艦艇六隻、巡洋艦一隻、改松型駆逐艦一個戦隊（六隻）で編制されている。

が、今この場を航行しているのは『知床』そして護衛の駆逐艦四隻だけだった。

とある小島の砂場に到着した大発、そして航続した小型の揚陸艇から人員、そして戦車が飛び出してきた。人数はそれほど多くなく、精々十人前後。戦車も二輦だけだった。

七式中戦車は、太平洋戦後に配備された傑作中戦車で、88ミリ45口径砲を搭載し、傾斜付き前面装甲も備えている。それでいて自重は37トンまで抑え込まれており、速力も文句はない。

現在、陸戦師団及び帝國国防陸軍の主力戦車である。

将兵は、これまた国防陸軍でも採用している五一式自動小銃を構え、

周囲を警戒しながら辺りを見渡している。
その中に混じっている異様な雰囲気の長身の男が後ろに控える部下を見た。

「中尉、ここに臨時観測施設を設置する。準備に取り掛かってくれたまえ」

彼は戦闘服を着込んでおらず、陸戦師団所属であることを意味する青色の鉄帽ヘルメットも被っていない。そしてあるうことが、彼は背広を着込んでいた。どう見ても、正規の軍人には見えない。
しかし、それが彼の狙いでもあった。

その後、再び大発が砂浜に到着した。
今度は、どう見ても軍人には見えない、ブルーのラインが入った白を基調とした服を着込んだ男女が、倒れた前扉から出て来た。その数は一五人程。

彼らの制服には、右胸に“海洋観測部”と書かれている。

どうやら背広の男は、この異様な制服組のリーダーらしい。

そんな彼らを眺めながら、先程背広の男に命令を受けた中尉に、後方に控える部下が話しかけた。

「中尉殿、本当なんですか？……彼らが、“統情”（統合国軍省情報局）に属する特殊部隊って」

「そう聞いているぞ軍曹……連中は“五課”だ」

「五課？」

「ああ、海洋観測部第五課、通称“海洋五課”だ。海洋観測部は文字通り、観測艦とかのデータを集めて海水の温度や波を観測、さらに海底地形の調査をする部だそうだが、五課は生粋の戦闘部隊……

“海賊狩り”のエキスパート集団らしい。

注意しろよ軍曹……ああいう人種^{やっくら}は、同胞を同胞だと思っちゃいねエ。とくに“統情”の特殊部隊なんぞ、戦場をゲームに喩える奴ら^{ひし}で犇^{ひし}めいてやる」

三剣陣朗中尉^{みつるぎじんろう}はそう言って、背広の男に嫌悪感丸出しの視線を向けた。

?? 闇夜の灯籠（後書き）

・四式超大発動艇D型

帝國国防陸軍が開発した揚陸艇。戦時中に活躍した大発を拡大したもので、新型戦車や自走砲なども輸送できるようになっている。

・知床型揚陸母艦『知床』

基準排水量21,000トン（改装後）の揚陸母艦で、元航空母艦『蒼龍』。第二陸戦師団の移動司令部と母艦を兼ねる。また、戦闘爆撃機も搭載しており航空母艦としても活躍できる。

・七式中戦車

太平洋戦争後の帝國国防陸軍主力戦車。88ミリ45口径砲を搭載し、敵弾を防ぐために傾斜付きの前面装甲を備える。攻撃力と防御力、そして量産性が高次元でバランスがとれた世界最強クラスの戦車で、自重37トン。

?? 狂い無き道

後に、“澎湖沖事件”と命名された小規模戦闘から一週間と経たぬうちに、帝國国防海軍は第二防衛艦隊第三航空戦隊群の大幅な改編を実施した。

具体的に言くと、第七、第八、第九航空戦隊を一時解体し、配属されていた海隼型中型空母6隻、そして三航群（第三航空戦隊群）旗艦の旧式航空巡洋艦『最上』^{もがみ}を一斉に予備役に編入したのである。同時に、『最上』一隻で編制されていた第一〇航空戦隊も自然消滅した。

その代わり、三航群に新たに配属されると同時に、新しく旗艦となったのが竣工したての航空母艦『煌鳳』^{くわうほう}である。

『煌鳳』は基準排水量20,000トンの中型（小型？）空母として誕生したが、カタパルトやアングルド・デッキを備え、ジェット機の運用が前提となっている。

実は帝國国防海軍は、7万トンや8万トン以上の大型空母の保有や運用が、いかに国庫の負担となるかを熟知していた。

そこで帝國国防海軍は、戦後第二世代の空母は大型ではなく、中型空母を多数揃えようという結論に至った。

また、『聖鳳』^{せいほう}とすでに就役した二番艦『鳳翔』^{ほうしょう}で、核動力推進空母のノウハウも得たが、しかし核動力艦は建造・維持・整備などに多大なコストがかかることも判明した。

帝國の予算では、最大二隻から三隻の保有がやっとだと思われた。

そこで国防海軍は、空母戦力の再編に着手した。結果、海隼型が全隻予備役編入となり、第七航空戦隊は『煌鳳』を配備されて再編制されたのである。

そのため帝國が保有する空母は、竣工したての『鳳翔』と『煌鳳』を入れて一四隻。内一隻が対潜警戒用の軽空母となった。その軽空母『龍鳳』^{りゅうほう}は、旧式艦だが回転翼機を搭載したヘリ空母として現役だった。

端的に言って、大戦力と言える。

現時点では、帝國国防海軍は世界最高といってもよい戦力を手にしていた。そのため、余裕もできていたのである。では、その“余裕”とは何か——つまり、同盟国の支援だった。

戦後創設されたU N A O即ちアジアオセアニア連合の加盟国は、大抵が元は欧米列強の植民地であり、当然ながら国軍などない。

そのため、これらの国軍は、他国から兵器を輸入するか、提供してもらうほかなかった。

つまり、日本帝國に頼る他なかったのである。

そして、自国軍の編制にもっとも意欲的だった国が台湾民主連邦だった。

独立直後から、台湾は中華人民共和国という紅い国の悪夢に怯えねばならなかった。

台湾は島国であり、敵が攻めてくるとすれば海か空かの何れかである。海防に心血を注いだのは、ある意味では必然だった。

手始めに台湾は、日本帝國に軍艦を要求した。さらにそれを運用できるよう指導できるだけの人材、教育のための人材、そして軍艦建造のためのノウハウである。

基隆港^{キールン}に海軍司令部が設けられ、教育施設も併設された。

同時に、帝國国防海軍から旧式駆逐艦を始めとした艦艇が与えられた。

しかし、訓練では使えても実戦では旧式駆逐艦は戦力不足である。そこで台湾海軍は、帝國国防海軍にさらなる援助を要請した。

そして、帝國から新たに提供されたのは旧式の巡洋艦^{ゆうようかん}『神通』と、夕雲型駆逐艦であつた。

台湾海軍が保有することになったのは、『西寧』^{さいねい}と名を変えた『神通』を旗艦とし、夕雲型駆逐艦四隻を保有する一個水雷戦隊と、海防艦を中心に編成された四個警備戦隊、そして三個潜水戦隊、二個飛行艇隊、そして、一個航空戦隊である。

この台湾唯一の航空戦隊は“第188航空戦隊”と命名され、小型空母一隻を持つ部隊となっていた。

その小型空母の名は『台北』^{たいはい}。嘗ては『龍翔』^{りゅうせう}、その前は『日進』^{にっしん}と呼ばれていた、水上機母艦改装の小型空母だった。

基準排水量は12,000トン。空母改装と共に大規模な近代化工事を実施した結果である。対潜掃討に精を出し、戦後は帝國国防海軍から台湾海軍に鞍替えした空母が、この『台北』——首都の名を冠した軍艦だった。

「ああ……この辺りで、間違いないか？」

「ええ、間違いありません。日本帝國海軍……失敬、日本帝國国防海軍と、海賊勢力が戦闘を行った海域です」

『台北』の艦橋でヘッドセットを付けた軍人、ソン・ツイピイ戦隊司令が先任幕僚に問いかけた。

帝國国防海軍の弟子とも言える台湾海軍は、そのシステムや組織運営のやり方は帝國国防海軍をそのまま模倣しているケースが多い。そのため彼も、国防海軍戦隊司令と同じように——ヘッドセットを付け、『台北』の艦橋に陣取っていた。

『台北』は元々『龍翔』、ひいては水上機母艦『日進』であり、運用目的が二転三転したフネでもある。実は『日進』は“甲標的（特殊潜航艇）母艦”としての役割も与えられた事もあり、その後空母へと改装されたのだ。

幸いというべきか、『日進』の空母改装が決定した頃には、すでに日本空母のスタイルは完成形を迎えており、CICや通信システムなども設置・強化された。さらに同じく順調に洗練されていた消火システムを始めとする損害抑制設備も多数設けられた。

そして当然のように、防空能力も強化されている。

当然艦橋も近代化され、『台北』の艦橋は本格的空母のそれと大差なかった。無論、それは設備の話であり、大型空母の艦橋と比べるには狭苦しいことこの上ないのも確かなのだが。

それが、大柄なソン少将の不満でもあったが、実際の運用面においては、彼は大いに満足していた。

帝國は母艦自体は小型の改装空母を寄越したが、機体は大判振る舞いだった。

流石にジェット機は無理だったが、艦戦（艦上戦闘機）はターボ・プロップの艦上戦闘機“陣風”^{じんふう}。艦攻（艦上攻撃機）もターボ・プロップ機“流星改”^{りゅうせいかい}。そして哨戒機は天山改^{てんざんかい}だ。

搭載機数は二七機。『台北』は、うち天山改を九機搭載し、陣風を一二機、流星改を六機搭載している。見るからに艦戦重視の編制だが、攻撃命令が発令されていない以上はコレで十分である。

南中国赤色艦隊に碌な艦艇は無いし、地上目標は空軍の双発爆撃機で十分こなせる（台湾は日本帝國より、一〇〇式中爆撃機“呑龍”^{どんりゅう}及び“飛龍”^{ひりゅう}などを購入していた）。

詰まる所、『台北』の任務は敵地攻撃ではなく、対潜掃討及び敵機迎撃であつた。

また、『台北』を護衛するのは、同じく日本帝國から購入した秋月^{あきづき}型防空駆逐艦である。

その数は四隻。言うまでも無く、これらにもすでに台湾名が与えられている。さらに対潜警戒を厳にするため、台湾が腐心して建造に成功した800トンクラスの海防艦^{コルベット}が四隻加わっている。

計九隻。なかなかにして、大きな戦力だ。

なお、陣風を始めとする航空機は、日本語でそのまま「ジンプー」などと日本名で呼ばれていた。

この時の台湾は日本帝國から独立したばかりであり、知識人（軍上層部）の大半が日本語を理解していた。下士官や兵も同様である。

また、ソン戦隊司令を含む多数の軍人が、日本への留学経験を持ち、日本の高校や大学出身者も少なからずいた。さらに、戦時では“帝國軍人”として、日本兵と共に戦った者も多い。何しろ台湾は旧帝國領である。

現に日本に帰化し、帝國国防軍に在籍している台湾人も珍しくなかった。

日本帝國には兵役の義務が存在し、それは帝國統治下の南洋諸島やカムチャツカにも当然当てはまる。そのため、帝國軍には南洋諸島やカムチャツカ出身の軍人も少なからずいた。

それに、日本から送られた多数の兵器に、全て台湾名を名付けるのも面倒な上に、そもそも同盟関係にある帝國と台湾は、共闘することが前提である。イチイチ呼び名が違つては、いらぬ混乱を引き起こしかねない。

これは、フィリピンなどの他U N A O諸国も同じである。

「同胞たる日本人が血を流しといて、我々が何もしないというわけにもいくまい。澎湖諸島は我が台湾領なのだから」

「しかし……良いのでしょうか」

苦笑しながら双眼鏡を目に当てる指揮官を見ながら、細身の先任幕僚がか細い声で呟いた。

「南中国を刺激する行為です」

「仕方があるまい。政府が国民から尻を叩かれておるのだ」

事実だった。

事件が報道されるや、台湾国民の世論は沸騰したのだ。

海賊、そして裏で手を引いていると思われる南中国への報復を求める声は大きい。何しろ海賊が、曲がりなりにも自国領に我が物顔で居座り、同盟国の軍艦に攻撃を企てたのだ。

コレで動かなければ、台湾は日本帝國を楯にするだけの衛星国になつてしまう。結局は日本の庇護下にあるということで、これでは独立した意味がまるでない。

元々台湾全土が独立派一色だったというわけではないが、独立した以上、自国領の治安維持は国家の義務であり、それが出来ない国家は国家としては無価値である。

その前では、国軍は設立したてで編制中というのは言い訳にもならない。

現在台湾は、民主国家としての態勢を整えている。国民の声は無視できない。

「さて、一仕事だ。我々が唯の臆病者でも、金喰い虫でもないことを、世論や世界に見せつけてやろうじゃないか」

ソン少将はそう言って、手をパンと叩いた。

?? 狂い無き道（後書き）

・台北型航空母艦『台北』たいぺい

基準排水量12,000トンの小型空母で、台湾海軍唯一の航空母艦。搭載機数二七機。元は水上機母艦『日進』にっしん 改装の空母『龍翔』りゅうしょうで、戦後台湾海軍に提供された。

?? 朽ちて折れて落ちる

中華大陸に派遣されている日本帝國国防空軍の保有機は、隊によって様々だったが、戦闘機が攻撃機が中心だった。

何しろ中華大陸のすぐ横には、日本列島がある。戦略爆撃機などの爆撃機や、輸送機でも往復できる。南中国（中華人民共和国）は日本まで狙える爆撃機は保有していない。言わば“安全地帯”であり、しかも本国日本の爆撃機基地（九州や北海道）は設備も整っており、仮に消耗したとしても、何しろ生産工場も本国（正確には北海道）にあるのだから、すぐに新たな機体が爆撃航空軍団に供給される。^{ホマー・コマンドー}しかも撃墜されても、北中国（中華民国）や東中国（中華連邦）、大韓共和国や日本帝國の勢力範囲に機体を不時着させるか緊急脱出^{ベイルアウト}すれば問題無い。

加えて南中国軍は数こそ膨大だが、機械化されている部隊（自動車師団）、戦車部隊（機甲化師団）の数はごく僅かで、大抵が歩兵師団だった。

ならば戦略爆撃機に頼らずとも、攻撃機や戦闘爆撃機で十分である。加えて大規模な地上戦に戦略爆撃機を投入することは、友軍の誤爆の可能性も高くなる。

しかも日本帝國はUNAO軍と共同で作戦を行うのだから、誤爆の可能性はさらに大きくなる。

それは兎も角として、話を中華大陸の航空兵力に戻そう。

実是在中華帝國国防空軍や国防海軍航空団以外にも、中華大陸に航空兵力を進出されている組織があった。

それは運輸省に属する准軍組織、海上治安維持機構^{SPO}の巡視航空団だった――。

戦後、旧帝國海軍の海上護衛総隊を改編した組織、アメリカ合衆国でいう“沿岸警備隊”^{コーストガード}に相当するSPOは、戦力とすれば微少ながら、規模は巨大と言っても過言ではなかった。何しろ日本列島だけにとどまらず、南洋諸島やカムチャツカ方面にも進出しており、警備任務を続けていた。

SPOの巡視船は、武装船対策用の機銃や高角砲・短魚雷発射管程度しか装備されていないが、最新の大型船は回転翼機を搭載しており、それなりの装備であることが分かる。

それだけでなく、SPOには航空兵力もあつた。

但し、ここで言う“航空兵力”とは、戦闘機でも爆撃航空軍団でもない。哨戒や救助用のための“航空兵力”だった。

そしてその代表格が、旧帝國海軍から引き渡された形で使用している哨戒機、即ち二式大艇（二式大型飛行艇）や三式対潜哨戒機“東^{かい}海”だった。

そのSPO巡視航空団が、中華大陸に派遣されたのには勿論理由がある。

それは、日本帝國の安全保障上欠かせない友好国、大韓共和国だった。

実は日本帝國は、大韓共和国、もっと言うと朝鮮半島内に軍を駐留させていない。

大韓共和国はUNAOに加盟しているが、実は国内に多数の反日勢

力を抱えていた。彼らは現政府の親日路線及び親亜細亜（親UNA O）路線に不満を抱いており、尚且つ共産政権の確立を目指していた。

その勢力は主に半島北部で有力であり、政府は対応に腐心していた。

そのため大韓共和国政府は、日本帝國軍の駐留を拒否した。そのため現在の半島の防衛は、大韓共和国の共和国警備軍（国軍）が一手に引き受けている。無論独立前に半島に展開していた帝國軍は、教導部隊を除いて全て内地（日本本国）に戻るか、解体・統合されるか、他方面に配置替えとなっている。

ちなみに帝國政府があっさりOKしたのは、外国に軍を派遣するのにそれ相応の負担がかかるのと、国民がナンセンスと考えているからだ。

大勢の日本国民が、半島で日本人の血が流れるのはナンセンスと考えていた。ましてや現地の政府が断った以上、わざわざ無視してまで軍を駐留させる意味はないだろう、と。

それだけなら問題なかったのだが、何と大韓共和国政府は帝國外務省に、「在中華帝國軍ノ存在ガ、国内ノ反日感情ヲ刺激シテオリ、当共和国政府ハ帝國軍ノ撤退ヲ求メル」と打診してきたのだ。

慌てたのが、北中国と東中国である。もし日本帝國軍が大陸から撤退すれば、南中国がこれ幸いと軍事行動を起こすのは目に見えていた。

しかし韓国政府は、外国とはいえ国境付近に日本帝國軍が駐留しているのは問題だと言ってきたのだ。

確かに大陸には、日本帝國軍が前線・後方兵站部問わず駐留していた。共和国との国境線付近にも（輸送用の鉄道部隊なのだが）駐屯しているのは事実である。

当の帝國政府も、大陸に派遣している兵力の膨大さ（陸軍兵力だけで7個師団以上）を考えると即答できない。撤退しようにも、おい

それとできないのである。

しかも大韓共和国政府は、「今後八日本帝國籍軍用艦艇及び航空機ノ大韓共和国領海・領空付近、大連、旅順付近の通行ハ自重ヲ望ム」と要請した。“要請”とはいっても、もはや“通行禁止”である。自国は兎も角、大連や旅順は他国の領土である。他国の領海内・領空内を通行禁止にするという前代未聞の要請に、日本帝國政府は頭を抱えた。

こんなことがまかり通つては、UNA Oはその存在意義を失う。

当然、中韓関係（二つの中国との、という意味）は悪化し、他UNA O諸国も大韓共和国に批判的だった。

何しろ大連や旅順は重要拠点であり、商港だ。絶えず日本帝國や他UNA O諸国の貿易船が行き交っている。

行き交う船舶は、南中国の潜水艦からすれば、極上の獲物である。そこを警備している帝國の軍艦や哨戒機が入れなくなれば、哨戒網に大きな穴が開いてしまう。

元々北中国も東中国も陸軍兵力・空軍兵力増強にしのぎを削っており、海軍整備は二の次三の次だった。というより、日本に任せつきりだったともいえる。今更中華連合に、海上警備の役を譲ることなどできない。

しかも大韓共和国海上警備軍（海軍）も碌な戦力はなく、国内のクーデター防止に躍起になっていた。哨戒任務に駆り出すこともできない。

そこで、日本帝國は一計を案じた。

海上警備の役を、准軍事組織のS P Oに譲ったのである。

「海上治安維持機構ハ、海ノ安全確保ノタメノ警察組織デアル」と帝國運輸省高官は、大韓共和国の大使に話した。

確かに大韓共和国政府の要請は、軍用艦艇・航空機の通行自重であ

り、軍艦や軍用機ではないSPO巡視艇・巡視機は特に問題が無い。実際問題、SPOの装備は貧弱で、正規軍相手に立ち向かえるレヴェルではない。それは、国軍としては貧弱な大韓共和国警備軍相手でも変わらない。元々、戦闘を目的とした組織ではないのだ。少なくとも、巡洋艦や戦艦が半島の鼻先を通過するよりは、反日感情を刺激すまい。

そんなわけで、半島付近や大連付近の哨戒には、大陸に進出したSPO、その名も“大陸地方隊”が担当していた。この日も大連の水上機基地から飛び立ったのは、今でも“傑作飛行艇”の名を欲しい儘にする川西かわにし（川西航空機）の誇る二式大艇である。

現在は、九式大型飛行艇“碧洋”へきようの配備が進められているため、国防海軍の誇る二式大艇は輸送機ヴァージョンである“晴空”せいこうを除く生産機の半分以上が、SPOに配置換えしていた。

今では純白に塗られ、ブルーの文字で「See - Peace - keeping Organization」、そしてその下にさらに大きく「Japan Coast Guard（日本沿岸警備隊）」と書かれ、軍用機ではないことを宣言していた。

さらに、嘗ては“空飛ぶヤマアラシ”フライング・ヘッジホッグと呼ばれるほどの重武装だったが、機銃はほとんどが外され、今はレーダーやソノブイ、救助装備、通信機などが搭載されている。

この機は、軍用の二式大艇と区別するため、P - 01“ディンクルスター輝星”という名前で呼ばれていた。

しかしこの日、少々旧式だが優秀なマシンは、己の武装を外した天罰を甘受しようとしていた――。

「管制塔……こちら「グラス・ホッパー キリギリス03」、現在地点哨戒空域Y12
コントロール
3……これより哨戒任務に入る」

SPO大陸地方隊巡視航空団の“ティンクルスター 輝星”機長の声を聞きながら、一人の青年が通信機を弄っていた。
彼はブルーグレーのSPOの制服に身を包んでいたが、顔は白人の様相が色濃く残っている。

それもそのはずで、彼は対ソ戦後に日本帝國領となった、カムチャツカに住んでいた元ロシア人である。

正確にはシベリア生まれの両親を持ち、戦後日本帝國に亡命。新たに日本国籍を習得してカムチャツカに住んでいたが、SPOに入隊し、その後九州へ移り、現在は大陸地方隊に異動となったために中華大陸に住んでいる。

「ア通信士、通信感度はどうか」

「万全です、機長」

彼の名はアルセーニエフというが、長いので役職と組み合わせ、
“ア通信士”と機内では言われる。

その彼の隣では、救命士が装備点検を行っていた。この機には、非

常時に備えて二人の救命士が常に乗り込んでいる。
嘗て乗り込んでいた機銃員の代わりと言ってもよかった。

三等海尉（少尉相当）セルギ・アルセーニエフは、今回の異動がひどく不満だった。

何しろいつ戦闘海域に指定されるかわからぬところに、碌に機銃も装備していない飛行艇が飛びまわっているのだ。

いつ、南中国が攻めてくるかわかったものではない。もっとも、「グラス・ホッパー」キリギリス03」の担当哨戒空域は東中国領内の海上だ。だが、前線に近いという点では変わらない。

しかし、当の彼は特に焦っていなかった。戦闘が起こりかけている区域は、何もここだけではない。国境線など、どこも似たようなものだ。

彼は、以前は東海（SPOでは“ブルースター青星”と呼ばれていた）に乗り込んでいた。それが、大型飛行艇に乗り込めるようになったのだ。未だ年若い彼が、飛行艇の通信士と言う大役につけたことを考えると、寧ろ感謝すべきかもしれない。

飛行艇に乗り組むことは、巡視航空団機構員にとっては回転翼機と同等かそれ以上に憧れであった。

空の上にいられる分だけ、マシかと判断するべきかもしれない。

彼はそう思うと、常に頭の中で沸いている、嫌な予感を払うように首を振った。

?? 朽ちて折れて落ちる（後書き）

・P-01 “ディンクルスター輝星”

SPOが保有する二式大艇。武装はほとんど外し、レーダーや通信能力・哨戒能力を強化し、救助用の装備も完備している。

?? 湿気たマッチの火はついた

P-01 “ディンクルスター輝星” 通信士セルギ・アルセーニエフは、自身の思考回路が停止するのを自覚するという——矛盾した感覚を味わっていた。

切っ掛けは、独航している商船を発見したことだ。

中華民国商会の信号を発信していたが、この時間帯に、同航路を使用している（通行予定の）グラス・ホッ中華民国船を、コールサイン「キリギリス03」号機長は知らなかった。

そのため機長はわざわざ機体を下げ、件の貨物船を偵察しようとした。ディンクルスター“輝星”はゆつくりと、鯨の様な巨体を旋回させながら、貨物船の上空を再通過するように進路を取った。

その時、窓から船を眺めていた救命士が、驚いたように息を飲んだ。ヘッドセットを付けながらも、なぜかそれがわかったアルセーニエフは、救命士の方に視線を移そうとして——倒れた。

「え」

轟音と共に、機体が大きく揺れた。

パイロット操縦士も兼ねる機長は、パイロット操縦ミスを起こすようなヘマはしない。副コ操縦士も同様だ。

冷たい飛行艇内の床に身を預けていたアルセーニエフは、ようやく、それが異常事態だと悟った。長い髪が、風に揺れた。

「アル！」

渾名で呼ばれ、彼の意識はようやく動き出した。視界が空を捉える。

——空が見える？

彼は気付いた。

飛行艇の機首が、丸々消滅していたのだ。

その直後、彼は首を掴まれ、外に放り投げられていた。

彼が敵に邀撃されることが前提の帝國国防海軍哨戒航空団の人間だったなら、すぐにわかっただろう。飛行艇は頑丈だ。航空機搭載の大口径砲は勿論、高射砲が直撃したとしても“機首が吹き飛ぶようなこと”にはそうそうならない。これは、爆撃機迎撃用の対空噴進^{ロケット}弾の直撃を受けたのだと——。

運輸省の外局であるSPO司令部は、全くの対策なしに貴重な飛行艇や巡視艦艇を極東の火薬庫たる中華大陸に派遣したわけではない。無論“准軍事組織”を名乗っている以上、ものものしい装備を搭載するわけにもいかないし、帝國国防軍を頼ればわざわざSPOが派遣される意味が無くなる。

SPOが海上護衛総隊の成れの果てであることはすでに述べた。

つまり、SPO上層部のほとんどが、旧海軍の軍人だった。そして彼らは“民間人”となっても、中華大陸が“安全”と判断するほど平和ボケしていなかった。

対策はされていた。

例えば飛行艇を含む巡視機の場合、武装のほとんどを外すことで、誘爆を防ごうとした。さらに、国防空軍の新鋭爆撃機でも採用していないような、まさに最新鋭の自動消火装置なども搭載されていたし、全乗務員には落下傘の着用を義務付けた。

「グラス・ホッパー キリギリス03」号も例外ではなかった。が、この機はどこまでもツキがなかった。

機首に直撃弾を浴び、操縦士や航法士を失えば、機体の制御は不可能だし、そもそもバランスが制御できなくなり、落ちるしかない。動かす人間が吹き飛ばせば、鋼鉄の怪鳥はイカロスの如く落ちるしかない。

無人機の無いこの時代の航空機の致命的欠陥を、「グラス・ホッパー キリギリス03」号はものの見事に体现したのだ。

「ティンクルスター 輝星」すなわち二式大艇は、強靱な防御装甲を誇っていたが、流石に噴進弾の直撃は荷が重かった。

結局この時、機長を始めとする五名の乗務員が失われている。助かったのは、同機通信士三等海尉セルギ・アルセーニエフと同機救命士一等海尉九頭川白部くすかわ しらべの二人のみであった。

もつともこの二人の生存が確認され、SPOに復帰するまでには、もつと後の話ではあるが――。

中華人民共和国天軍の爆撃機の大編隊が中華連邦との国境線上空を越えたのは、SPO巡視水上機基地の管制塔が大騒ぎとなっている、まさににその瞬間であった。

最前線の一つである浙江省第三野戦航空基地の管制塔の管制官は、即座にリーダーの反応が誤作動かもしれないという誘惑を放棄した。

『中華人民共和国赤色天軍爆撃機、多数接近！機種はB-25“ミツチエル”、機数は40、いや50機以上！戦闘機の護衛を伴う！これは演習にあらず！』

この報告は航空管制機出雲コールサイン「敵島」を通じて、近隣の基地全てと南京の一中華大陸帝國国防軍総司令部《GHQC》に知らされ、そのまま東京や南京、北京が知る所となった。

さらに偵察機が、国境に向け進軍する中華人民共和国赤色陸軍（紅軍）の軍団を発見。

「敵島」統制官はこの報告を受けるや否や、これは北中国との本格的な戦争の開幕だと判断した。

「近隣野戦航空基地「朱雀」、「青龍」、「白虎」、「玄武」に通達、「直ちに遊撃用意せよ」……それと後方の航空基地「麒麟」に、攻撃隊の発進を要請しろ」

統制官鬼頭崎温海はテキパキと通信員に指示を飛ばした。

五六式航空管制機“出雲”は、いざ前線の基地が破壊、或いは占領された時に備えての臨時司令部も兼ねている。そのため最悪のケースは、鬼頭崎中佐が現場の総指揮を執る可能性もあった。だから、航空管制機統制官は航空は勿論のこと、陸戦に関する知識も必要であ

る。

つまり、国防空軍中佐の中でも最優秀の者——それこそ大佐でもおかしくない人物——が選ばれる。鬼頭崎もその一人だった。

「朱雀」から「玄武」までは、それぞれ国境付近にある国防空軍・海軍航空隊合同野戦基地のコードネーム、「麒麟」は上海にある大規模航空基地のコードネームだ。

なお、第三野戦航空基地のコードネームは「白虎」である。

「こちら「千早^{ちはや}01」、敵爆撃隊発見、突撃する！」

「統制官、千早隊が戦闘を開始しました」

「続いて彦根隊^{つくな}、姫路隊^{ひめじ}、戦闘開始です」

誘導弾搭載の四式戦闘機“疾風^{はやし}”？型や四九式戦闘攻撃機“迅雷^{じんらい}”が、熊蜂のようにB-25爆撃機の群れに襲いかかった。爆撃機には、カーチスP-40“ウォーホーク”やP-36“ホーク”、さらにはベルP-39“エアラコブラ”の護衛がついていた。

「バカーチス共か……P-36の航続距離は短いはずだ。P-40も初期型だから、大した脅威にはならないだろう……残るカツオブシ（P-39）は、確か被弾に弱かったはずだし……太平洋でノーアメリカン（P-51“マスタング”）や“B王”（B-36戦略爆撃機）を相手取っていた熟練者が鍛えたウチの航空隊には脅威となるまい……」

鬼頭崎は戦況盤を眺めながら、小さく呟いた。確かに其々の遊撃飛行隊は、太平洋戦争や対ソ戦を生き抜いた者が指揮官となっているか、或いは教育を担当していた。

熟練者の大半は、今は新鋭のジェット機への転換訓練を終え、新米ルキにその腕を見せつけているはずだ。

だが、今の大战時と変わらぬまま疾風や五式戦闘機などを乗っている者もいた。

今のところ帝国国防空軍は、ジェット機の導入やパイロットの確保を優先的に行いつつ、既存のレシプロ機やターボ・プロップ機の生産も続けていた。

それはUNA○諸国においては、未だに四式戦どころか一式戦闘機“隼”はやぶさは主力戦闘機として需要があり、帝国でも練習機としては勿論、第一線でも需要があったからだ。

ジェット機相手には荷が重い四式戦や一式戦も、相手が同じレシプロ機なら、まだまだタメを張れる機体である。しかもジェット機と比べて、舗装が万全ではない野戦飛行場でも活躍できるし整備も容易だ。

さらにプロペラ機ではあるが、四式戦？型は戦後に配備が開始された新鋭機だ。二重反転プロペラを採用し、発動機もターボ・プロップエンジンを搭載している。

さらに一式戦は、？型は防弾性能に重きが置かれて航続距離が下がっているが、初期型（？型）や？型、？型は長大な航続距離を誇り、哨戒機としても需要があった。

無論、専門の偵察機や早期警戒機と違い、単座の軽戦闘機に過ぎない一式戦は、仮に機銃を外したとしても最新の電探などの電子機器や通信機を乗せるのは無理がある。それでも、中華人民共和国紅軍

の動向を探るのには十分であった。

「統制官、誘導弾群が命中……敵爆撃機、次々と撃墜されていきます。誘導弾発射後、機銃戦へと移行します」

オペレータの声に顔を上げ、鬼頭崎はレーダー・スコープを見た。

「敵爆撃機残存機、「白虎」航空基地上空へ到達……基地防空隊、誘導弾発射、高射砲砲撃開始……」

「ほう」

赤色天軍は、友軍の損害に浮足立つことなく爆撃を開始する腹らしい。

思ったより度胸があるようだ、と思った鬼頭崎はメモに「敵赤色天軍ノ士気ハ存外ニ高シ」と走り書きで書き込んだ。

?? 湿気たマッチの火はついた（後書き）

・煌鳳型航空母艦『煌鳳』こうほう

基準排水量20,000トンの中型空母で、戦後第二世代に属する最新鋭空母。コストの削減と運用性の向上を図るため、コンパクトにまとまっているがジェット機の運用が前提となっており、戦前・戦時中就役の中型空母より遥かに高性能である。アングルド・デッキ及びカタパルトを装備している。現在のところ四隻建造予定で、二番艦が現時点（17話）で起工済み。

* 予定艦名（二番艦以降）……『祚鳳』そほう・『祭鳳』さいほう・『瑞鳳』ずいほう

?? 先の岬の青色シゲナル

艦内放送で中華大陸で空戦が発生したことは、台湾の高雄港にて出師準備をしていた巡洋戦艦『駿河』の全乗務員の知る所となった。

「再び、コイツの40センチ砲の出番がやってきたってわけか」

『駿河』の主砲射撃指揮所を見学していた副長が、がニヤリと笑いながら砲術長の肩を叩いた。

「これから忙しくなるぞ」

事実、その通りとなった。

『駿河』を含む第一艦隊（台湾派遣艦隊）は、沖縄に展開していた第八艦隊とほぼ同時に出撃命令を受けたからだ。

『駿河』と艦隊旗艦『三河』^{みかわ}で、熱気が立ち込めていた頃、六航戦（第六航空戦隊）の三隻の空母では、飛行長や航空管制官が、副長ら幹部と共に搭載航空団のリストアップを始めていた。そして各空母の航空関係者は、帝國統合軍省や霞ヶ関が今回の交戦を“事件”で片付けるつもりがないことを悟った。

「派遣されてくるのは第九〇五航空団……凄いな、装備は全機最新鋭のジェット機揃いじゃないか……艦戦は五四式噴式艦上戦闘機“穹風”に、艦攻は五三式噴式艦上攻撃機“零星”か……確か空軍サンは其々“震穹”、“鎧山”と呼ばれている、空海共同開発機だな。おまけに偵察小隊ですら、彩雲改じゃなく就役したばかりの五七式噴式艦上偵察機“虹雲”かよ、これじゃあ新鋭機のバーゲン・セールだなあ……」

複葉機時代から軍に属していた古参の『天鳳』飛行長は、そう言っ
て思わず感心しながら航空団の装備や人員が詳しく書かれた資料を
見た。

「消耗分の機体や人員も、すでに台湾の高雄航空基地に到着済みだ
そうです。さらに輸送船により、爆弾や誘導弾の補充も届けられ
ています。……まあ、流石に航空魚雷の補給分はありませんが……
赤色海軍には精々オンボロ軽巡洋艦くらいしかありませんし、昨今
の艦攻の主力装備は航空魚雷から、誘導弾に代わりつつあります。
事実、航空魚雷は未だに新型が配備されておりません」

補給科から飛行科に派遣された新米少尉はそう言って、自分の年齢
より軍隊生活の長い飛行長を見た。

確かに軽巡クラスの軍艦までなら、何も魚雷に頼らなくとも爆弾や
誘導弾だけで十分な成果が見込める。しかも、世界でも戦艦クラス
の艦艇が減りつつある今、雷撃は潜水艦の専売特許となりつつあつ

た。

現在、戦艦を保有している国は日本帝國、アメリカ合衆国、イギリス連合王国、フランス共和国、ドイツ民主共和連邦、イタリア王国くらいである。

日本は『大和』^{やまと}・『駿河』・『三河』の三隻、アメリカはアイオワ級三隻とモンタナ級『オハイオ』、そしてアラスカ級大型巡洋艦（実態は巡洋戦艦）二隻の六隻、イギリスは『ヴァンガード』とネルソン級二隻の三隻、フランスは『リシュリユー』・『ガスコニユ』の二隻、ドイツは『ティルピッツ』一隻、イタリアはリットリオ・ヴェネト級三隻を保有している。

^{ブラジル・チリ・アルゼンチン}

他にも南米三国やトルコなども戦艦を保有しているが、一次大戦クルスの戦艦であり、もはや御召艦くらいにしか使えない。

このような状態では、航空隊の矛先が戦艦に向けられるかどうか微妙である。

しかも当の戦艦も、艦隊決戦が起こらなければ旗艦任務か、対地砲撃くらいしか出番が無い。防空任務も可能だが、肝心の空母護衛は大和型やモンタナ級、リシュリユー級は兎も角、鈍足のネルソン級などでは不可能だ。

つまり、戦艦が前線に出てくること自体が稀なのだ。実際各国は、使い道が無く費用も喰う戦艦に悩みを抱えており、日本ですら例外ではなかった。

しかし、今回の対中華戦争では、『駿河』と『三河』に仕事を与えられた。すなわち対地攻撃と空母護衛である。

要するに、今や海軍航空団の鼻先に、戦艦と言う獲物がぶら下げら

れる可能性は皆無となった。

ならば、彼らの獲物とは一つしかない。

「つまり我が母艦航空隊の任務は、紅軍への対地攻撃というわけか」

飛行長はそう言って、暫くは忙しくなりそうだと軍帽を深く被った。そして、横にいる新米航空管制官に微笑みかける。

「若い、今度の戦争は、もっぱら陸軍サンと空軍サンの支援になりそうだなあ」

「大陸の状況は、出雲を通じて常時知らされてきます。……リアルタイムで敵の動きが掴めますよ。空母の利点は高速で移動できるという点です。敵に悟られず、大規模な航空隊をピンポイントで派遣できます。……唯の“裏方”では済ましませんよ、存分に暴れられるでしょう」

初の実戦だというのに、若い航空管制官は白い歯を見せつつ微笑した。

人間的に過渡期である帝國国防軍では、戦争を経験したベテランと新人が入り混じっている。それは現場は勿論、幕僚や後方も同じだった。しかし、彼らは落ち着いていた。中華大陸での戦争は、誰でも予想できたことだったからだ。その時期は兎も角として――。

戦艦部隊や航空戦隊が、臨戦態勢を整えていた頃、四水戦（第四水雷戦隊）も準備に取り掛かっていた。旗艦『酒匂』^{さかわ}には以前と違い、国防海軍が独自開発した対潜哨戒・偵察・着弾観測などをこなせる八式回転翼機“海鷗”^{かいおう}を搭載していた。

「これで対潜哨戒は勿論のこと、偵察もこなせる」

『酒匂』艦長は嬉しそうに、艦橋からヘリコプタを見下ろしていた。

しかも今回、内地から軽空母改装の回転翼機母艦『伊吹』^{いぶき}が、わざわざ四水戦を補助するために派遣されている。つまり回転翼機を消耗した場合、台湾に帰還せずとも、駆逐艦に護衛された『伊吹』が進出し、そこから飛び立った回転翼機が『酒匂』ヘリ甲板に着艦する。

『伊吹』は巡洋艦を設計変更した元軽空母であり、最高二九ノットと健脚である。そのため、迅速な展開が見込めた。

なお、『伊吹』と駆逐艦二隻で臨時編成された三五航戦（第三五航空戦隊）は第一艦隊に所属せず、あくまで防衛艦隊司令部から臨時派遣された形を取っている。これは、海鷗の配備数がまだ少なく、回転翼機を満載したヘリ空母は引く手数多で、様々な方面で配備要求があったからだ。そのため『伊吹』は現在様々な前線を飛び回っている状態である。

しかも帝國のヘリ空母は『瑞穂』と『伊吹』、後は内地で訓練任務に明け暮れている伊吹型回転翼機母艦二番艦『笠置』の計三隻しかない。後は商船改装の特設回転翼機母艦が何隻があるが、低性能で鈍足のため、前線まで進出するには役不足である。

また『龍鳳』は司令部戦隊直属のため、滅多なことでは動かせない。そのため海幕（国防海軍幕僚本部）では、アメリカからインディペンデンス級軽空母を購入しようと言進言する者すらいた。

第三野戦航空基地「白虎」が敵爆撃に曝されていた頃、上海の航空基地「麒麟」から飛び立った攻撃機の群れが、紅軍に接近していた。この攻撃隊は五三式噴式攻撃機“鎧山”を装備した第二七一航空隊である。鎧山は双発ジェット攻撃機で、強靱な防弾性能と五七ミリの大口徑砲を持ち、別名“空中戦車”とも言われる機体である。乗務員は三名だ。

現在は800キロ爆弾を搭載するか、対地誘導弾“強弓”を搭載していた。

それを第二九九航空隊が護衛している。この戦闘航空隊は、双発ジェット戦闘爆撃機である四六式噴式戦闘爆撃機“火龍”？型に乗り込んでいた。計四七機の集団は、編隊を組みつつ向かっていった。

鎧山一番機コールサイン「五稜郭01」の航法員兼通信員が、機長に行った。

「隊長、東中国（中華連邦）空軍の爆撃隊が爆撃を開始したようです……なお、北中国（中華民国）空軍の爆撃隊も、そろそろ爆撃コースに入ります」

「よし、予定通りだな。……これは中華大陸の戦いだ、実際に国土を侵略されているのは同盟国の奴らなんだし、一番槍は譲らねえとな……」

攻撃隊指揮官奈倉月善郎なぐらつきぜんろうは、攻撃機乗りには珍しい、所謂“血の氣が多い”指揮官とは真逆の人間であった。

中華連合空軍は連山れんざんや飛龍ひりゅう、一式陸攻（一式陸上攻撃機24型）、五式襲撃機（キ102乙）、九九式軽爆撃機、五式軽爆撃機（キ93）、さらにはアメリカから購入したB-17“フライングフォートレス”、イギリスから購入したデ・ハビランドモスキート（爆撃機型）などを装備していた。今回は、連山と一式陸攻装備の爆撃隊が出撃したらしい。

攻撃の様子は、国防空軍の五式偵察機“景雲改”けいうんかいや連山の偵察機仕様が逐一記録、送信しているはずだ。

現在、帝國の連山はほぼ全てが輸送機か空中給油機・空中邀撃機・戦略偵察機などに改装されており、爆撃機仕様の連山は同盟国軍にしか配備されていない。

これは六発戦略爆撃機の富嶽ふがくや、ジェット戦略爆撃機斑鳩いかるがの配備が進んだためである。

前方に爆撃機の編隊と、黒煙を上げる陸上部隊が見えて来た。対空砲火が上がっているが散発的で、効果があるとは思えなかった。

「よし、各機各機、攻撃開始せよ……」

奈倉中佐は突撃命令を出した。

その頃、セルギィアルセーニエフは船内にいた。彼は救命士と共に落下傘脱出した後、このフネに収容されたのだ。そう……「ギリギリス03」号を落としたフネである。

恐らくは倉庫か何かであろう部屋に放り込まれたアルセーニエフと九頭川白部くずかわ しらべは、粗末な毛布にくるまって座り込んでいた。

「白部先輩、このフネは一体何なんです……商船じゃあないんですか？」

大分体力と気力を取り戻したアルセーニエフは、そう言つて物珍し気に辺りを見渡した。彼の目の前では、長身でスマートな男性が腕を組んで座っている。

「恐らく特設巡洋艦……“仮装巡洋艦”の類だろうな。沿村機長そえむらはまんまと騙されたというわけだ。コイツは中华民国商船旗を掲げていたし、どうやら12センチクラスの高射砲を備えていたようだ」

九頭川一等海尉（大尉相当）は、SPO設立前から海上護衛総隊に籍を置いていたベテランだった。常に冷静で仙人の様な雰囲気を出し、鋭すぎる目は、彼が救命士だとは信じられない要因の一つとなっている。恐らく殺し屋と言って紹介すれば、大部分が信じるのではないかとアルセーニエフは考えていた。はつきり言って、陸戦師団で戦車に乗り込んでいる方が似合いそうな男だった。

彼はアルセーニエフと同じく、九州地方隊から派遣されてきた人間である。そのため、アルセーニエフは九頭川を先輩と呼び、慕っていた。実際彼は、入隊したてのアルセーニエフより遥かにベテランだった。

今回も、彼が呆けている自分を海に叩き込まなければ、文字通りの意味で海の藻屑となっていただろう。

「……南中国（中華人民共和国）ですか？戦争が始まるのですね……」

「予期されていたことだろう。戦争はある種の機械だ。オイルがある限り、止まる事も無い。おまけに欠陥の機械だから、すぐに暴走を始める」

「オイルって何です？」

「“命”だよ、人のな」

事も無げに言い切る九頭川を見て、アルセーニエフは頭を抱えた。彼は実戦経験など持たない戦後入隊組だ。しかも、SPOが想定する“敵”とは不法入国者のボートか武装船、海賊位である。正規軍

との戦いなど想定外もいいところだった。

「でもこれっていいんですかね……宣戦布告はされたのでしょうか？」

「恐らくされていないだろうな。されていたら、とつくに管制塔から連絡が入り、退避命令が出たはずだ。もっともこうして助けられたのだから、完璧に礼儀知らずでも無いだろう」

「……これ、問題じゃあないですかね？」

問題どころの騒ぎではない。

SPOは軍事組織ではない。そして彼ら二人も軍人ではない。権限的には警察だが、旧式駆逐艦や巡洋艦を“巡視艦”と称し運用している。無論、装備は大部分が外されているが、主砲や高角砲は健在な艦が多い。傍から見れば、16センチ砲や12センチ砲を搭載したフネが“警察所属”と聞いても戯言にしか聞こえまい。

戦争が起これば、SPOは国防海軍に管轄が移るが、宣戦布告がされていない状態では微妙だった。少なくとも「グラス・ホッパーキリギリス03」号乗務員は、管轄が国防海軍に移ったという報告を受けていない。

つまり南中国軍は、『警告なしで民間機を撃ち落とし、民間人を殺傷した』事になる可能性が高い。

言うまでも無くそれは致命的なミスである。国際世論からあの手この手で叩かれるのは目に見えている。

それを防ぐ方法は唯一つ。

生き残り——すなわちアルセーニエフと九頭川の口封じである。

「仮にこのフネが仮装巡洋艦だとすれば、臨検用に武装要員が乗り込んでいるはずだ。脱出しようとすれば、間違いなく銃殺されるだろうな」

仮装巡洋艦の用途の一つが、商船に化けて敵国商船に接近しての臨検、或いは拿捕や攻撃である。特に大戦時のドイツは多数の仮装巡洋艦をUボート（独潜水艦）の補給任務や通商破壊に駆り出した。臨検する場合、反撃を喰らわぬよう、武装した戦闘員を臨検班に随伴させるのは常道である。

「先輩、詳しいですね」

「なに、『ほうこくまる報国丸』に乗り込んだ同僚がいてね」

『報国丸』は、帝國が保有していた特設巡洋艦（帝國では仮装巡洋艦を“特設巡洋艦”と称していた）で、ドイツを見習い太平洋で通商破壊戦に従事していた。

「それにしても、南中国は仮装巡洋艦なんてこしらえていたのですね」

「俺も知らなかったな、統情（統合国軍省情報局）がしくじったのか、俺にまでは伝わらなかったのか……」

仮にも帝國防衛の一翼を担っている以上、S P Oにも情報局の情報が入っているし、S P Oにも分析や情報収集の専門部門はある。が、流石に近隣諸国の軍艦の詳しいデータまではベテランと言えども一介の救命士である九頭川まで知らされることはないだろう。

「……………どうします？それとなく、ここの奴らに聞いてみますか……………
自分^{マシダリン}は北京語なら喋れますが」

アルセーニエフはそう言つて、扉の方を見た。恐らく扉の横では、中国水兵が銃を持って見張っているだろう。

広大な中国大陆は、様々な民族が住んでいる。それだけでなく、“公用語”である中国語ですら幾つもの種類があり、それらは訛りと言ふよりほぼ別の言語と呼べるものも少なくなかった。

大陸出身のアルセーニエフは中国人とも面識があり、彼は日本語とロシア語の他に北京語もある程度は話せる。どうやら今になってようやく、撃墜されたショックで萎えたS P O機構員としての使命感がせり上がってきたらしい。仲間五人を殺された怒りも沸いてきて、アルセーニエフはやる気満々だった。

それを見て、無表情だった九頭川はうつすらと微笑んだ。

「どの道このフネが沈められるか、戦争が終わるまでは暇だからな……………戦時捕虜一号と二号としての責務を果たしておくか……………」

彼はそう言つと、猛禽類の様な眼を光らせた。

?? 先の岬の青色シゲナル（後書き）

・五三式噴式攻撃機“がいざん 鎧山” / 五三式噴式艦上攻撃機“れいせい 零星”
最新鋭の双発のジェット爆撃機。乗務員は三名で、防弾性能が高く、大型対地（対艦）誘導弾も装備可能。五七ミリ大口径砲を装備している。通称「空中戦車」。なお、空海軍共同開発機でもあり、国防海軍では“れいせい 零星”の名で採用されている。

・五式偵察機“けいうんかい 景雲改”

ターボ・プロップエンジンを搭載した偵察機。最高時速700キロ以上の優秀機で、国防空軍では噴式偵察機の配備が遅れているため、今尚主力偵察機である。

・四六式噴式戦闘爆撃機“かりゅう 火龍”

帝國初の実用噴式機。ジェット機黎明時代に開発されたため、その性能は新鋭ジェット機と比べると低い。が、？型は大幅なバージヨンアップを受けた最新型である。双発単座機の甲型と複座型の乙型がある。戦闘爆撃機型だけではなく、偵察機型なども開発されている。なお、戦闘爆撃機型はそのほとんどが？型であり、？型などの旧型は主に錬成航空隊に配備されるか売却されている。

・伊吹型回転翼機母艦『いぶき 伊吹』・『かや 笠置』

基準排水量12,000トンの回転翼機母艦。元は巡洋艦を設計変更した軽空母だが、戦後改装された。搭載機数二四機。

?? 曙は終わりが始まりか

その日、台湾高雄警備HQでは大勢の海軍人が、興奮した様にそこからしこで話し合っていた。

「聞いたか、あの話……先日“晴空”^{せいこう}（二式大艇輸送機型）に乗って、^{といばな}榎端防衛艦隊参謀長がここに来たらしいぜ」

「何だつて？^{といばな}榎端久利雄少将の事か……そんなお偉いさんが台湾に、一体何の用なんだ？」

「噂では、ここ台湾に連合艦隊が進出してくるとか……」

「連合艦隊……」

第二一警備戦隊群幕僚候補生は、呆然としたように呟いた。

“連合艦隊”——通称「GF」は、二個以上の常設艦隊からなる非常設艦隊である。確か現在では、連合艦隊司令長官は防衛艦隊司令長官を兼務するはずだ。

“防衛艦隊”は一防艦（第一防衛艦隊）を始めとする三個常設防衛艦隊の総司令部を指す通称で、正式には“防衛艦隊司令部”と言う。統合国軍相直属の組織である。帝國国防海軍実戦部隊の実質的トップであり、ほかの現場司令部より権限は遥かに強大だ。

そして連合艦隊が編制されると、防衛艦隊司令部は事実上消滅し、連合艦隊司令部がその代わりを務める。そして連合艦隊はその特性

上、国防海軍のあらゆる部隊——航空団から警備戦隊群、さらには陸戦師団まで——指揮下に置くことが可能となる。どの部隊を配下に置くかはG F司令部の自由であり、戦力運用上はかなり流動的且つスムーズになる。

無論、平時はそんな巨大組織は創られない。必要も無い。つまり連合艦隊の設立は、それだけで平時ではなく——“戦時”となったことを意味していた（ただし一時期、連合艦隊が常設だったこともある）。

付け加えるなら、連合艦隊を設立する権限は、D Fにも海幕（国防海軍幕僚本部）にも統合国軍相にも、軍事のトップである内閣総理大臣（首相）にもない。

その権限を持つのは、国事の最終決定をする者——天皇だけである。

「東京は……いや、陛下が御決断なされたということか」

幕僚候補生が呻くように言うと、彼に噂を話した同期生が神妙な面持ちで頷いた。

すでに地獄耳の下士官や古参士官が広めたこともあり、この噂は藍原^{はらすい}一を含む艦艇乗務員にも届いていた。

「面倒なことになってきたなあ……」

「どうせ台湾^{たいわん}海域の主力は一一艦（第一一艦隊）だろうさ。俺達は潜水艦狩りとゲリラ狩りしかできねエよ……いや、やはり違つか

「俺がおかしいのか？」

「おかしくはないだろ津具樹……。台湾の海防も、主役は台湾海軍さ……。自国の防衛を同盟国とはいえ他国に丸投げしては、台湾の面子にも関わる」

「中華大陸はどうなるんだ……。やはり内地の艦隊が担当するのかな」

藍原は蝉林津具樹せみはやしつぐきら同僚と話し合いながらも樂觀していた。いや、それは第二一警備戦隊群の大抵の将兵に言えることだった。

戦場が大陸となれば、海軍艦艇の活躍の場は限られる。フネにとつて大陸とは、巨大すぎる障害物にしかない。艦砲射撃か航空攻撃がやっとだろう。

唯一の例外は川河砲艦くらいだが、帝國は川河部隊を保有していない。対ソ戦の頃はあったのだが、すでに解体されている。

「まあ、僕達は海にいれる分だけマシかもな」

藍原は小さく呟いた。

海軍人の仕事場は、何も海だけではない。陸上に居を構える通信隊や司令部はあるし、統合国軍省海軍部の職員も海軍人である。教育機関の教官にでもなれば、完璧に陸上勤務だ。

航空隊も、空母に派遣されることもあるが、あくまで本部は陸上基

地である。

海軍人、特に士官の役職はある程度決まっている。上記のような、教育機関の教官や司令部（陸上）幕僚などの後方支援勤務を“軍政”、艦隊・戦隊司令部（旗艦）幕僚や軍艦艦長などの海上勤務を“ぐんれい軍令”と呼ぶ。

軍政の人間は一生陸上にいるというわけではなく、海軍人は軍政と軍令を交互にこなすことにより、経験やスキルを身につけ人脈を形成し、あらゆる部署（職場）に通じた上級指揮官を目指す者というのが通例だ。これは理想で実際はそうバランスよくいかないものだが、そういうものである。軍人の役職や配属先は、けっこう頻繁に変わる（つまり異動する）ものなのだ。

つまり本人の希望通りになるとは限らないし、何より軍令は人気だった。

海軍人になった以上、フネに乗り込み海に繰り出したいと思う人間が大半なのである。

無論、国防将兵学校を始めとする軍の教育機関での専攻先によって配属先と言うのはある程度限定される。潜水科出身の人間がいきなり空母に配属されるようなことはないし、その逆も然りだ。もともと、“潜水空母”といったどっちつかずの艦だったらならば話は別だが。

また、藍原のような若年士官（国防高校出身の尉官）は海上勤務（飛行科出身者は航空団勤務）と各種教育機関を交互に行き来することが多い。そして経験を積み、最終的には艦長や戦隊司令を目指す。

それにこれも当たり前の話だが、軍人の総数の方が軍艦の配備人員

数よりも数は多い。特に士官は、軍艦によつて事細かく配属数も部署も決められている。例えば『K12号』には飛行科はないので、飛行長や航空管制官なども乗り込んでいない。

つまり、軍艦に乗り込める人間には限りがある。艦長はその最たる例で、佐官になったからといって艦長に任じられるとは限らないのである。

そしてこれも当たり前の話だが、洋上勤務の多い人間は同じ中將でも艦隊司令長官などに任じられやすく、陸上勤務の多い人間は海幕次長などに任じられやすい。

「あのフネの飯は美味いしな」

軍艦での食事を担当するのが主計科であり、調理をするのが主計兵である。海防艦の調理場など高が知れているが、それでも腕の良い主計兵が配属されているのは幸運といえよう。

これは余談だが、軍の主計兵を侮つてはいけない。彼らは料理人顔負けの専門知識と技術を叩き込まれている。和洋中何でもありだ。

ついでに言つと英連合王国王立海軍の弟子たる帝國国防海軍の士官は、テーブルマナーをとことん叩き込まれている。オフィサー・ジェン“士官は紳士であれ”は帝國の伝統でもあった。

誰だって、海の上で不味い飯は食いたくない。洋上勤務では食事は数少ない楽しみなのだ。

なまじグルメな日本人にとって、食事情の向上は大切な問題である。

「これで酒が飲めれば文句はねエ」

航海士はそう言つて豪快に笑う。が、酒が苦手な藍原と蟬林は、顔を見合わせて苦笑するだけだった。

しかし、そんな藍原達を待っていたのは、澎湖諸島に軍を派遣する台湾艦隊の護衛任務だった。

どうやら台湾政府はこれを機に、澎湖諸島を前線基地化する腹のようだ。

すでに中華大陸では戦争が勃発し、帝國政府は宣戦布告を行った。ジャカルタ（インドネシア）のUNAO軍司令部では、インドネシア軍を中心にUNAO軍の再編が行われているはずだ。当然、UNAOもまた、南中国（中華人民共和国）に宣戦布告をするだろう。

台湾は巡洋艦『西寧』^{さいねい}を旗艦とした台湾艦隊——通称“丁部隊”を出撃させた。それは第188航空戦隊や輸送船団も含み、事実上、台湾水上部隊の全戦力と言つてもよかった。

上空では、台湾海軍の二式大艇（二式大型飛行艇）に軽空母『台北』^{たいぺい}から飛び立った陣風や台湾空軍の一式陸攻（一式陸上攻撃機）、そして零戦（零式艦上戦闘機）52型が艦隊を援護している。

そしてそれを護衛する形で、第二一警備戦隊群が進んでいた。

なお、第二〇五警備戦隊群に増援として加わった『永祚』^{えいそ}は、整備のために高雄に留まっていた。
その代わり、今まではフィリピンにて支援任務をしていた統合支援艦『美浜』^{みはま}と『桂浜』^{かつらはま}で編制された独立第六八戦隊が合流し、艦隊に加わっている。

この二隻は高速輸送船改造の支援艦で、補給任務から搭載している水上機による対潜哨戒・偵察、さらには16センチ単装砲一門を搭載しているため砲撃もこなせる艦である。見かけは、巡洋艦と補給艦と水上機母艦をこっちゃにしたような姿をしている。基準排水量は7800トン。

「暇だなー」

CICの定位置に付きながら、藍原はポツリと呟いた。

最近は恋人である雪丘^{ゆきおか}奏深とも会えないし、同居人のサリアとも出撃してしまつては会えなくなる。

雪丘は雪丘で、今回も長距離出撃任務を帯びていると聞いていた。恐らくは今頃、澎湖周辺の空を飛びまわっているだろう。

帝國は連山改造の四八式空中給油機“空鯨”^{くつげい}まで持ち出したという話まであった。

蚊の鳴くような音が響く。航空機の発動機音だ。

「心配するな、『美浜』から飛び立った紫雲だよ」

船務長五弓弓尋ごゆみゆみひろが落ち着かない様子の船務科兵に囁いた。

海防艦にとって最も恐ろしいのは空襲だ。今は多数の駆逐艦が周囲を航行しているから、日台合同の対空網が形成できるだろう。しかし、南中国軍が爆撃を仕掛けて来ないという保証はない。基準排水量1000トンにも満たない海防艦にとって、双発爆撃機の空襲は脅威である。駆逐艦や巡洋艦と同様だ。

「でも、相手が潜水艦となると大暴れできる。対潜掃討戦では戦艦や大型空母は邪魔にしかないからなあ」

南中国軍は噂によると、ソヴィエドからの亡命者が使用した潜水艦を接收して研究したらしい。しかもソヴィエド潜水艦は、拿捕したドイツボートの技術が使われている。

なお、この情報は情報立国たる英国から、情報局経由で外務省に齎もたらされたと聞く。

おまけにソヴィエドの新鋭潜水艦は、太平洋・亜細亜方面に集中配備されていた。その大半は日本帝國により撃沈されたのだが、帝國も護衛空母『神鷹しんよう』を失うという失態を犯している。

「“紫雲”って何です？」

「帝國の水上偵察機で、二重反転プロペラを採用している。こいつは哨戒だけでなく、対潜攻撃もこなせる」

現在の帝國では回転翼機が主流であり、水上機の生産・配備は年々下火になりつつある。そのため新米の兵は、水上機に関する知識がほとんどなかった。

そのため駆逐艦『白百合』^{しらゆい}の航海員は、ベテランの古参兵に聞いていた。

「美浜型は八機の水上演習機を搭載していて、今回は紫雲三機、瑞雲三機^{すいじゆん}、そして藍嵐二機^{あいらん}を搭載している……」

“瑞雲”は偵察機だが急降下爆撃もこなせるから武装船も仕留められるし、三式戦（三式戦闘機“飛燕”^{ひえん}）改造の“藍嵐”は戦闘爆撃機でもある。航空戦力としてはなかなかのものだぞ」

零観^{ゼロカン}（零式水上観測機）が飛んでいた頃から軍にいたベテランの曹長はにこやかに笑った。

こうして艦隊は、澎湖諸島へと向かっていく。

?? 曙は終わりが始まりか（後書き）

・美浜型統合支援艦『美浜』^{みはま}・『桂浜』^{かつらはま}

基準排水量7800トンの支援・戦闘艦。補給艦だが八機の水上火上機を搭載でき、偵察や哨戒も可能。さらに16センチ単装砲一門を搭載しているため砲撃もこなせる。

?? 泥色の邂逅と朝日雲

推進式発動機プッシュの独特の音に混ざり、雪丘奏深ゆきおかかなみの鼻歌が響いていた。第五六七戦闘飛行隊に配属されている一二機の四九式戦闘攻撃機じんらい“迅雷”編隊は、誰も見惚れる程の綺麗な陣形を保ちながら、澎湖諸島の上空を進んでいた。

すでに澎湖に潜入したとある部隊より、すでに澎湖諸島の一部に中華人民共和国（南中国）紅軍が進出、不法占領（占領に不法も合法もあったものではないのだが）し、基地を運用していることはわかっているし、そもそも雪丘たちは以前、ここで“海賊”と交戦している。

調査の結果、やはり海賊は紅軍の手先である可能性が濃厚だった。彼らの兵器はいずれも南中国にも配備されている兵器ばかりで、件の潜水艦はフランスが輸出したルドウタブル級潜水艦若しくはオランダが輸出したK級潜水艦のいずれかだと情報局は結論した。

現在、日本帝國とネーデルランド王国オランダ（蘭）、フランス共和国との関係は微妙だった。一応友好関係にはあるが、蜜月ともいえない。寧ろ不仲と言える。

理由は単純で、嘗て蘭国の植民地だった東亜は、帝國に解放されてアジアカオセアニア連合に加盟している。UNAO加盟国を、帝國の“属国”と皮肉る者は多い。実際UNAO加盟国は帝國と交易し、工業製品のほとんどを海洋貿易国家日本に依存している。それだけではなく、国防も帝國国防軍が重要な地位を占めていた。もともとUNAOに束縛は無く、脱退しようと思えばいつでもできるが、そうすれば嘗ての宗主国が乗り込んでくることは容易に想像

がついた。

さらにフランスでは未だに共産党勢力が根強く、しかも対ソ戦での欧州方面で日本帝国に手柄を取られている。おまけに共和国の宿敵とも言える英連合王国は、日本帝国と蜜月時代ハネムーンを迎えていた。

その意味で仏・蘭両国は、日本帝国や中華連合に協力的な米合衆国・英国、そして今は沈黙しているロシア共和国を牽制する意味を込めて、南中国に積極的に武器輸出をしていた。

最近では、戦艦『リシユリユー』を始めとした艦隊が南中国を訪問するという未確認情報もある。

帝国は最悪の場合、中華大陸での戦争が対仏、対蘭戦争に“飛び火”する可能性すら考えていた。

無論そんなことは、雪丘を始めとする現場の軍人の知るところではない。

「来たぞッ」

誰かが叫んだ。
雪丘も気付く。
黒点が見えた。真正面からだ。明らかに友軍ではない。

「バカーチスカ、グラマンか……いや、露助ロスケ（旧ソ連）だッ」

「La-5か？いや……あれはLaGG-3だ！」

友軍機からの通信が次々と入る。

LaGG-3。旧ソ連が南中国に捧げた亡霊の一つだ。ソ連航空隊からは“塗装された折り紙つき棺桶”と呼ばれた機で、完全木製ではないが、生産には大量の木材が使用されている。それ故空中分解の危険が高かった。ソ連の傑作レシプロ機ラボーチキンLa-5やLa-7の雛型とも言える戦闘機だ。

今は南中国で、改良型が多数生産されているという噂があったが真実らしい。

澎湖諸島の島に秘密裏に建設された滑走路から発進したのだろう。その数は一〇機を越えていた。

——鬱陶しいな。

雪丘は小さく舌打ちすると、飛行隊長の指示を待たずに敵機の群れの中に突っ込んでいった。

僚機である「長篠06」が慌てて続くのが見える。

「各機各機、各自自由戦闘……交戦開始ッ」

ワンテンポ遅れて、飛行隊長の指示。

雪丘は寧猛な笑みを浮かべながら、空戦へと飛び込んでいった。小声で文句を言う僚機を率いて——。

一方、沖縄を出港した第八艦隊は、南中国沿岸部を移動していた。
どう見ても挑発行為だが、これは澎湖諸島から敵を引きつける^{デコイ}役でもあった。

大型多目的巡洋艦『天城』^{あまぎ}の艦橋では、副長が穏やかな海を眺めていた。

「……こちら戦闘情報中枢、電探に感有り、方位と距離は——」

一般的に帝國国防海軍では、巡洋艦以上の艦の上級幹部の内艦長がCIC、副長が艦橋に陣取っていることが多い。これは“もしも”の時、艦長と副長が同時に戦死して艦内指揮系統が混乱することを防ぐためである。

当たり前の話だが、艦橋とCICは艦の頭脳だ。被弾すれば最悪、艦は“脳死”する。防弾対策は取られているが、絶対防御などありはしない。

軍艦の上級幹部には“席次”と呼べるものがあり、艦長が戦死した場合は副長、副長も戦死した場合は航海長が指揮権を掌握するなど決められている。最悪の場合は、准士官の曹長に指揮権が移る可能性すらあった。

“巡洋艦”とはいえ、基準排水量28,000トンの天城型は一昔前の巡洋戦艦クラスの艦である。

しかし戦艦だろうが巨艦だろうが所詮はハードウェアであり、乗り込む人的資源が要と言っても過言ではなかった。

報告を受けた副長は、当直監視員を叱咤激励すると同時に“識別不明”の究明を急がせた。

アンノウンはどうやら、沿岸部を航行中らしい。陸地と一体化してしまい、詳しいデータは表示されなかった。電探員のミスではない。この時代のレーダーは、まだまだ完璧とはほど遠かった。

暫く目を凝らしていると、急に黒い影が沿岸から現れた。此方に横を向けつつ進んでいる。沖合に出ようとしていたのだ。

この距離から“視認”できる。それは、かなりの大型艦であることを意味していた。

副長は混乱した。

南中国には、戦艦どころか重巡洋艦すらない。

しかし、見張り員の方は冷静に視認情報を分析、頭の中から該当するデータを探し出す。

腐っても帝國の誇る見張り員である彼らからしてみれば、それは決して不可能ではなかった。

「あれは……戦艦です、リシュリユー級かと思われます!」

「リシュリユー級だって?」

『天城』艦長無東銅鐸は眉をひそめた。

「栄光ある共和国海軍の戦艦が、一体どうしてこんなところにいるんだ？」

「付け加えると、件の艦隊は戦艦『リシユリユー』とド・グラース級軽巡洋艦一隻——向こうは『シャートルノー』と名乗っております——そして駆逐艦四隻です。南中国を表敬訪問中だと言ってきております」

皮肉めいた無東の感想に、通信長が補足した。

「戦隊司令は何と？」

「現時点では、フランスは中立国ですので国際法に則り、本海域から退避するよう要請しました」

「それで返事は？」

「「本国ヨリ未ダニ新命令ハナシ。ヨツテコノママ予定通り中華人民共和国広東省^{カントン}珠海^{ジュハイ}ニ進路ヲ向ケル。静観サレタシ」だそうです」

「馬鹿な……」

無東大佐は頭を抱えた。

戦争が勃発した場合、戦闘海域若しくはそれに指定されてもおかしくない海域にいる中立船舶（軍艦含む）は退避するか、港に停留して母国の中立宣言を待ち、保護を求めるのが通例だ。

戦闘に巻き込まれても文句は言えない。

「ん……」

無東は思い出したように、通信長を一瞥した。

「艦隊司令部と呉鎮（呉鎮守府）には、このことを伝えたか？」

「はい、すでに送信済みです。呉鎮からは、独立第八六戦隊を臨時に派遣すると返電がありました」

第八艦隊司令部は沖縄に設置されている。そして第三遊撃戦隊を含む第一遊撃戦隊群は、编制上は呉鎮守府所属となっていた。

「“独立第八六戦隊”？聞きなれないが、何隻なんだ」

無東に言われ、通信長は手元の資料を捲った。

「えーと……ありました。訓練航海中の臨時編成戦隊です。先月就役したばかりの新造巡洋艦『那智』なちを旗艦とし、凧風型駆逐艦四隻、これに新造の高速補給艦『赤羽』あかばねが加わっています。現在は沖縄奄美諸島あまみ付近を航行中……このことです。なお緊急時に備え、全艦実弾を装備しております」

「妥当な措置だろうな。しかし『那智』か……。確か、最新鋭の摩耶型巡洋艦の二番艦だったな」

「我が軍が誇る、強力艦であります。いざとなれば旧式戦艦も相手取れるでしょう」

「相手取る」ならなあ……。しかし、フランスは何をしているのだろうか……」

「艦長、一応の警戒として、主砲及び誘導弾の発射準備をしますか？ いざとなれば艦載機も使えますが」

突如入った副長からの具申に、無東は咳き込みそうになった。

ちなみに帝國と共和国の艦隊は、すでに目視で視認できる（大型艦だけだが）程接近している。巡洋艦の主砲でも楽々届く距離である。そんな距離で主砲塔——天城型の場合は連装砲塔——を向ければ、即座にばれる。戦闘準備と見られても仕方がない。

「副長、それには及ばない。軽いいざこざが国家間戦争に発展する例は珍しくはない。ここは慎重に行動すべきだ」

「しかし無東艦長、いくら36センチ砲を持つとはいえ、本艦は所詮は巡洋艦。『リシユリユー』は38センチ45口径四連装砲二基、計八門を持つ強力艦ですぞ。」

『大和』や駿河型なら撃ち合え、いや圧倒できましようが、本艦にとってはいささか手に余る相手ですな。

『天城』・『葛城』を足して36センチ砲八門。我が砲は大口徑砲（60口径）ですから性能は互角と言って良いでしょうが、防御力には不満が残ります。

敵弾が艦内で炸裂すれば通信系統が断絶され、引火すれば廃艦同然となりましよう。戦闘能力を失った軍艦など、沈没艦と大差はありません」

潮崎晃羅副長の耳が痛い話に、無東は顔を顰めた。耳を塞ぎたいところだが、副長の意見に間違いはない。

36センチ連装砲二基を装備しているとはいえ、天城型は防空艦としての趣が強い。そのために高速性を確保するため、削れる装甲は全て削ったと言わんばかりのスマートな船体の特徴だ。言い換えれば、戦艦との撃ち合いに耐えられるほどタフではない。ある意味、日本帝國の“航空主兵主義”の犠牲者とも言えるフネが彼女なのである。

そしてリシユリユー級は、ドイツの誇るビスマルク級を仮想敵と定めた本格戦艦である。

無東も大巡の艦長に任じられているからには“大砲屋”の人間であり、戦艦の砲撃の威力は嫌というほど知っていた。

仮に沈没はしなくとも通信系統が遮断され、CICや主砲射撃指揮

所からの情報が各砲塔に伝わらなければ、統制射撃は不可能となる。そうなれば、“砲台”としての命運は尽きたと言っても過言ではない。

誘導弾も戦艦を沈める程強力なモノはない。帝國国防海軍は大型爆撃機用の巨大空対艦誘導弾“桜”を開発していたが、戦艦の出番がほとんどない現在では、一部の部隊に数基配備されているだけである。ましてや、艦載型（艦対艦誘導弾）で戦艦を仕留める程のものとなると、そもそも需要がゼロである。

もつとも『天城』・『葛城』や同行する巡洋艦『天塩』には、延焼型誘導弾“業火”？型が装備されている。これは敵艦を撃沈するためのミサイルではなく、火災を発生させて一時的な無力化を狙うためのミサイルだった。ナパーム弾の誘導弾版ともいえる。

だから仮にリシユリユー級戦艦と戦っても、手も足も出ないというわけではない。

しかし、こちらが不利なのは明らかである。

おまけにリシユリユー級は最高30ノットと健脚で、スペック上なら英米新鋭戦艦と遜色ない。

何とも嫌な予感に襲われながら、無東は警戒態勢だけは厳にするよう命じる他なかった。

?? 泥色の邂逅と朝日雲（後書き）

・摩耶型巡洋艦『摩耶』・『那智』

基準排水量12,000トンの航空ミサイル巡洋艦。後部ヘリ甲板を備え、さらに多種多様な誘導弾を搭載している。その代わり、主砲は20センチ連装砲一門のみ。最新鋭艦で、現在三番艦『富士』・四番艦『春日』が建造中。なお、先代の同名艦はすでに除籍・解体されている。

・天塩型巡洋艦『天塩』・『石狩』

基準排水量9600トンのミサイル巡洋艦。様々な誘導弾が搭載されている他、テストケースとして回転翼機なども搭載されている。実験艦としての色が濃いため、二隻の建造にとどまっている。なお、摩耶型巡洋艦はこの天塩型の拡大発展型ともいえる。

??? 五月蠅い序曲と静かな鎮魂歌

「航空電探に感あり、リシュリユーから発進した水偵（水上偵察機）かと思われます」

『天城』^{あまぎ} CICから寄せられた情報に、艦長無東銅鐸^{むとうどうたく}は顔を顰めた。

「フランス戦艦も電探は搭載しているはずだが……」

「こちらさいうんかいも彩雲改を二機搭載しております。発進させますか？」

「旗艦『葛城』^{かつらぎ}から、指示は来ているか？」

「未だ」

「そうか……」

無東大佐は『天城』の艦橋に来ていた。交代する形で、副長がCICに入っている。接近しつつあるフランス共和国艦隊を、自分の目で確認するためだ。

彼とて海軍士官であり、海軍大佐だ。列強の戦艦の知識くらいはある。ましてや、彼は帝國国防海軍では貴重な“大砲屋”である。

「こちら防空指揮所、上空より水上機視認！単葉（主翼が一枚の機体を指す。ちなみに主翼が二枚の機を“複葉”と呼ぶ）……チャン

スヴオートOS2U“キングフィッシャー”と推定！」

チャンスヴオートOS2U“キングフィッシャー”。

アメリカ合衆国製の水上観測機である。初飛行は1939年とすでに旧式化しており、性能は高いとは言えない。在庫処分を理由に共和国海軍へと流されたのだろう。合衆国は日本帝國よりも、ヘリコプタの配備に意欲的だった。

対してフランスはヘリコプタ、というより海軍整備に乗り気ではなく、水上機の開発すらロクに行っていない。それでも新型空母の整備を行ってはいしたが、戦艦はほとんど後回しにされた。そして戦艦の整備も『ガスコーニュ』が優先されており、『リシュリユー』は後回しされていた。

キングフィッシャー

“カワセミ”は開発当時から日本水上機より低性能だったが、それは水上観測機に戦闘機並みの空戦性能を求めた日本がある種の“異常”なのであり、観測機としての性能は悪くない。

観測機に必要なのは高速性ではなく通信機能……そして現場の荒々しい運用に耐えうる実用性（稼働率）である。

その点OS2Uは、その両方を確保していると言えた。おそらく通信機も、改良されたものに換装されているはずだ。

「艦長、『葛城』^{かつらぎ}が発艦態勢に入りました……あ、V字飛行甲板から発艦……彩雲改です」

「ふむ」

第八艦隊の現場指揮権は、第三遊撃戦隊戦隊司令内海少将に握られている。そして内海沖久が乗り込む艦——つまり旗艦——は『葛城』だ。

艦隊戦闘行動に入る場合、彩雲改から送られた情報は旗艦に送られ、それを元に旗艦から各艦に指示が飛ぶのが望ましい。

ならば、旗艦から偵察機が発艦するのはおかしいことではなかった。

「旗艦より入電！本文ツ……」「万ガー二モ戦闘二入ル可能性アリ、戦闘態勢ヲ取ルベシ。但シコチラカラノ攻撃ハイカナル状況ニ於イテモ是ヲ禁ズ」……以上です」

「宜しい、総員戦闘態勢に入りたまえ」

上からの命令ならば是非も無い。慎重な無東も、躊躇うことなく戦闘態勢を命じた。

艦長が指示を出せば、後は全乗務員が艦を動かすための“機械”と化する。

先に偵察機を飛ばしたのは向こうだ。咎められることも無いだろう。

「戦闘とは、対空戦闘配置でしょうか」

「いや、対艦戦闘だ。偵察機一機を撃ち落としても意味はないだろうし、そもそもする必要もあるまい」

共和国艦隊に空母はない。航空兵力は、戦艦や巡洋艦搭載の水上機程度だ。その水上機も主任務は観測か索敵ならば、警戒する必要はない。

その索敵も、視認できる程双方が接近しては対して意味はない。そんな機を撃墜してしまい、開戦など馬鹿らしい。

そして、無東が背後に立つ通信士の確認に応えた後、悲鳴に近い報告が飛び込んできた。

「り、『リシユリユー』主砲塔旋回、此方に向いて……は、発砲ッ！」

「……な……」

無東は絶句した。そして、『天城』よりやや前方を航行する『葛城』、そして駆逐艦『石蒜^{せきさん}』が水柱に包まれた。

「目標戦艦『リシユリユー』……撃ち方よーい……撃ち方始めッ！」

『天城』主砲射撃指揮所で砲術長林垣^{はやしがきゅん}巡は反射的に叫んだ。
無東艦長の命令に従い、すでに砲術科要員は配置に就いており、砲

塔には砲弾も装填済みである。

その直後、無東の戦闘開始命令が指揮所に届く。通信員が読み上げるが、林垣はそんなものを待ってはいなかった。

すでに電探との統合運用は始まっている。CICからは、“敵艦隊”の動きがひっきりなしに送られてきていた。

主砲は未だに自動化の手が伸びていない。主砲射撃システムは、緻密な計算機だった。

何人もの砲術科員の動きにより、『天城』の主砲塔はその真価を発揮できる。

もつとも、現在敵艦隊との相対距離は20キロ前後。戦艦の主砲からすれば“至近距離”だ。天城型の36センチ砲にとっても、リシユリユー級の38センチ砲にとっても。

「着弾、目標の後方100メートル！」

しかし、それと命中率は話が別だ。どれ程相対距離が短ろうと、相手は戦艦。つまり、砲台とは違う。機関を持ち、大洋を駆け回る戦艦なのだ。転舵を繰り返すなり増速するなりして敵弾をかわし命中を狙う。

無論こちらも悠長に停船して撃つなどしない。動き回っている。

戦艦に限らず、砲とは斉射してこそ意味がある。それは威力の集中という意味も勿論あるが、一番の意味は命中率の向上だ。『大和』の46センチ砲だろうが駆逐艦の88ミリ両用砲だろうが、当たらなければ何の意味も無い。

二回目、三回目の斉射が続く。

「三回目か……そろそろ命中が欲しいところだな」

根っからの“大砲屋”である林垣少佐にとって、砲戦は待ち焦がれていたものだ。しかも、相手は太平洋戦争中ですら想定していなかった（そして実際に出くわさなかった）本格戦艦。

身体中の血液が熱くなるのを堪え、林垣は冷静に現状を分析する。

あの一見小心で頼りなさげな艦長も、よく指揮していた。しかし、

「ああッ……『葛城』に直撃弾ッ」

「くそ、先手を奪われたか」

絶叫といった方が正しい報告に、砲術長は舌を打った。彼は間髪いれず叫ぶ。

「第四斉射、撃ち方始めッ」

彼の想いに応えるように、『天城』の四門の主砲が火を噴いた。

「やったか」

無東は思わず叫んだ。彼は以外にも冷静だった。普段気弱な雰囲気を見せているが、今は轟音が響く艦橋に仁王立ちしている。部下が目を丸くするほど、彼の姿は勇ましかった。

『リシュリユー』が水柱に包まれているが、

「ああ、早計だったか」

無東は後頭部を叩く。当たりを逃した子供の様な表情だ。

鋼鉄の塊によって飛び出した水柱が戻った時、無傷の戦艦が姿を現した。

戦艦『リシュリユー』が輝く。38センチ四連装砲が、共和国の魂を運びに来たのだ。

「誘導弾戦に移るか、“業火”^{（いっかく）}、撃ち方始めッ！」

すでに準備は済んでいた。

ナパーム弾の誘導弾版——焼夷弾搭載誘導弾ともいうべき“業火”？型一二基が、後部甲板に設置された一二連装発射基によって射出された。

目標は近く、そして大きい。

尚且つ、“業火”？型は熱探知誘導方式だ。そして戦艦『リシユリユー』では、計八門の巨砲が断続的に火を噴いている。フランス海軍にとって、誘導弾戦とは未知の領域だ。対処の仕様が無く、慌てて主砲塔を向けるも遅すぎた。

次々と命中、共和国の誇る戦艦『リシユリユー』は炎に包まれた。が、あれは燃えているだけだ。浸水も起こっていないし、沈む事はない。

しかし、延焼は止めなければどんどん広がる。軍艦とは、それ自体が巨大な火薬庫なのだ。

戦艦と大型多目的巡洋艦による異種格闘タイトルマッチが繰り広げられていた頃、巡洋艦『天塩』率いる第三護衛戦隊もまた、戦艦『リシユリユー』に突撃しようとしていた。

旗色は良くない。

すでに改松型駆逐艦六八番艦『石蒜』は直撃弾を喰らい大破、沈没寸前。そして艦隊旗艦『葛城』は三発の命中弾を受けていた。

巡洋艦である『葛城』にとって、38センチ砲弾三発は荷が重い――とまではいかなくとも、無傷では済まない。

『葛城』は見る見るうちに船足を落としていった。

「本艦八沈マズ、攻撃二専念スベシ」

内海戦隊司令からの命令に、『天塩』と駆逐艦五隻は動き始めた。目標は基準排水量40,000トン以上の巨艦だ。

『天塩』の配下は改松型駆逐艦。誘導魚雷を搭載しているとはいえ、本来は対潜・対空専門の護衛駆逐艦——いってみれば、艦隊駆逐艦からすれば“格落ち”だった。

それでも、やり方は無数にある。

第八艦隊の思惑を読み取り、共和国艦隊も阻止せんと動き始めた。ド・格拉斯級軽巡洋艦『シャートルノー』と駆逐艦四隻が第三護衛戦隊へと向かう。

そこに『天塩』が必殺の艦対艦誘導弾“雷光”^{らいこう}？型を発射した。“業火”シリーズとは違う、生粋の対艦誘導弾である。

高性能な分調達価格が高く、その配備数は三発だけだったが、その威力は凄まじかった。

立て続けに命中弾を受けた『シャートルノー』は、ボクサーのラッシュを受けたようによろめいた。

駆逐艦部隊を率いる巡洋艦がやられ、共和国駆逐艦群は混乱する。

そこに改松型駆逐艦群が殴りこんだ。彼らは鈍足とはいえ、ここまですぐ艦隊が接近していればそれほど意味はない。

必殺の魚雷は温存し、誘導弾や主砲を使って共和国駆逐艦群に挑んだ。

スルクフ級駆逐艦は基準排水量2,750トン。改松型より少々大きい。対潜・対空をこなす凡庸駆逐艦である。いずれも1950年

代に就役したばかりの新鋭艦であった。

これら駆逐艦四隻――『ケルサン』・『デュプティ・トゥアール』・『シユヴァリエ・ポール』・『デストレー』に、改松型駆逐艦『椀』もみじ・『胡蝶蘭』こちょうらん・『堇』すみれ・『女郎花』おみなえし・『藤袴』ふじばかまが挑みかかった。

駆逐艦同士の殴り合いは、喻えるなら辻斬りだ。双方接近し合って撃ちこみ合う。

しかし、対艦誘導弾・噴進弾を持たないフランス艦隊は出鼻を挫かれた。

手始めに先頭を突っ走っていた『ケルサン』が誘導弾の直撃を浴び、落伍した。続いて『デュプティ・トゥアール』が『椀』と『胡蝶蘭』に誘導弾の袋叩きを喰らって沈没。

フランス駆逐艦群は魚雷を発射したが、動き回る駆逐艦への無誘導魚雷攻撃は難しい。しかし、運悪く次の獲物を求めていた『胡蝶蘭』が被雷した。轟沈はしなかったものの、『胡蝶蘭』は航行を停止する。

次に『堇』が『デストレー』との撃ち合いで艦橋に直撃弾を浴びて戦闘から離脱した。

そこに軽巡洋艦『シャトルノー』を下した巡洋艦『天塩』が乱入する。

巡洋艦に参戦されては、駆逐艦は分が悪い。

結局、フランス駆逐艦群は航行可能だった『シユヴァリエ・ポール』と『デストレー』のみで一目散に退避する他なかった。『ケルサン』は大炎上後沈没した。

一方、第三護衛戦隊群の被害は『胡蝶蘭』沈没、『堇』中破、『藤袴』小破に留まった。そして、『石蒜』も既に沈没。

その後駆逐艦群は休む間もなく、戦艦『リシユリユー』に突撃した。

『リシユリユー』の副砲がそれに牙をむく。『樫』が直撃弾を受け、炎上した。

が、炎上した『樫』は最後の気力を振り絞るかのように、誘導魚雷を発射。残りの駆逐艦群もそれに続く。『天塩』もまた、誘導魚雷を発射した。

戦艦『リシユリユー』は『天城』との戦いに集中しすぎた。それが彼女の敗因だった。

戦艦『リシユリユー』沈没して間もなく、大型多目的巡洋艦『葛城』が焼け落ちるように、炎を吹き上げながら海の底へ消えた。

フランス共和国からの宣戦布告通知が日本帝国外務省に届けられたのは、それから一〇分後のことだった。

第八艦隊側の被害、駆逐艦『石蒜』・『堇』・『樫』喪失。大型多目的巡洋艦『葛城』喪失。戦隊司令内海沖久少将戦死。以下損傷艦・死傷者多数――。

後に“第一次日仏突発戦”と命名された海戦の全容である。

そして、第一ラウンドは幕を下した。

第八艦隊は、そう判断した。

??? 五月蠅い序曲と静かな鎮魂歌（後書き）

・代々木型補給艦^{よしぎ}

基準排水量 4,800 トンの高速補給艦。商船構造だが高性能機関を採用しており、コストと量産性、そして性能のバランスが取れている優秀補給艦である。同型艦は五〇隻以上。東京を始めとする町名・市名が付けられている。自衛用に対潜爆雷投射基と対潜砲、高角砲、機銃を装備している。

・琵琶型補給艦『琵琶^{びわ}』・『洞爺^{とうや}』・『十和田^{とわだ}』・『諏訪^{すわ}』

基準排水量 14,200 トンの大型補給艦。空母状の艦で、主な任務は補給だが搭載する対潜回転翼機により対潜哨戒もこなせる。艦名は何れも湖から命名。なお大型艦だがコストと建造期間を抑えるため商船構造であり被弾には弱い。またいざとなれば災害救助艦ともなる。

??? 三色と紅白の喜劇

フランス共和国との戦争が始まったという凶報は、瞬く間に帝國国防軍全ての部隊に広まった。

作戦行動中の丁部隊（台湾水上艦隊）を護衛する第二警備戦隊群とてそれは変わらず、『K12号』のCICでは船務科員が小声で話し合っている。

現在、警戒態勢は取られているものの、戦闘態勢命令は出されていない。よって、私語を交わしても特に問題はない。常時警戒・私語厳禁は軍人だろうが誰だろうが不可能である。

しかし、あいはらすい藍原慧一を含む士官・将兵らは今一つ実感がわかなかった。

それもそのはずで、フランス共和国は欧州の国家である。植民地も日本近辺のものはすでに失っている。

そんな状態で開戦と言われても、今一つ危機感がわからない。

そもそも“戦争”というからには交戦するのだろうが、一体何処で交戦しろというのか。

まさか、欧州まで攻め入る事はあるまいし、共和国の方もおいそれと日本近海まで接近できない。

大体宣戦布告された以上、仮にフランス共和国艦隊が攻めて来たとしても、インド洋に浮かぶセイロン島に居を構える日本帝國国防軍インド印度洋方面軍が黙って見逃すわけがない。

仮に喜望峰廻り（太平洋行き）で攻めて来たとしても、南洋諸島の帝國国防軍が対処するだろう。

それ以前に帝國の同盟国で、実際に“中華大陸戦争”（今のところ今戦争はそう呼ばれていた）に参戦する動きを見せている英連合王国が、宿敵とも言える共和国艦隊の出撃を座視しているとは思えない。

イギリスとフランスは伝統的に仲が悪いのだ。それが、日仏関係の悪化にも深く関わっている。特に最近のフランスでは共産党が幅を利かせ始めたので、共産党嫌いのイギリスとの関係は冷え切っていた。

また、戦時中は帝國からの輸出物資に頼っていたドイツ民主共和連邦も日本帝國との関係は良好だ。現にドイツは帝國より空母を購入するなどしているし、帝國もドイツ技術を導入している。

対してフランスとドイツの仲はというと、円満とは言い難い。これは少し前までは敵同士だったからというのは勿論あるが、それ以前の幾度かの戦争や対立が底辺にはある。

勿論日本帝國は、こういった欧州事情にはノータッチだ。亜細亜の島国日本では、欧州事情は別の世界なのである。陸上に国境線が引かれ、長い年月をかけてその国境線が生き物のように変わってきた歴史は、島国日本の想像を超えている。そして欧州人には欧州人なりの価値観やスタンスがあるのだ。

一時期とはいえ植民地・占領地経営に手を伸ばしていた日本帝國は、余所様の事情に首を突っ込んでモロクなことにならないことを自覚していた。

明治時代、日本帝國には“脱亜入欧”という言葉があった。これは近代化を急ぐ過程で生まれたスローガンの様なものだが、今では“きんあえんおう近亜遠欧”という言葉が流行っている。

これは現帝國の外交方針、すなわち亜細亜を重視するというものだ。

そして欧州事情には手を引き、静観する。アメリカ合衆国や連合王国、ドイツなどと軍事同盟は組むが、それは俗に言う“集団安全保障”的な軍事同盟であり、個々の事情には帝國は関わらない。

日本帝國も、欧州に深入りしすぎていざこざに巻き込まれるなど御免だった。

ちなみに当時の欧州では、アジアオセアニア^{UNAO}連合に倣って欧州で一つの国家複合機構を造るという構想が囁かれ始めていた。

が、欧州は未だに對ソ戦のダメージが抜け切っていない。しかも、旧ソヴィエト連邦から離脱したばかりの国々（東欧国家）は未だに政權も国力も安定していない。

さらに共産党が根強い国家も多く、王權国家やカトリック^{ヴァチカン}総本山との仲は険悪だった。

他にもイタリア王国は王政が復興したばかりで、国土の復旧に熱心だった。彼らからすれば、欧州統合など二の次だ。

かように、欧州には欧州の事情があった。

だからこそ実感がわかない。

——なぜ今になって、フランスと戦争をせねばならないのだ？

現場の將兵ですら首を捻っていた。

もつとも彼らも軍人であり、始まった以上は戦うことに異論など持たない。国家が定めた相手なら、中立国だろうが友好国だろうが相手になる。

そこに意味など求めない。戦争自体に意味などないのだから。戦争など、大いなる無駄……口にしないだけで、そんなことは誰でも知

っている。

「藍原船務士、第八艦隊が金星を挙げたとは本当ですか？」

「ああ、奴さん、『リシュリユー』を撃沈したそうだ……だが、手を離して喜べないなあ」

交代要員との打ち合わせを済ませてCICから士官室に行こうとした藍原慧一は、電探管制員に話しかけられた。

「はい。『葛城』と戦隊司令閣下を失ったそうですあります」

「他に駆逐艦もやられたらしい。護衛戦隊が頑張ったんだな」

「水雷戦隊の連中が聞けば悔しがるでしょうなあ」

「全くだ。戦艦に肉薄して誘導魚雷をブチ込むのは、本来なら水雷サンの花形だからなあ」

そう言つて、二人揃つて苦笑する。

このような光景は帝國国防海軍籍の艦艇や軍事施設に留まらず、T部隊所属の台湾民主連邦海軍籍の艦艇内でも見られた。

T部隊の旗艦である巡洋艦『西寧』(旧『神通』)には、連絡士官である帝國国防海軍士官も乗り込んでいる。彼から帝國外務省に送られた宣戦布告通知は、T部隊指揮官レン・ホルトク提督へと知ら

されたのである。

「なんにせよ、今回の作戦が終われば……暫くは対潜任務だな。共^ト和国^{リコロール}三色旗を掲げる潜水艦を相手にすることになるのかな……。まあ、何でもいいか」

藍原は小さく独り言を呟くと、背伸びをして士官室へと足を進めた。艦隊司令部が第八艦隊の損害に震え上がっていたなど、藍原には知る由もなかった。

インド半島の南東に位置するセイロン島は、欧州方面からすればインドの入り口であり、UNAO勢力圏内への入り口と言ってもよかった。

このセイロン島は現在日本帝國が直接統治している。一応インドから租借という形になっているが、実際は太平洋戦争中に英連邦軍を駆逐した後占領して以降、つまり約一〇年ずっと帝國の統治下にあった。

後、インド領となるか独立するかはまだ決まっていない。が、少なくとも帝國はこの島を永久統治するつもりはなかった。

このセイロン島には日本帝國国防軍三軍が駐屯・展開していたが、その戦力は申し訳程度のものに過ぎなかった。それは、欧州諸国や中東諸国との軋轢を避けるという意味もあった。

が、その後、混沌する中東への“抑止力”として、米英からの大軍派遣要請があった。

無論帝國は良い顔をしなかった。大軍の派遣はコストがかかるし、日本の防衛が疎かになる。

が、結局押し切られ、中東そのものへの軍事遠征を要請されるよりは（米英は中東に莫大な軍を派遣していた）マシということになり、セイロン島のインド洋方面軍は増強された。しかしそれでも、英米の要求ギリギリの戦力だった。

その内容は国防陸軍一個師団＋数個旅団・大隊（内一個機甲化連隊）他。

国防空軍二個戦術航空師団（戦闘機・攻撃機・偵察機など）・一個戦略航空師団（爆撃機など）他。

国防海軍一個方面艦隊（第一二艦隊）・一個警備戦隊群（第二三警備戦隊群）・二個潜水戦隊他。

第一二艦隊は四航戦（第四航空戦隊）を主力とする空母機動部隊で、二水戦（第二水雷戦隊）なども所属していた。

もともとセイロン島は帝國領土ということになっており、セイロン島住民（シンハラ人他）は“帝國国民”となる。当然住民には帝國国民としての義務、すなわち納税や教育や兵役の義務が課せられる。その代わり、彼らには帝國政府より、東京都民とやら変わらぬ待遇や援助を受ける。

そのためセイロン島の“帝國国防軍”には、現地出身のシンハラ人やタミル人が少なからず含まれている。当然、彼らには日本人軍人と同じ待遇と給与が与えられる。その給与はなかなかのもので、兵役の義務期間（二年）を終えた後も軍に残る者も珍しくはない。

寧ろ、現地のシンハラ語やタミル語を話せる地元出身者は、住民との意思疎通などの面でセイロン司令部からは歓迎されていた。

日本兵にとってはシンハラ語など未知の言語だった。セイロン島は嘗て英国の支配下にあつたため、英語が通じたのがせめてもの救いだ。

現在のところ、ここセイロン島では英語に次いで日本語が普及している。公用語は英語・日本語・シンハラ語・タミル語である。

そしてセイロン島はU N A O 勢力の入り口として、文字通りの意味で“玄関”の役割を果たしていた。欧州や中東諸国との貿易である。しかし、日本帝國国防軍にとって、セイロン島とは哨戒基地や最前線基地とは別の意味も見出していた。詰まる所、実験基地であつた――。

「そろそろかな」

一人の男が、迷彩に彩られた戦車の車体から上半身を出していた。白い狼がペイントされ、その下に大きく“106”と書かれた戦車は外見こそ帝國国防陸軍主力戦車である七式中戦車に酷似していたが、実態は違う。

七式指揮通信戦車改乙型――通称「七指揮戦車改乙」或いは「七指揮車」とも呼ばれる指揮官専用戦車である。

88ミリ45口径砲は健在だが、実際は搭載された強力な電探や通信機器を駆使して戦車部隊を統率する戦車だ。そのため装弾数はか

なり少なく、防弾性能が充実している。

そして真剣な眼差しで空を見ているのがこの戦車の戦車長と戦車部隊指揮官を兼ねる御神春彦中佐だった。

「部隊長殿、対空電探に感有り……」「空狐隊」かと思われます」

「おう……見えたッ」

御神部隊長は嬉しそうに笑うと、上空のある一点を凝視した。黒い点が見える。一つや二つではない。

大きくなつていくそれは、独特のモーター音を撒き散らしながら接近してくる。

回転翼機だ。五式偵察回転翼機“梟”^{ふくろう}。国防陸軍が独自開発した、偵察哨戒用小型回転翼機だった。

「電装手、どうだ」

御神は車内に戻り、子供のように顔を輝かせながら電探と睨めっこをしている青年を見た。

電装手、つまり通信機や数種類の電探を一元管理・担当する役である。

「……はい、できました。目標の位置・座標が対地電探に表示されま

した……かなりの遠方です、訓練用目標のある場所だ、間違いありません」

「そうか」

御神は満足そうに頷いた。

彼らは日本帝國国防陸軍独立第一〇六戦術大隊である。

“独立戦術大隊”は表向きはコンパクトに纏められ（つまり大隊規模）迅速な派遣が見込め、尚且つある程度のマルチな任務をこなせるための部隊編制だった。そして現に、そういった性格を持っている。

が、実態は次世代陸軍戦術や新兵器を運用・研究するための実験部隊である。

そして同時に、最新の兵器と優秀な人材が惜しげも無く集められた精鋭部隊でもあるのだ。

独立第一〇六戦術大隊の発足目的は、戦車部隊と回転翼機部隊の統合運用の開発やテストだった。

より具体的に言うと、回転翼機を戦車部隊の“目”とし、遠方の目標を察知したり、迅速に対応したりするための運用訓練を行う部隊だ。

戦車部隊は「白狼隊^{はくろう}」、回転翼機部隊は「空狐隊^{くうこ}」と呼ばれている。御神は「白狼隊」の指揮官だった。

セイロン島はそれなりの面積を誇り、人口はそれほど多くなく、地理的にもインドに近い。尚且つ気候も良い。資源も豊富で、食料もある程度は自給が可能だ。

補給物資はインドから送るなり海運で送るなりすればいくらかでも届く。

実験には最適の場であった。

そう、セイロン島は新兵器や新戦術のテストの場として、帝國統合国軍省から注目されていたのだ。

そしてそれが、セイロン島を救うこととなったのである。

??? 三色と紅白の喜劇（後書き）

・七式指揮通信戦車改乙型

戦車部隊指揮官専用の指揮専用戦車。七式中戦車の改造型で、八ミリ砲を搭載しているが、大量の通信機器や電子機器を搭載している。通称「七指揮戦車改乙」或いは「七指揮車」。

・五式偵察回転翼機“梟”ふくろう

偵察哨戒用小型回転翼機。回転翼機としては低性能だが、稼働率が高く偵察なら十分にこなせる。コストも低く量産性も高い。

??? 南の海と鋼鉄の鳥

第二艦隊（インド洋方面艦隊）の中核を成す四航戦（第四航空戦隊）は『麗鶴』・『旭鶴』の二隻の超大型空母で編制されている。

雷鶴型は戦後第一世代、というより対ソ戦終戦前から建造が始まっていた空母だ。大型化の一步を辿っていた空母技術の結集とも言える艦で、基準排水量76,500トンの戦艦以上の巨艦である。改大和型（武蔵型）空母での技術が大いに生かされ、戦艦以上の強靱な防御装甲と高速（最高37ノット）を誇る、世界的にも最優秀な空母と言っても過言ではなかった。

もつともその直後に世界初の核動力推進空母聖鳳型が就役を始めたが、それでも強力な戦力であるという点では違いない。

四隻建造され、これに聖鳳型二隻が加わっているため、帝国には当分大型空母建造の予定はない。次世代中型（小型？）空母である煌鳳型の建造も始まっている。

空母に限らず、艦艇の世代交代は精力的に進められているが、流石に空母のような大型艦はおいそれと建造できない。そのため大鳳型や改大鳳型空母も、まだまだ現役に留まる予定だ。

暫くは帝国の空母は聖鳳型・雷鶴型・改大和型ら超大型空母八隻。改大鳳・大鳳型ら大型空母五隻、煌鳳型中型空母四隻の一七隻体制を整える予定である。これに回転翼機母艦や小型空母、揚陸母艦兼用空母が数隻ずつ加わる。

帝國の空母保有数は今のところ世界で二位だ。

世界一位のアメリカ合衆国海軍は核動力推進空母を日本帝國に送れること一年で就役させ、その後続々と就役させている。具体的には80,000トンクラスのユナイテッド・ステーツ級核動力推進空母四隻を中心に、フォレストアル級、ミッドウェー級、エセックス級合わせて艦隊型空母を一九隻を保有している。

これに加え、インディペンデンス級軽空母を八隻保有している。さらに合衆国海軍は、巡洋艦にも核動力を取り入れつつあった。

イギリス連合王国王立海軍は核動力推進潜水艦は就役させたものの、核動力水上艦には興味を示していない。

ロシア共和国は敗戦により戦力を限定されつつも、通常動力ながら大型空母の就役に動いていた。

ドイツ民主共和連邦は日本帝國より空母を購入し、国産空母建造に熱意を注いでいた。

そして日本帝國との戦争状態に突入したフランス共和国海軍はというと、空母戦力はそれ程でもない。

戦艦改造の急ごしらえ的なアルザス級空母『アルザス』・『ノルマンディー』、同じく戦艦改造でしかも練習艦扱いの旧式空母『ベアルン』、そして中型空母『ジョッフル』くらいである。後はアメリカが売却したインディペンデンス級軽空母や護衛空母が数隻あるくらいである。

アルザス級は基準排水量43,000トンの戦艦改造空母で、元となった戦艦が（建造途中の）最新鋭艦だっただけに最大31ノットと健脚だが、搭載機数は五〇機前後である。これはイギリスの装甲

空母に倣い、防御装甲を強化しすぎた弊害だった。

『ジョッフル』は基準排水量20,000トンの中型空母で性能的には悪くないが、所詮は中型空母であり、搭載機数はやはり少ない。仮にアルザス級二隻と『ジョッフル』が出撃してきても、四航戦やセイロン島の戦術航空師団だけでも十分対応可能だと思われた。

幸いなことに、セイロン島方面軍は錬成軍も兼ねており、それは海軍として例外ではない。四航戦には、最新の機体を装備した航空団が展開していた。

さらにこの時ちょうど、未だに練習巡洋艦として現役だった香取型巡洋艦『香取』・『鹿島』・『香椎』で編制された第一練習戦隊が、遠洋航行訓練のためにセイロン島トリンコマリに來航していた。練習戦隊は佐世保の教育総隊に属する訓練専門部隊で、主に練習艦で編制されている。

練習艦には大抵、第一線から身を引いた旧式艦が改装を受けて配属されるが、香取型は当初から練習艦として建造されたフネである。コストを抑えるために商船構造を採用しているので、武装や性能は旧式巡洋艦と比較しても見劣りする。が、“練習艦”ということでは最新鋭の電探を始めとする電子装備が三隻には搭載されていた。そのため、いざとなれば後方支援任務ならこなせる。

無論中華人民共和国そしてフランス共和国と開戦した時点で、帝國は第一練習戦隊を含む全ての部隊に警戒態勢を取らせているから、慌てて訓練用模擬弾をぶっ放すなどという間抜けな事態は起こらない。

最前線に配備・展開している錬成部隊は、大抵現地の防衛や哨戒任

務も帯びている。完全に実弾を非装備の錬成部隊は、内地の一部く
らいなもので、日本列島配備のの錬成部隊ですら、国境付近（千島
や対馬・佐渡島など）の部隊はいざという時に備え、訓練中も（フ
ル装備ではないが）実弾を装備している。

セイロン島には帝國国防空軍の戦術・戦略航空師団の他に、錬成航
空団所属の第〇五錬成航空隊が展開していた。

日本帝國国防空軍では、錬成航空隊には〇番台の番号が振られてい
る。「五錬空」と略称されるこの部隊は、噴式機ジェットを中心に装備して
いる。

具体的に言うと、噴式戦闘爆撃機火龍かりゅう乙型（複座型）やすでに新鋭
機とは言えなくなった初期の噴式機橘花きっか、震電改しんでんかい？型（二五〇〇馬
力級）などを装備していた。

橘花は試作機としての趣が強く、実戦に使用されたことはない。そ
して火龍や震電改も、すでに後続機や改良型が就役しており、生産
も順調に進んでいる。そのため、現存機のひとつが練習機として
使われるか、他国に輸出されていた。

ちなみに現在帝國国防空軍は富士重工ふじに依頼し、噴式中等練習機を
開発中である。正式採用の際は、“初鷹はつたか”の名で採用が決まってい
た。

「ふう、今日もよく飛んだなあ」

ほくほく顔でコロンボ合同航空基地第三滑走路に着陸した震電改より降りて来たパイロットは、さっそく移動と整備に取り掛かった整備員と挨拶を交わして軽い足取りで歩いていった。

「空あいいねえ。キレイだし、青いし……」

青年、月見凍王つきみとうみはのんびりと歩きながら、大きく伸びをした。

「しっかし、まさかセイロンに来ることになるたあなあ……。
慧すい一いちや津具樹つくき、元気にしてるかなあ……。あいつ等、なんでフネにいったのかねえ、フネなんて、飛行機と比べたらずっと鈍いし……。泳いでるだけじゃあないか」

海軍少尉月見凍王は小首を傾げ、兵舎の方に歩いていった。

海軍少尉である月見が、帝國国防空軍五錬空に所属しているのには理由がある。

それは、国防空軍戦術航空軍と国防海軍空母航空団の關係に起因していた。

実は戦術航空軍所属のパイロットは、洋上航法や空母離着陸訓練も受けているのである。

その理由は単純で、いざという時、国防空軍パイロットを空母航空団に派遣できるようにするためだ。

国防空軍と国防海軍は、戦闘機や攻撃機、偵察機や早期警戒機などの機体については、効率化とコスト削減のために共同開発を行っていた。そしてすでに、共同開発の結果就役した機体の配備は順調に進められていた。

無論全ての戦闘機や攻撃機が共同開発されているわけではない。空軍には空軍の、海軍には海軍の運用目的がある。

例えば空母から発艦させるためには、大型すぎる機体や重すぎる機体では駄目だ。さらに航続距離の問題もある。邀撃専門機では航続距離が短すぎて、空母での運用には向かない。邀撃専門と割り切るなら話は別だが。

戦闘機や攻撃機などについては着艦鉤が装備フックされていることを除けば、細かい構造を含めても空・海軍機にそれほど違いはない。名称が違ってくるくらいである。

しかも、最前線の基地でも交換キットがあれば、すぐに空軍機を海軍機に改造できる。その逆も当然可能である。

両軍の開発・研究機関が一体化すれば効率は上がるし、わざわざ別の機体を開発・生産するよりはずっとコストが削減できる。

帝國国防空軍は、元を正せば旧帝國陸軍航空隊と旧帝國海軍基地航空隊の血を受け継いでいる。大元が同じなのだから、仕事も一緒にしておもうというのはある意味当然の結論だった。

こうしておけば最悪、空母航空団が壊滅的打撃を被うつても、戦術空軍から引き抜いて迅速な補充が可能となる。

その逆も然りで、空母航空団を陸に揚げて戦術空軍の穴埋めや共同作戦が行える。作戦運用上も、別々の機体を採用しているよりは遥

かに（現場や補給などの）負担が少ない。

そんな理由で、帝國国防空軍の錬空（錬成航空隊）には海軍人、帝國国防海軍の錬空には空軍人が数割配属されているのだ。“交換留学”のようなものである。同じ戦闘機乗りでも、海軍所属か空軍所属ではだいぶ運用方法や環境が異なるのだ。

勿論他にも、双方が歩み寄る事によって無駄な軋轢をなくそうという目的もある。国防空軍と国防海軍航空隊が予算をめぐって対立しているのもまた事実だからである。

月見が兵舎に戻った後、第三滑走路に新たな機体が牽引けんいんされてきた。それは、帝國国防空軍將兵にとっては馴染みの深い機体、景雲改けいうんかいだった。ターボ・プロップエンジン搭載の高速偵察機である。景雲改乗務員は二人である。この機は五錬空所属だが、性能や装備は実戦部隊に配配備されている景雲改と大差ない。

国防空軍には未だに、“双発噴式偵察機”が配備されていないのだ。国防海軍は一足早く新型噴式偵察機を採用したが、国防空軍での採用は見送られていた。

噴式機はレシプロ機やターボ・プロップ機より航続距離が低い。

国防海軍の場合、配備される場所——つまり空母——自体が移動すればどうにでもなるのだが、陸上航空基地に配備される国防空軍では如何いかんともし難い。偵察機にとって、活動範囲が狭い事は大きなマイナスである。

大型爆撃機を流用した戦略偵察機は保有している。当分はそれで十

分ではないか——と国防空軍は考えていた。確かに景雲改は時速700キロ以上を誇る高速機であり、噴式機以外なら振りきれ。航続距離も及第点だ。

軽い点検が済むやいなや、景雲改三番機は搭乗員二名を乗せて離陸した。

??? 南の海と鋼鉄の鳥（後書き）

・火龍乙型
かりゅう

噴式戦闘爆撃機火龍の複座型。練習機用の？型と、機首に五七ミリ砲を搭載した対地襲撃機用の？型、さらには連絡機用の？型がある。

・橘花
きっか

帝國初の噴式機。試作機としての趣が強く、生産数も限定生産であるため二桁台にとどまっている。現在ではそのほとんどが練習機として錬成航空隊に配備されている。

・香取型練習巡洋艦『香取』
かとり
・『鹿島』
かしま
・『香椎』
かしい

基準排水量5,890トンの練習巡洋艦。商船構造のため性能は低く、武装も貧弱。だが本来の運用目的は練習艦であり、実戦に出ないのなら十分な性能を持っている。現在は帝國国防海軍艦艇の中でも古参に当たるが、数度の改修工事がされており未だに現役。

??? 渚の閃光泥のフネ

『美浜^{みはま}』から射出機^{カタパルト}で射出された“瑞雲^{ずいうん}”水偵（水上偵察機）一番機^{とこゆき}コールサイン「常雪」は、規定された航路通りに澎湖諸島上空へと向かっていった。

この瑞雲は、太平洋戦争中に空母と滑走路不足を補うため、南洋諸島向けに生産された水上機で、250キロ爆弾を搭載できる水上急降下爆撃機でもあった。

南洋諸島の島々は、全てが滑走路が建築できるほど大きいわけではない。爆撃機は勿論、単発の戦闘機を運用できる小型滑走路ですら、建設できる島は限られている。

それに引き換え、カタパルトがあれば滑走路なしで離陸でき、尚且つ穏やかな海面ならどこにでも着水可能な水上機は、南洋諸島にいくらかもある岩礁内やラグーンに展開が可能だ。

しかも滑走路を整備しなくて済む分、展開は早いし負担も無い。おまけに偽装すれば、喻え米軍の偵察機が飛来しても容易に見えないし、仮に爆撃されても新たな機体と機材を輸送すれば一時間足らずで再活動できる。

尚且つ離陸と回収が簡単なため、夜間でも運用できる。

どうやら旧帝國海軍には、瑞雲で夜間爆撃隊を編成し、いざとなれば敵空母に夜間爆撃を仕掛ける計画もあったようだ。しかし幸か不幸か、太平洋戦争ではハワイが帝國の手に落ち、太平洋の制海権が帝國に握られたため、瑞雲爆撃隊がエセックス級やミッドウェー級といった合衆国大型空母に突っ込むことは起こらなかった。

しかし太平洋戦争が終戦を迎え、現在南洋諸島の部隊は防衛用の陸

軍兵力に戦闘航空団、三個警備戦隊群、そして三航戦（第三航空戦隊『雷鶴^{らいかく}』・『雨鶴^{うかく}』）を主力とした第九艦隊、そして五個潜水戦隊が遠洋訓練も兼ねて配備されているに留まっている。

当然、戦後大縮小された水上機部隊はほとんどが回転翼機部隊に再編されるか、解体された。数少ない生き残りの水上機部隊も、ほとんどが内地か亜細亜方面に配置換えとなった。

この瑞雲を含む第八〇九航空隊もその一つで、搭乗員も南洋諸島を飛んでいたベテランだった。

「機長、対水上電探に感有いです。恐らく水上艦隊だと思います。反応は……軽巡洋艦が一、二隻、あとは駆逐艦か水雷艇かと思われます。計三〇程」

「ようし、捉えた……。恐らくは、南中国（中華人民共和国）赤色海軍に違いねえ。流石に連中も、澎湖諸島を無視できなかったか」

「どうでしょう……？ もっと近寄りますか？」

「連中は商船改造型空母を就役させたという話があるが、そいつは確認できるか？」

「未だ。別働隊がいるかもしれません。輸送船団の可能性が大ですね」

唯でさえ小規模である南中国艦隊の戦闘部隊を、さらに分割運用するのは下策だ。戦力の逐次投入は愚策中の愚策。

そんなことは、“戦略”や“戦術”の二文字とはほど遠い奉職をしている瑞雲パイロットでも承知している。
もともと古参搭乗員は、新米幕僚よりも軍隊事情に精通しているものだが。

階級編制変更により、空・海軍問わず、そして陸軍の回転翼機パイロットやSPOすら、航空機搭乗員は最低でも少尉以上の階級に任じられるようになった。

もともとだからと言って、給料や待遇が少尉並になったというわけではなく、搭乗員には搭乗員独自の給料制度などがあった。

無論それでも、パイロットの給料が高い、そしてパイロットそのものが選抜部隊だという点には変わらない。

水上機乗りとはいえ、彼らは“ルフトヴァッフェドイツ空軍も裸足で逃げ出す（と自称している）”帝国国防海軍航空隊だ。

それ以前にパイロットにとって、階級など飾り以外の何物でもない。

「とにかく、接近してみるか」

機長はそう言って、フットバーを蹴った。

日本帝国は欧州諸国の内、イギリス連合王国、ドイツ民主共和連邦、

イタリア王国、さらにはトルコ共和国などと集団安全保障条約を含む各種の軍事同盟を締結している。

特にイギリス、ドイツとの関係は蜜月ハネムーンの域に達していた。

彼らにとつては日本帝國は軍事力（特に海軍・空軍）、経済力、技術力、どれをとつても優秀なパートナーとなり得る大国だった。

そして戦後、いの一に日本帝國に接近した組織がある。

他でもない、ドイツ海軍だった。

“潜水艦Uボートだけ海軍”……そんな屈辱的な渾名を拝命していたドイツ

海軍は、技術は兎も角水上艦隊の運用については稚拙すぎた。

戦艦運用は円熟する前に『ビスマルク』やポケット戦艦を失い、戦力と言えば『ティルピッツ』一隻。

空母は何とか建造したグラーフ・ツェッペリン級二隻のみで、おまけに艦載機は空軍所属。

マトモなのは巡洋艦・駆逐艦戦力のみだ。しかし、やはり水上艦隊の骨子は戦艦若しくは空母である。

しかし、そこに日本帝國が参入したのだ。

アメリカ合衆国海軍、イギリス連合王国王立海軍などの強敵を軍門に下した帝國の海軍技術・技量は、文句なく優秀だった。

同盟国となった以上、ドイツがそれを求めたのは当然ともいえる。

日本帝國もまた、原子力を含むドイツの技術力に興味を示していた。ここに、両国の利害は一致したのである。

ドイツが真つ先に求めたのは、空母を始めとする海軍航空分野であった。彼らですら、戦艦の時代が終わったことを悟っていたのだ。応じた日本帝國は手始めに護衛空母、そして酷使されすぎたため（そして姉妹艦を失ったため）除籍予定だった中型空母『飛鷹』^{ひよう}を譲った。

次に技術者や教導官を派遣し、艦載機も輸出した。

ドイツは瞬く間に、国産空母グラーフ・ツェッペリン級やベルリン級を含む、六隻の空母（内一隻が小型空母）を保有するにいたった。

すでにドイツとイギリスも、日本帝國が仲介を務めることで軋轢も起こらず、友好な関係を維持している。

そして生まれ変わったロシア共和国は、欧州侵攻など全く頭がない。

つまり一応、欧州は平和を維持していた。

しかし、それもフランス共和国が日本帝國に宣戦布告をするまでの話だ。

集団安全保障条約——つまり、二カ国以上に攻め込まれた場合は、此方も二カ国以上で相手取ろう。

そんな関係を、日本とドイツ・イギリス・イタリアは結んでいる。

そして実質的に日本帝國とU.N.A.Oは、南中国と共和国の二カ国との戦争に巻き込まれた。

しかも、両方とも日本は“受けて立つ”側の自衛戦争だ。

この時点で、日本帝國は有利である。
今や一方的な主張による侵略行為が、正当化される時代ではないの

だ。

共和国は「先に攻撃を受けた」と主張しているが、帝國は耳を貸すことなく、証拠映像を国際連合に提出している。

そしてすでにスウェーデンやハンガリーを始めとする中立国が、証拠映像が正当なものであると認めている。

さつそくイギリスやドイツ、さらにはアメリカ合衆国などがフランスと南中国への経済制裁へと動いていた。

「フランスのカエル喰い野郎共は、一体何を考えているのでしょうか？」

ドイツ一の軍港、キール軍港に停泊していた大型巡洋艦『チューリッゲン』の艦橋に、二人の男が立っていた。

話しかけた方は民主共和連邦海軍中佐の階級章を付けている。

「さてな」

長身で細身、一目でゲルマン風だとわかる、大佐の階級章を付けた男がそれに応じる。

『チューリンゲン』副長ヨハン・シュナイダーと艦長オスカー・ウィーヒェルトである。

「我ら欧州十字軍（反ソ連合の通称）は、嘗てあの東洋の大国と共闘し、彼らの技量と技術を学びました。

ヤーパン日本帝國の空母航空隊の技量は円熟の域を越えています。多くのソ連艦艇・戦車軍団が灰燼かいじんに帰しました。

ユニオン・ジャックさらに彼らは英国旗を掲げた戦艦群を水雷戦隊と航空攻撃で撃破し、スターズ・アンド・ストライプス星条旗を掲げた新鋭空母・戦艦群を太平洋に葬り去りました。あのモンタナ級ですら、『ヤマト』と空襲の前に敗れたのです」

「その通りだな副長」

年季の入った風体の艦長は、静かに首肯した。

「実際我が軍と共和国軍が空母戦力の整備に身を乗り出したのは、ヤーパン空母群の活躍に触発されたのが大きいはずです」

「そうだ。潜水艦の魚雷で陸上は攻撃できん。ミサイルの威力にも限りがある。

まあ遠くない未来、核を搭載したミサイルが潜水艦に積まれるかもしれないが……」

「ヤーパンの海軍力は凄まじいの一言に尽きます。そして、そのヤーパンの協力もあってドイツ海軍はこれだけの戦力を手に入れる事が出来ました。

デーニッツ大統領も、水上艦隊整備に意欲を見せてくれています。

……そんなヤーパンに牙をむくなど、連中は莫迦なのでしょうか？」

副長の疑念はもつともだった。

単純に考えて、帝國国防海軍（海外ではIDNJ（^{IDNJ}Imperial Defence Navy of Japan）という呼び名が一般的）と共和国海軍の戦力差は圧倒的だ。

尚且つ遠征せず、防衛に徹すればよい日本帝國は、沿岸警備用の近コルベット海上戦闘艇や国防空軍も使える。

対してフランス共和国艦隊は、コルベットなどの小型艦は補給上の問題で連れて来れない。さらに共和国から帝國まで行く航路上には、幾つもの難所（海象が凄まじく悪い海域）がある。小型艦では容易く転覆するだろう。

おまけにすでに共和国は戦艦『リシュリユー』と巡洋艦『シャートルノー』、新鋭駆逐艦群を喪失している。代償として『葛城』^{かつらぎ}以下駆逐艦を撃沈したが、割に合うか合わないかで言えば合わない。

つまり、共和国本国艦隊に属する改リシュリユー級戦艦『ガスコーニュ』、アルザス級空母、『ベアルン』、そして巡洋艦に駆逐艦・潜水艦しか手駒はない。

勿論本国を空になどできようはずもないから、上記の戦力全てを投入する事も出来ない。

誰もが無謀だと思うだろう。

何しろ日本帝國には一〇隻を超える艦隊型空母と戦艦『大和』^{やまと}、巡洋戦艦二隻、潜水艦群などが健在なのだから。

仮に日本帝國が“攻め”に入ったら、ハワイ占領戦やダッチハーバー攻略戦、ウラジオストク攻略戦などの幾重にも渡る遠征作戦をやったのけた精強な軍隊に押しつぶされるのは必至だろう。

そして日本帝國には揚陸艦隊や陸戦師団、国防陸軍大洋師団（上陸・攻略作戦専門師団）も存在するから、それが可能なだけの戦力を投入できる。

勿論実際にやるかどうかは不明だし、日本帝國からすればフランス本国を占領しても旨味は無い。

が、可能性はゼロではない。楽観は莫迦のすることだ。戦時に置いては尚更と言える。

「しかし、実際にフランスは我が同盟国へと喧嘩を売ったのだ。独日の友好は永久に続くべきものである。無下には出来ん」

「では、我が軍も動くのですか？」

「潜水戦隊はすでに動いている」

ウィーヒェルト大佐の突然の独白に、シュナイダー中佐はギョツとした。

「新鋭艦で固めた部隊だ。潜水母艦も出撃させている。長期的に、共和国に張り付くだろう」

「挑発行為ですよ」

「同盟国に戦争を仕掛ける方が、余程挑発行為ではないかね？」

正論を言われ、若い副長は肩をすくめた。

「今頃ドイツ外務省は、アウゼンミンスターリウム日本大使館と頻繁に連絡を取り合っているのではうな」
ポートシャフト

「恐らくはそうだろう。あの国に恩を売って困る事はない。ヤーパンは約束を反故にしないからな」

艦長はそう言って、水平線を睨みつけた。

??? 渚の閃光泥のフネ（後書き）

・瑞雲ずいうん

急降下爆撃もこなせる複座の水上偵察機。日本帝國海軍が採用した水上機の中ではもつとも最新である。生産は中断されているが、多くの機体が現役で任務に従事している。

・ベルリン級航空母艦『ベルリン』・『ミュンヘン』

基準排水量46,000トンのドイツ国産大型空母。日本から譲渡された改大鳳型かいたいほう航空母艦の設計図を元にしており、外見上は改大鳳型と瓜二つ。ドイツ最大の空母でもあり、その性能は高い。搭載機は八〇機。

・ヒンデنبルク級航空母艦『ヒンデنبルク』

基準排水量24,000トンの中型空母。元は日本帝國客船改装空母『飛鷹ひよう』だが、戦後ドイツに売却された。現在では、強襲揚陸艦も兼ねている。

??? 荒らぶる暴風の疾走

T部隊と中華人民共和国（南中国）赤色艦隊が、航空戦若しくは水上戦に突入している頃、台湾沖を、一隻の軍艦が航行していた。

その軍艦には旭日旗が翩翻^{へんぽん}と翻っており、波をかき分けて進んでいた。

特型戦闘艦『永祚^{えいそ}』。

超高速の、新型海防艦であった。

空母戦力や潜水艦戦力の見直しを図った日本帝國国防海軍だったが、次にその対象となったのは、沿岸警備戦力であった。

有体に言うと、中華大陸やシベリア、果てはアリューシャンからもやってくる、不法漁船や密輸船、さらに侵入してくる潜水艦への対処である。

本来、これらの対処は帝國国防海軍から、海上治安維持機構^{SPO}へと管轄が移っていた。

が、やはり准軍組織では、非常事態には動きづらい。様々な制約があるし、武装も本格的な軍艦艇より心許ない。

周辺国に“准軍組織”と納得してもらうためには、意図的にグレイドダウンさせた兵器を搭載するしかない。実際SPO艦艇や哨戒機のレーダーやソナーは、あえて旧式なものを積まれていた。勿論、予算上の制約もあるが。

勿論、たかが密漁船くらいならば十分追い返せるだろうが、反日思想を掲げる武装集団（今風に言う“テロリスト”）や、本格的な訓練を受けた傭兵・海上ゲリラ、さらには新鋭潜水艦などが相手では、SPOでは手に余る。

やはり、国境警備は軍隊が行うべきだ。

ところが、此处で問題が生じた。

警備戦隊群の展開性の悪さである。

もともと警備戦隊群には、精々が駆逐艦くらいしか配属されていない。あとは海防艦か、改装の回転翼機母艦くらいだ。

その駆逐艦も、基準排水量2,000トンにも満たない松型まつ駆逐艦か、それより少し大型の改松型かいまつ駆逐艦くらいだ。海防艦に至っては、大多数を占める鵠型くで1,000トンにも満たない。

つまり、外洋航行能力に欠ける。おまけに速力も、遅くはないが高速とも言い難い。

大量建造されたので、数だけはたつぷりとあるが、それで補おうにも限度はある。

おまけに近年の潜水艦は、帝国のそれも含め、高速化が進んでいる。水中でも25ノット以上が当然となり、27ノット前後がやっとの海防艦では、余裕があるとはいえない。

が、他の大型駆逐艦は空母部隊の護衛や船団護衛などの任務に割り当てられており、余剰は無いし、国境警備に使うには、却ってオースペックだ。

つまり、何時までも大量生産された“粗悪品”に頼るわけにもいか

ない。このままでは、主力部隊と警備部隊の艦艇のスペック差が、どんどん広がってしまう。

当たり前と言えば当たり前だが、帝國国防軍は、主力部隊の整備や更新に、より積極的だった。

しかし、艦隊のスペックに差が出過ぎることは、兵力運用上好ましくはない。

そこで、主力部隊と警備部隊の差を埋めるとというのが課題となった。そこで、予算の都合もある。

要は、両者の中間的な性能の艦艇を配備することとなったのだ。

今風に言えば、艦隊型駆逐艦よりは小さいが、沿岸警備艦艇よりは大きい——大型護衛艦とも言える艦である。

その第一世代として、建造が認められたのが、特型戦闘艦永祚型だったのである。

此の艦を建造するにあたり、雛型となったのは、何と丙型駆逐艦——つまり、島風型駆逐艦だった。

島風型は、帝國最後の重雷装艦であった。つまり、魚雷を大量装備した艦である。

此の艦は、最高40ノットと高速で、猛スピードで敵に肉薄、魚雷を叩き込む艦というのがコンセプトだった。

しかし、結局は防空駆逐艦（乙型駆逐艦）や松型などの護衛駆逐艦（丁型駆逐艦）の建造が優先され、僅か六隻で建造中止となった。

勿論帝國国防海軍は、今更時代錯誤な重雷装艦を、それも警備戦隊群に配備しようとは考えなかった。

彼らが島風型に目を付けた理由は、その高速性であった。

40ノットというのは高速すぎるが、35ノットもあれば、敵が最新のみ사일艇や魚雷艇を引っ張り出しても十分追いつけるし、広大な海上国境線をカヴァーできる。

四隻一組で高速警備隊を編制すれば、鈍足の駆逐艦や海防艦では不得手な任務にも投入できる。

あくまで主力は鈍足の海防艦でも良い。いざという時のための遊撃戦力として、一つの方面（海軍区）に一個戦隊でもあれば十分と割り切れば、何も何十隻も建造する必要はない。

一ダース（一二隻）もあれば、当面は十分だろう。

ならば、多少は一隻一隻の単価が^{コスト}高くなっても、十分目を瞑れる。

要は、島風型を多少スペックダウンしたフネが最適。そう判断されたのだ。

基準排水量は、島風型より300トン少ない2,500トン。

外見は島風型そっくりだが、後部にヘリ甲板を備えている。

機関も少しスペックダウンしたものを搭載し、最高速力は38ノットに落ち着いた。

兵装は、誘導弾を中心に搭載され、海防艦同様ソナーや対潜兵装も数多く積んでいる。主砲は、最新の12.7センチ単装両用砲が選ばれた。

永祚型は一二隻就役予定で、四隻一組で高速警備戦隊を編制する予定だった。

なお帝國国防海軍は、永祚型が就役し次第、改良型の建造を開始する予定だった。

が、現在は一番艦『永祚』、二番艦『野分^{のわき}』、三番艦『疾風^{はやて}』のみが就役、四番艦『旋風^{つむじかぜ}』、五番艦『雷鳴^{らいめい}』、六番艦『鎌風^{かまかせ}』が艤装中、残る六隻は建造・起工中となっており、高速警備戦隊は一個も編制されていない。

そのため訓練とテストも兼ねて、『永祚』は、たまたま“欠番”（喪失艦）が出た第二〇五警備戦隊に臨時配属されたのだ。

が、新造艦故に故障が頻発し、台湾で整備を行っていた。それが復旧。『永祚』は一足遅く、澎湖諸島に向けて航行を開始した。

なお、『永祚』より一足早く、丁部隊の後を第一三補給隊が先発していた。

よって、『永祚』は全速力で向かったとしても、即座に補給を受ける事が出来るのだ。

しかし、『永祚』にも欠点はあった。

「うおおえ……」

口元を押さえながら、一人の青年が『永祚』の廊下をフラフラと歩いていた。

それを、周囲の水兵が心配げに見つめている。

もつとも、彼らの顔色もまた、酷く悪かったのだが。

誘導弾士鉤北^{かぎきた} 南兎^{なんと}は、心の底から、今回の異動を呪っていた。

同期の藍原^{あいはら} 慧^{すい}一等と同じく、鵜型海防艦に配属されていた彼だったが、つい一週間前に、臨時に佐世鎮^{させほ}（佐世保鎮守府）に属していたこの『永祚』に配置替えとなったのだ。

当時の鉤北少尉は、小躍りする程歓喜した。何しろ、最新鋭の海防艦に配属されたのだ。

1,000トンにも満たない『K118号』から、2,500トンの『永祚』に配属替え。彼が喜ぶのも無理はない。

が、彼は知らなかったのだ。基準排水量2,500トンのフネが、38ノットで突っ走った場合、どれ程の揺れが起こるのかを。

彼が駆逐艦乗りだったならば、多少の揺れには慣れていただろう。が、あくまで近海^{シナ}での作戦が主である海防艦には、最初から凌波性^{じょうはせい}（高速航行時や時化^{シケ}の時でも安定できる性能）など考慮されていない。勿論、荒波の日本海でも作戦が可能な設計にはなっているが、つい最近まで穏やかな太平洋を管轄している横鎮^{よこすか}（横須賀鎮守府）所属の第二警備戦隊群に所属していた鉤北には、荒波に揉まれるという経験が皆無だった。

それは、彼以外の乗務員にも言えた。

寧ろ、最新のシステムを多数搭載しているという理由で、新人や若手が意図的に集められていた。

流石に艦長を始めとした幹部士官には、駆逐艦乗りのベテランが拝命されていたが、中級士官や水兵には、若手や新任が多数いたのである。

「くそ、これじゃあ赤共（赤色海軍）と組む前に、海にダウンさせられてしまう」

長身で温和な顔つきが特徴の士官は、珍しく悪態をつきながら、何とか任務をこなすのだった。

??? 荒らぶる暴風の疾走（後書き）

・永祚型特型戦闘艦「永祚」・「野分」・「疾風」・「旋風」・「雷鳴」・「鎌風」・「稻妻」・「雷」・「嵐」・「竜巻」・「吹雪」・「波浪」

基準排水量2,500トンの超高速海防艦。島風型駆逐艦のスケールダウンともいえる艦で、最高速度38ノット、後部にヘリ甲板を備える。誘導弾も多数搭載しており、対艦・対空・対潜・哨戒などの任務をマルチにこなせる次世代型海防艦。現在は三隻のみが就役しており、残る九隻も続々と就役する予定。

・改永祚型特型戦闘艦

現在計画段階で、八隻が就役予定。永祚型と合わせて四隻の戦隊を五個編制し、一海軍区に一個戦隊ずつ配備される計画（ケ号計画）が立案されている。なお、一番艦の予定艦名は「大鷹」。

??? 足元を掬われ放られる

T部隊は、中華人民共和国赤色艦隊と交戦に突入していた。

空海合同戦闘と言える戦いで、上空では戦闘機同士による戦闘が行われている。

海防艦『K12号』のCIICでは、藍原 慧一を始めとするメンバーが戦況を見守っていた。

とはいっても、戦艦・巡洋艦や空母、戦隊・艦隊旗艦のCIICと違い、海防艦のCIICは狭いし配備人数も少ない。

が、戦闘中は戦闘中なので、新しい情報が次々と表示されたり報告されたりする。

鵜型海防艦くいのCIICは、艦橋のすぐ下に位置していた。密閉されている空間だ。

装甲に守られてはいたが、その装甲も実用的に意味のある装甲と言えるのかは微妙だ。

直撃弾を受ければ、唯では済まされないだろう。もっともそれは、海防艦全体に言えることではあるが。

一昔前の基準でいえば、重巡洋艦もない補助艦艇同士の“小競り合い”も、これだけの戦闘となれば双方に大きな影響を与える。

つまり、澎湖諸島が南中国・台湾のどちらの手に渡るか、である。

「敵オマ八級巡洋艦、沈みます！」

が、少なくともT部隊は優勢だった。赤色艦隊は急激にその数を減らしていく。

無論、脱落艦が出るのはT部隊も同じだが。

「台湾駆逐艦『高砂』^{たかさし}に直撃弾ッ！ 落伍します！」

「敵双発爆撃機、爆撃を開始しました——」

直ぐに情報が艦橋に伝わり、各艦が回避行動を開始する。

爆撃コースに入った敵を高射砲や対空誘導弾が狙いうち、
“陣風”^{じんふう}などの戦闘機が群がっていく。

その時だった。

轟音と同時に、『K12号』の船体が微かに揺れた。

「爆弾が海面に着弾した？……違うかな」

五弓^{ごゆみ}船務長が小さく呟き、CICにいた面々は一斉に口を閉じた。
暫しの静寂ののち、水測室^{ソナール}から絶叫が伝わってきた。

「ぎょ、魚雷発射音、三、いや五！ 接近します——」

報告が終わると同時に、艦がぐぐつと揺れた。

先程の音が、『K12号』の左翼を担当していた僚艦『K18号』

が被雷した音だと気付いた藍原は、額から流れる汗を拭った。

頭が勝手に回転する。

敵の狙いは此れか。

小艦艇同士の撃ち合いは、海上を縦横無尽に駆け巡つての殴り合いだ。

しかし、戦闘速度で複数の艦艇が動き回れば、海面は騒がしくなつてソナーは使い物にならなくなる。

おそらく敵は、澎湖諸島近辺に潜水艦を忍ばせていたのだ。

回転翼機母艦『瑞穂^{みずほ}』から発艦した哨戒ヘリは、すでに澎湖近辺で敵潜水艦を撃沈している。しかし、敵潜水艦の数はもつといたいや、待ち構えていたのかもしれない。

莫迦な。

藍原は絶句した。

潜水艦は、建造が最も難しい軍艦といっても過言ではない。水上艦と違い、建造のノウハウはあまりにも違いすぎる。

つまり、南中国のみで、このような潜水艦運用を行うのは困難だ。

ソヴィエド海軍の生き残りが、南中国にフネほと亡命した——
という話は聞いていた。

が、それにしても、そうそう簡単に運用できるわけもない。

しかも、現在敵機が爆撃に入っている。つまり——。

「海空合同攻撃か！ 器用なことをするなあ」

藍原は思わず天井を仰いだ。
普段なら容易い魚雷回避も、爆撃を回避しつつとなると難易度は跳ね上がる。

敵は爆撃で牽制しつつ雷撃で屠るつもりなのか、それとも魚雷で注意を惹いてから空襲する腹だったのかは藍原にはわからないが、真相はどうであれ、『K12号』にとっては脅威だった。
雷撃だろうが爆撃だろうが、喰らえば大惨事を免れない。

「不味い……」

こんな時ですら、眠そうな表情を隠そうとしない五弓ごゆみ 弓尋ゆみひろ船務長
に、藍原はある意味で感服した。

「はまきた浜北の親爺も、さすがにこれは……操舵手の腕にかかっているな
……」

が、その声は空しかった。

凄まじい轟音と揺れに、CICにいた殆どのものが転倒した。堪えたのは、五弓中尉だけだった。

「命中したぞ」

他人事のように船務長は呟く。

爆弾が命中したのか、魚雷が命中したのかはわからないが、はつきりしていることはある。

音からして、命中したのは艦尾かその辺りだ。要するに。

「機関停止、舵破壊！ 艦尾から喫水が下がっていきます！」

つまり、後ろから沈みかけているということだ。

「総員、退艦！」

アナウンス
放送が始まり、藍原たちは最低限のもの——書類など——を持って、外に飛び出した。

後に“澎湖沖海戦”と命じられた今回の海戦の結果、南中国は澎湖諸島占領のための水上戦力をほぼ喪失した。日台連合軍の勝利である。

特に台湾海軍は、初勝利ともいえる此の海戦の勝利に覆いに奮起した。

しかし、日台側も駆逐艦・海防艦などに少なくない被害を出した。

そしてこれは、鵜型海防艦の限界点を、ものの見事に体现する結果となったのである。

??? 足元を掬われ放られる（後書き）

・陣風 じんぷう

日本初のターボ・プロップ機。艦上軽戦闘機で、二重反転プロペラを採用している。小さいが、あらゆる面で烈風及び紫電改シリーズを上回っている他、空対空誘導弾も搭載可能。噴式機にくらべ小型なため、小型空母でも十分運用できるのが強みである。

???

小休止は戦乱の中で

藍原^{あいはら} 慧一^{すいち}を始めとする戦没艦からの脱出者が、補給支隊の補給艦に救助された頃、海戦の結果はあらかたついていた。

帝國国防海軍の補給艦は、いざとなれば救難艦としての任務も果たせるように設計されている。災害救難艦も兼ねる琵琶^{びわ}型大型補給艦には劣るものの、中型の代々木^{よよぎ}型補給艦でも、海防艦や駆逐艦からの脱出者を収容するには十分余裕があった。

漂流者の場合は、飛行艇や回転翼機隊、さらには潜水戦隊などの手により救助される。

藍原以下数百人を収容した補給艦『白金^{しろがね}』と『神田^{かんだ}』は、艦隊旗艦からの命令を受けて離脱した。後は、澎湖諸島に展開した敵戦力を掃討するだけとなる。

が、その攻撃には巡洋戦艦『駿河^{するが}』・『三河^{みかわ}』を中心とした別戦力が主となるはずだった。

「提督、帝國国防海軍の“出雲^{いずも}”より通信です。「我が潜水艦伊五一八『ごうしお』、敵赤色海軍空母二魚雷二発発射、命中セリ」！」

「やったか！」

T部隊（台湾水上艦隊）旗艦『西寧^{さいねい}』CICで、レン・ホルトク中将は拳を握りしめた。

「南中国軍は輸送船を改装した空母を保有していたという話は聞い

ていたが……日本帝國は、一体どれだけの情報を掴んでいるのだ？」

「正確な数は分かっていませんが、少なくとも二隻は。一隻が『うあん長安』という艦名であることは判明しています。」

しかし、あの空母は輸送船を基にしていますので、五、六隻程度なら建造できるかもしれません。もっとも、搭乗員パイロットと乗務員クルーの確保は別ですが。今のところ、中国空母に航空隊が配備されたという情報は入っておりません」

レン提督が帝國国防海軍から派遣された連絡士官を見ると、連絡士官は淀みなく説明した。

「艦載機の都合がつくかも知らんからな。ソヴィエドも空母は保有していなかったし、米海軍は艦艇以外給与していなかったからな……げいだいじ鯨大寺中佐、新情報が入り次第、逐一私に回してほしい」

「無論、そのつもりです。小職はそのため到此にいるのですから」

「提督、作戦概要に基づき、このまま澎湖諸島に展開する敵に向け、突撃します」

「うむ」

割り込んできた先任幕僚の報告に、提督は大きく頷いた。

「全艦、突撃せよ！」

巡洋艦『西寧』は、元は日本帝國巡洋艦『神通』^{じんつう}である。艦齡三〇年近い老齡艦で、實際日本帝國では練習艦扱いとなっていた（事實姉妹艦の『川内』^{せんだい}は今も教育總隊に配備されている）が、日本も巡洋艦クラスとなると、そう簡単に外國に融通できない。

老齡艦でも給与に應じてくれた分だけ、マシと取るべきだろう。それに武装については、レン提督は満足していた。対艦・対空誘導弾発射用の収束筒^{ランチャー}を搭載し、対潜兵装を大幅に増やしている。無論、CICも増設されていた。基準排水量は5,200トンである。

ちなみに残る姉妹艦『那珂』^{なか}は、前回の対米戦争で戦没しており、艦名は大淀型巡洋艦に引き継がれている。^{おおよど}

その『西寧』率いる水雷戦隊は、進路を澎湖諸島へと向けた。目指すは敵魚雷艇の殲滅、そして陸上基地への艦砲射撃である。

それから三日後、潜水任務部隊「桶狭間隊」^{おけはざま}の潜水艦が南中国海軍残存艦艇の掃討に入っている頃、日本帝國国防海軍は第二一警備戦隊群の損害（事実上の壊滅）と第八艦隊の被害を重要視していた。

そこで、第二一警備戦隊群を再編、というよりほぼ解体させ、乗務員を全て移動させる方向へと動いていた。

どの道、改松型駆逐艦は兎も角、鵠型海防艦はすでに性能的限界を迎えており、次世代艦の計画もすでに始まっている。

そこで生き残った乗務員を、就役予定の永祚型海防艦乗務員に割り当てるという決定を下していた。

そして藍原は知る由もなかったが、呉に仮設された第一高速警備戦隊司令部で作成されている書類の中に、四番艦『旋風』^{つむじかぜ}の船務士の名前欄に“藍原 慧一”の表記があった。

また、第八艦隊についても再編が行われた。増援予定だった独立第八六戦隊がそのまま組み込まれ、第七航空戦隊と第六護衛戦隊も配属された。

本来ならば、七航戦は『煌鳳』^{こうほう}と二番艦『祚鳳』^{そほう}で編制される予定だったが、『祚鳳』以下の煌鳳型航空母艦は未だ建造中だった。しかし、新造中型空母を遊ばせておくのも惜しい。実戦データを取るためにも、航空兵力が存在しない第八艦隊に配備されたのである。
内海提督^{うちみ}が戦死したため、新制第八艦隊の現場司令官は七航戦司令^{おおすみ}大隅 穰^{ゆたか}少将が任じられた。大隅提督は艦隊旗艦に『煌鳳』を指定し、次席司令官に大型多目的巡洋艦『天城』^{あまぎ}艦長を指定した。

『天城』艦長は相変わらず無東^{むとう} 銅鐸^{どうたく}大佐だった。

高雄警備司令部、藍原 慧一はサリアと共に、士官室にいた。

「慧一、奏美^{かなみ}が凄く怒っていたよ」

「だろうなあ」

乗艦を撃沈されたというのに、藍原は呑気に茶を啜っていた。

「でも、僕らがここの海軍区から離れることはないだろうからね。少なくとも、この戦争が続いている限りは」

「……また、別のフネに乗るの？」

「多分。海防艦にはもう余裕がないから違うだろうけど。新造駆逐艦つてのも面白いだろうけど、まだ凧風型なぎかせは建造がどんどん進められている最中だから、就役艦は一〇隻かそこらだろうしなあ」

現在帝國国防海軍は、駆逐艦は凧風型しか建造していない。これは様々な駆逐艦を別々に建造するよりは、多少コストはかかっても、大型多目的駆逐艦である凧風型を数十隻配備した方が、量産性を確保できるし兵力運用上も楽になると考えているからだった。

凧風型は基準排水量4,000トンを超える大型艦でマルチな任務に対応できる分、建造に時間もコストもかかる。しかし、用途に応じて多種多様な駆逐艦を建造するのも色々都合が悪い。

一方帝國国防海軍は、巡洋艦の建造も精力的に進めていた。現在は摩耶型まや航空ミサイル巡洋艦四隻と、雲仙型うんぜんミサイル巡洋艦二隻の建造が進められている。

これら六隻が就役し次第、旧式化が進む高雄型巡洋艦や『北上』きたがみなどを一線級から二線級に格下げする方針を固めていた。

「まさか、巡洋艦にらせてくれるわけでもなさそうだし、だからと言って軍政はないだろうからなあ」

対潜屋の藍原には、そもそも戦艦や空母に乗り込むという思考自体が存在しない。

対潜掃討は航空機は別格とすれば、巡洋艦以下の艦艇の任務となる。以前は大型巡洋艦に対潜兵装など皆無だったが、今は戦艦と空母を除くほとんどの艦艇に対潜兵装が備わっていた。

その例にもれず、摩耶型や雲仙型にも対潜兵装は備わっている。それでもやはり、対潜掃討の主役は海防艦や駆逐艦、或いは駆潜艇などの小艦艇だった。

「まあ、どうせ津具樹つぐきと一緒に、何かにや乗せられるだろうさ。現に『K12号』元乗務員全員に待機命令と移動用意の命令が下されている。浜北艦長はまきたも例外じゃあない。

大かた輸送機か輸送飛行艇で内地に送られた後、新造艦に乗り込まれるんだろうさ」

「じゃあ、離れ離れになってしまうの？」

「まさか」

顔をあげ、藍原はサリアを見つめた。海軍士官にしては長い髪が、ハラリと揺れた。

「君の面倒は僕が見るようになるというのが、ほたるもり蚩森“シヤチヒメ鯨姫”様からの直々の命令だ。

蚩森提督の艦隊は、今頃残敵掃討の任務に入っているだろう。その提督から君に関する新たな命令がされない以上は、僕は君と離れられない。君も一緒に、内地に来てもらうさ」

作戦行動中の提督に、そんな命令を（しかも自身の管轄下に無い士官相手に）下せる暇などあるはずもない。
が、サリアはそれが藍原の本音ではないことくらい知っていた。

「わかった」

褐色肌の少女は、そう言って頷いた。

???

小休止は戦乱の中で（後書き）

・雲仙型巡洋艦『雲仙』・『磐梯』

基準排水量10,000トンのミサイル巡洋艦。主砲も装備せず、
ヘリ甲板も装備していない、誘導弾兵装に特化した新型巡洋艦。高^た
雄型^{かお}を含む旧式巡洋艦の代替艦として建造された。

??? 巨翼たちの増援

日本帝國国防空軍戰略爆撃航空団は、当時の日本帝國の考えやスタンスに、大きく振り回されていた組織だった。

この航空団は第一〇〇一、第一〇〇二の計二個航空師団が編制されており、前者は北海道の美幌、後者は九州の熊本に基地を置いていた。

そして肝心の配備機数だが、二個航空師団合わせて、まず四六式戰略爆撃機“富嶽”^{ふがく}六五機、“富嶽改”^{ふがくかい}一八機。及びその改良型や改造型が一六機。そして、新鋭の五三式戰略爆撃機“斑鳩”^{いはるが}が二七機となっていた。計、一二六機。

そして此れが、日本帝國の有する戰略爆撃機の総数である。

米合衆国空軍戰略空軍と比べると、如何にも少ない配備機数である。

勿論、それ相応の理由がある。

具体的には、戰略爆撃機の生産及び維持のコストの高さ。

そして、損失時の人命の多さ。

最後に、誘導弾の進化だった。

現在、日本帝國の興味は戰略爆撃機から誘導弾へと移り変わっていた。この分野の兵器は進化が著しく、そう遠くない将来、戰略爆撃機並みの射程を誇る誘導弾が誕生することも大いにあり得る話だった。

戰略爆撃機の場合、最低でも六、七名。多ければ一〇人以上の搭乗員が乗り込む。

仮に一〇人乗りこんだ戦略爆撃機を一〇機失えば、単純計算で一〇人も搭乗員を喪失することになる。人命尊重を第一に掲げる帝國国防軍にとって、到底容認できる話では無かった。

實際富嶽爆撃隊は対米戦・対ソ戦に投入され、大きな戦果を挙げる代わりに少くない損害を出している。

唯でさえ生産にコストも時間もかかるというのに、その上人命の損失まで多いとなれば、敬遠されるのも無理はない。

その点誘導弾ならば、何しろ無人兵器なのだから、仮に撃墜されたとしても人的被害は出ない。

その上中華大陸への戦略爆撃は、誤爆の危険が高すぎるためこれまで安易に実行できない。

そして唯の遠方への攻撃なら、空母艦載機や双発攻撃機で十分である。

最近では空中給油のシステムが確立し、空中給油機タンカーの配備も進んだから、双発機で超長距離攻撃も不可能ではない。

双発の攻撃機ならば、搭乗員は精々が二、三人程度だ。三座の攻撃機を一〇機失つても、損失する人員は三〇人で済む。

もつとも、以前の帝國ならば欧州くんだりまで乗り込んでいったのだが、今の帝國にそれ程遠征をおこなう意味はない。それこそ、戦争にでもなれば話は別だが、仮に戦争になったとしても、敵国本土を攻撃してもそれ程旨みは無い。

もつとも、だからといって決して戦略爆撃そのものの準備を怠って

いるわけではない。訓練は欠かしていないし、日本帝國勢力範囲内には可能な限り戦略爆撃機用の大型滑走路が設立されている。そのため、これら戦略爆撃航空団は、いざとなれば各地に展開できるようになっていた。

そして、それが実際に行われることになった。

セイロン島。美幌航空基地から態々飛んできたのは、第一〇〇一戦略爆撃航空師団所属の富嶽八機だった。

このうち、純粹な爆撃機は七機で、残りの一機は対空誘導弾を多数搭載した空中邀撃機“富嶽^{ふかく}？”である。

フランス共和国からの宣戦布告以来、セイロン島の防衛を強化すべきという意見が統合国軍省で持ち上がった。

その理由は、先日になって突如入ってきた情報によるものだった。其れによると、共和国海軍は改アルザス級の空母を建造中であり、此の空母は基準排水量50,000トン的大型空母として就役する予定だという。

艦名は、一番艦が『フランドル』、二番艦が『ブルゴーニュ』。

此れが就役すれば、共和国海軍の空母は、練習空母も含めて『アルザス』・『ノルマンディー』・『フランドル』・『ブルゴーニュ』・『ジョッフル』・『ベアルン』の六隻。

此れに、米合衆国から購入したインディペンデンス級空母の『ボア・ベロー』・『ラファイエット』。

イギリスから購入したコロッサス級軽空母『アローマンシュ』。他、合衆国から購入した護衛空母が三隻。

計、一二隻となる。

無論日本帝國も、改アルザス級空母が就役するまで、この戦争が長引くとは考えていない。其れに就役を急いだとしても、艦載機の配備や乗務員の訓練などで、戦力化まではさらに時間がかかるだろう。

しかし、此れで共和国海軍は、仮に就役中のアルザス級と『ジョツフル』・『ベアルン』の二隻をセイロンに派遣し失つても、その後すぐに新鋭空母が得られることになる。

つまり、仮に攻めてくるとすれば、出し惜しみする必要がない。

さらに、共和国に唯一残された戦艦『ガスコーニュ』が出てこない保証もない。

セイロン島に派遣されている戦力は、殆どが訓練・実験部隊だ。主力は第二艦隊で、第四航空戦隊の『麗鶴』^{れいかく}・『旭鶴』^{きよくかく}を基幹としている。

展開中の航空団も新鋭機で固められており、強力な戦力なのは間違いない。

しかし、倍の数の空母と四つに組んでも優勢かどうかは、やってみなければわからない。出来ることなら、共和国との戦争がはじまつた以上は増援を送りたいのが海幕と統合国軍省の本音だった。

しかし、そう簡単に艦隊は移動できない。ならば、戦略爆撃機の増援を送ろう——という成り行きである。

対米戦争中、富嶽爆撃隊には合衆国戦艦『メイン』を撃沈したという実績がある。もっともこの戦艦は、『大和』^{やまと}と『駿河』^{するが}・『三河』^{みかわ}と合衆国戦艦部隊が撃ち合っている最中に富嶽隊が殴り込み、命中弾を浴びて黒煙を吐いていた『メイン』に攻撃を敢行した結果なの

だから、富嶽隊単独の戦果とは言い難いのだが、戦果は戦果である。

セイロン島には戦略航空師団も派遣されているが、この“戦略航空師団”は、あくまで戦略偵察機や空中掃射機、大型輸送機・空中給油機などを装備した航空隊が主力で、配備されている爆撃機（五一式中型爆撃機“捷龍”^{しやくりゆう}）は多くとも二〇機程度である。

空中掃射機は富嶽改造の四六式掃射機？型“穂高”^{ほたか}で、多数の二〇ミリ機関砲を装備した機だった。

そして、大型輸送機は連山^{れんざん}を改造した四五式大型輸送機“明空”^{めいくう}及び、ジェット化した最新輸送機“明空改”^{めいくうかい}。

戦略偵察機もまた、連山を改造した四五式戦略偵察機“虹雲”^{にじうん}だった。

ちなみにセイロン島には防空及び攻撃任務の戦術航空師団も配備されているが、最新鋭ジェット双発攻撃機が主力であり、訓練も十分ではない。

そのため、攻撃に投入できる航空戦力は、実際は空母航空団と捷龍爆撃機・戦略爆撃機だけだった。

臨時に「五月雨隊」^{さみだれ}と命名された富嶽隊は、セイロン島に到着するや、別の人間を迎えることになった。

インドから飛び立った連絡機に乗って、空幕からの命令書を持ってきた幕僚だ。

四七式連絡機“昂”^{すげ}は、推進式^{プッシュヤ}の双発機である。短い滑走路でも離

着陸できるうえに、最高時速七〇〇キロ以上の優秀機だった。

「こがらし 冨中佐ですね。空幕より派遣されました、かもした 鴨下であります」

少佐の肩章を付けた若々しい風体の男は、目の前にいる「五月雨隊」司令官の中佐を見つめた。

「俺たちをこんなところに連れて来たからには、大した仕事なんだろう?」

一方、こがらし 冨 えいし 詠史空軍中佐はぶっきらぼうに答えた。長身で精悍な顔立ちだが、何処となく荒っぽい。

「ええ。第九七戦略航空師団第六〇七航空隊所属の捷龍と共に、仏艦隊を爆撃してもらいたいのです」

あっさりと言った鴨下幕僚に、冨は珈琲を噴きそうになった。

「仏艦隊!? 向かってきているのか!」

「今はまだ、本国に張り付いているままです。しかし、英国からは近々大艦隊が出港予定だという情報が入っています。訓練部隊にしては、規模が大きすぎます」

「予想される敵戦力は？」

「戦艦『ガスコーニユ』が出るかはわかりませんが、アルザス級空母二隻と『ジョッフル』・『ベアルン』は確実です。他にも護衛空母一隻、軽空母『アローマンシュ』が出師準備を進めているとの情報が入っております。

また、護衛艦艇ですが、ド・グラース級巡洋艦『ギツシャン』以下駆逐艦一〇隻程度だと思われます」

「俺は艦隊運用には素人だが……空母六隻の護衛が駆逐艦一〇隻と巡洋艦つてのは少くないのか？」

「確かに十分とは言えません。帝國の場合、一個航空戦隊（空母二隻）につき一個護衛戦隊（巡洋艦一隻＋駆逐艦六隻）配備していますから。」

共和国側も、本来なら後六隻、いや八隻欲しかったところでしょうが、共和国海軍は空母の頭数をそろえるのに必死で、護衛艦艇の整備までは間に合わなかったようです。

駆逐艦というのは万能艦でして、何も空母の護衛しかできないわけではありません。駆逐艦を失った艦隊は、銃弾はあっても銃は持たない兵士のようなものです」

「つまり、役立たずというわけか」

「駆逐艦のいない裸の艦隊など、訓練目標以下の存在です」

「……詳しいじゃないか」

「小職は空幕配属前は、戦術航空師団の幕僚を任じていました」

戦術航空師団には、対艦攻撃用の攻撃機部隊も属している。鴨下が言っているのは其れのことだろう。

「しかも、捷龍と組むとは……」

「御心配なく、捷龍は良いマシンですよ」

「ジェット爆撃機だからな、羨ましいよ」

富嶽はレシプロ爆撃機とは破格の性能であるものの、やはりジェット機と比べると見劣りする。最新戦略爆撃機の“斑鳩”はジェット機だが、帝国国防空軍はコストのかかる斑鳩の生産には消極的だった。

対して五一式中型爆撃機“捷龍”^{いせりゅう}は、帝国の誇る強力な中型爆撃機だ。双発攻撃機“鎧山”^{がいざん}の拡大版と言っても良く、防弾性能も強力だった。

「捷龍部隊が先に攻撃を仕掛け、その後に迅雷に護衛された富嶽隊が攻撃を仕掛けます。」

もつとも、先制攻撃は空母航空団が担当します。彼らの方が、対艦攻撃能力は上ですからね」

鴨下^{かもした} 芳紀^{ほうき} 空軍少佐の説明は、まだまだ終わりそうになかった。

??? 巨翼たちの増援（後書き）

・四七式連絡機“昂”^{すはる}
連絡機。短い滑走路でも十分離着陸が可能で、その上高速の優秀機。優秀な電探^{レーダー}も搭載しているため、誘導機としても使える。プッシュ式の双発発動機を搭載している。

・四五式大型輸送機“明空”^{めいくう}
連山を改造した輸送機。現在帝國国防軍の主力輸送機である。

・明空改^{めいくうかい}
明空のジェット機仕様。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4522q/>

LaLa7 ～ 深淵の帝國と硝子の世界 ～

2011年11月14日01時05分発行